

名越時敏日史

文久二年壬戌
十月ヨリ十二月迄

日史第十六

(貼紙)
「名越日史」

文久二壬戌十月ヨリ

十二月迄 糺合未済」

名越時敏 (花押)

文久二年壬戌十月中

朔日

暁大鐘ヨリ起、六ツ半出 殿、当番頭御役之御礼申上候、奏者新納波門殿ニテ候、当春御礼申上候筈候処、前日ニ荒田御姉様御死去ニテ御礼得不申上候、依テ今日迄御礼延引相及候、九ツ時帰宅、八ツ前ヨリ菓丸猪之介殿入来、八ツ半ヨリ夕詰ニテ出 殿、仁礼舍人殿代合相勤候、泊リハ島津左膳殿ニテ候、大鐘過代合、直ニ帰宅、今日者伊藤万次郎殿入来候事、夜入四ツ時分臥候也、

二日 晴、

朝六ツ起、講堂勤ニテ四ツ前出勤、講釈済ヨリ奏者稽古式日ニテ 御殿へ罷出於御書院稽古、九ツ半相済、八ツ前御暇、直ニ帰宅、伊藤六郎右衛門殿妻おとくととの・伊藤万次郎殿妻おいなとの被来候、夜入四ツ半臥候事、おつやとの先日ヨリ矢張御滞在候、母上様・おつやとの打寄、暮過拙者方ニテ酒共給候事、

三日 雨、

今日者 御座相頼出勤イタサス、八ツ後ヨリ野屋し

喜次郎殿被来候、

きトイタシ候、暮ニハ帰宅、母上様・おつやとの昨

晩同断、

九月晦日御役替

御用取次見習御納戸心添

四日 雨、

大久保一蔵

朝六ツ起、講堂詰ニテ四ツ前出勤、八ツ前島津兵十

御用取次御小納戸勤御納戸心添

郎殿同道ニテ帰ル、塩屋之松橋来リ候、

中山中左衛門

奥御小姓ニテ周防様御付

五日 快晴、

山田大介

朝六ツ起、今日者御座相頼、今日ハ疊サシ兩人来ル、

当御役ニテ御使番勤

松橋モ来、朝伊藤万次郎殿・町田藤八殿被来、昼松

伊集院中二

岡喜左衛門殿・宮里十兵衛殿・渡辺彦太郎殿被来、

十月三日

七ツ時分ヨリお広との・おふきとの・おつるとの被

御広敷御用人

来、夜入四ツ時分被帰候、おつやとの于今御泊リニ

中西水之丞

テ、先日ヨリ少々御不快ニテ候、

御役御免

山本孫兵衛

六日 快晴、

御広敷番之頭当御役ニテ二之丸へ相勤候様

朝六ツ起、今日者

岩切清太

(忠義公)
太守様五社御参詣ニテ御清故出勤イタサス、昼町田

十月四日

御軍賦役

大脇源五右衛門

御軍賦役

鈴木勇右衛門

同七日

郡奉行ニテ勤方は迄之通

大山角之介

山田平蔵

金山奉行

御用人兼務江戸御供

郡山大助

島津仁十郎

御記録方見習

御目付

仁礼新左衛門

町田直五郎

御記録方添役

御弓奉行

上村休之進

三崎平太左衛門

御目付ニテ日勤ニ不及

御近習番

川上八郎左衛門

伊集院宗之丞

御徒目付

岩切八兵衛

七日 晴

御鉄炮奉行ニテ御用人席

松岡十太夫

朝六ツ起、四ツ時出勤、八ツ時帰宅、朝薬丸猪之介殿一刻被来、暮ヨリ 母上様御方ニテ酒御寄合申上候、おつやとの于今御泊り、

御目付

高田十郎右衛門

病キ

八日 雨

朝六ツ起、当分修甫中無扱諸下地之儀有之、御座相頼出勤不致候、夜入母上様御方昨夜同断、

九日 晴、

朝六ツ起、四ツ八ツ出勤、猪之介殿被来候、夜入昨夜同断、

十日 晴、

朝六ツ起、今日ハ講堂詰ニテ四ツ時出勤、八ツ後帰宅、今日講釈毎之通ニテ山之内作次郎殿被相勤、九ツ後詰席ニ階呉子講義有之、寄合以上詰衆出席之事、拙宅見廻人数、伊地知八郎右衛門殿・新納源左衛門殿・町田直五郎殿・内記様、夜入おむら様拙者(方脱カ)ニテ 母上様・おつやとのナト酒取ハヤシ候、

十一日 曇、

朝六ツ起、五ツ過ヨリ花舜軒御墓参詣、夫ヨリ浄光

明寺

(吉寛調室、權豊実母)
浄国院様・月桂院様へ参詣、四ツ前出勤、八ツ時帰

宅、終日障子張共イタシ候、暮ヨリ薬丸猪之介殿入来、福留七左衛門妻娘とめ近日嫁候筈ニテ列来候、日置屋敷家来山坊主之処へ参候由、薬丸氏四ツ過被帰、無程臥候事、おつやとの矢張御泊之事、

十二日 晴、

朝六ツ起、今日ハ始テ之御目見人数習礼有之、五ツ半出

殿、八ツ時退出、直ニ帰宅イタシ居候処、夕方二階堂部殿ヨリ無扱不時泊被相頼、日入比島津内記様へ一刻立寄明朝出御頼申上候テ直ニ出勤、夕詰ハ部殿ニテ代合候、五ツ過 御引ケ御目付鎌田十五殿ヨリ 承知、無程小倉愛蔵ト申人被来候、訳ハ今晚愛蔵ニ男表坊主ニテ茶之湯所へ相勤、当年ニテ僅十才ニテ勤振等中々世話ニ存、愛蔵ニハ御納戸へ被相勤、隔晩之泊故何歎ト始終気ヲ付居候処、今晚ハ同役之者別テ醉中々世話ニ存候間、内分ニテ承居何歎宜様頼ト之事ニテ候間、表向御目付杯ヨリ承候事共無之候ハ、醉之事ニテ追付醉モ可被醒候間、其内ハ随分

承知イタシ候段返答イタシ候処、別テ之悦ニテ二男
愛徳淡盛焼酎茶家一ツ為持被遣候ニ付、右愛徳目前
ニテ右小茶碗一ツ計給候テ御志別而辱給候間、跡残
リハ被持行候様差返シ候、四ツ半時分臥候事、

十三日 晴、

朝六ツ起、泊り明ニテ候処、内記様朝出ニテ五ツ前
帰宅、四ツ時分ヨリ野屋しきへ参候テからいも取共
イタシ候、主税ニモ参リ、

母上様同断、嘉美行モ参候、吉次郎列参賦候処口へ
瘡出来居候ニ付、風ニ吹レ候テハ如何ト存残シ置候、
然ル処昼過ヨリ風邪氣ニテ打臥、相応之不塩梅ニテ
玄適へ申遣シ直ニ来見候由、拙者・主税同道ニテ暮
帰宅、いもハ相応出来宜候、暮ヨリ拙者方ニテおつ
やとの・母上様御打寄申上酒共給候、四ツ過臥候
事、

十四日 曇、

朝六ツ起、今日モ 御目見習礼、若年寄御見分ニテ

御家老衆ニモ御出御見分候、拙者ニハ五ツ半出 殿、
習礼モ首尾能相済、八ツ時帰宅、大鐘比ヨリ内膳殿
入来、夜入八ツ時分被帰宅候、今日ハ御用有之、左之
通、

当番頭、御役料高百四拾石、奏者番兼務

北郷数馬

詰衆

畠山主計

先度於伏見御鎮静之者共今日左之通り御達シ、

川上源十郎組御小姓与

有馬新七

島津頼母組御小姓与

田中鎌助
(謙力)

円貞二男

柴山愛次郎

新納次郎四郎組御小姓与

彦次嫡子

橋口壮介

右者

三郎(久松)様御発駕前ヨリ尊

王攘夷之説ヲ以種々致造言、諸藩浪人等へモ其筋申聞、京撰辺御通行之節兵ヲ起シ九条家并御所司代へ可致乱妨相企候段、室津御着船之節被

聞召上候ニ付、早速理解人御差遣相成、且

御着坂之上茂御丁寧御諭方相成候得共、逆モ相用候

勢ニ無之、無御扱其方共実ニ勤

王之志有之候ハ内分朝廷之御都合可被成

御伺候間、其内相待候様及度々厚御諭相成、

近衛家へ御参

殿委曲被仰上候処、早速議奏衆御招御談合有之、其

趣

天聴ニ被遊 御達候処、以之外之事候ニ付是非御鎮

静可被遊トノ御旨御承知ニテ、其趣再三御使ヲ以理

解被仰付候処、目前ニテハ承服シ候形候得共、与類

之者共へハ内実ハ急速事ヲ破リ可申ト之御催促之筋

ニ、暴威ヲ以実意等敷申聞候ニ付無扱一同致同意、

(折々力) 権々上京企ニヲヨヒ候始末御国家御難題ハ不及申、

皇国之御為別テ不輕次第、殊ニ御発駕前(ヲカ)訊テ厚ク被

仰出趣茂有之候処、不顧其儀モ右次第別テ不届至極

ニ付、存命候得者鋸挽ニテ被行直礫者共候得共於伏

見被打果候ニ付、士被召放於境瀬戸直礫之格ヲ以テ

死体埋捨申付候、

新納次郎四郎組御小姓与

樋口伝蔵

川上右膳組御小姓与

亡新蔵嫡子

森山新五左衛門

樺山要人組御小姓与

弟子丸龍助

肝付兵部組御小姓与

西田直五郎

右者前条同断付、有馬新七外三人張本之者共へ致同

意、上意打ヲ妨、討手人数へ致手向候処ヨリ被打果

候儀無相違、右次第別テ不届ニ付、士被召放斬罪相

当ニテ於境瀬戸死体取捨之格ヲ以死体埋捨申付候、

島津伊織組御小姓与

柴山龍五郎

鳥津主殿組御小姓与

三島弥兵衛

小番

是枝万助

町田民部組御小姓与

喜左衛門嫡子

吉田清右衛門

鳥津主殿組御小姓与

大島吉之介二弟

西郷信吾

鳥津伊織組御小姓与

伊集院直右衛門

右同人組御小姓与

休悦嫡子

永山万斎

川上源十郎組御小姓与

源左衛門嫡子

木藤市助

鳥津頼母組御小姓与

坂元彦右衛門

川上源十郎組御小姓与

彦八二弟

大山弥助

川上右膳組御小姓与

玄貞二男

林正之進

吉左衛門嫡子

谷元兵右衛門

彦右衛門二男

岸良三之助

鳥津頼母組御小姓与

深見休藏

民部家内叔父

町田六郎左衛門

鳥津壬生組御小姓与

彦左衛門二弟

吉原弥次郎

仲左衛門嫡子

河野四郎左衛門

六郎兵衛嫡子

森新兵衛

川上源十郎組御小姓与

岩元勇助

島津伊織組御小姓与

有馬休八

新番

篠原彦一郎

右者前条同断、不筋儀ヲ暴威ヲ以実意等數申聞候処
ヨリ致同意、上京之企相及候ニ付、京都ヨリ被差下
候上慎申付置候得共、皆共當時ニ相成別テ後悔之趣
被

聞召通、内情実ニ不便之至被思召上、殊ニ今般別段
叡慮ヲ以御参

内、且不容易 御拜領物迄茂被遊重疊結構御事候ニ
付、出格之御取訳ヲ以輕重厚薄之無差別御赦免被仰
付候、此旨難有奉承知、以来吃下改先非可抽忠勤候、

右之通被仰付候条、一統奉承知候様表方へ致通達、

奥掛・御勝手方へ茂可相達候、以上、

十月

(島津久敏)
大藏

公方様来二月

御上洛可被遊旨、從

公義被仰渡候段申来候、此旨表方へ致通達、奥掛・

御勝手方へ茂可相達、

十月

大藏

十五日 雨、

暁大鐘過起、今日者始テ

御目見有之、奏者ニテ六ツ半時出

殿、阿多孫二郎・米良仲之丞御太刀奏者相勤首尾能

相濟候、八ツ前御暇、直ニ帰宅、直ニ花舜軒御墓并

伊藤六郎右衛門殿・同万次郎殿・北郷数馬殿へ一刻

ツ、参候テ八ツ過帰宅、今日伊藤六郎右衛門殿・町

田八之進殿被来候由、暮ヨリおつやとの御寢酒御相

手共申上、母上様前へ御出ニテ四ツ半御帰、無程

臥候事、

十六日 曇、

朝六ツ起、今日ハ当番仁礼舎人殿ヨリ繰替相勤呉候様承八ツ前出 殿、夕詰モ鳥津矢柄殿ヨリ同断ニテ

相勤候、明日者

(久光) 三郎様南林寺ヨリ福昌寺

(奔馬) 金剛定院様・

(奔杉) 順聖院様へ御参詣被 仰出、御供触等ニテ書役富田

伝内・久保勇右衛門・加世田新七残居候、大鐘過二

階堂蔀殿泊ニテ出 殿候得共、拙者鍵持不参候故暮

前帰宅、明日当番頭御供ハ拙者相勤筈、熨斗目・麻

袴、二之丸御中門ヨリ矢来御門御出之筈候、今朝ハ

伊地知八郎右衛門殿入来、夜入過ヨリ月代共イタシ、

毎之通 母上様・おつやとの御寄合申上御寢酒御相

手相勤候、今晚ハ些早御暇ニテ五ツ半時分臥候事、

去ル十一日之夜九ツ前奇妙ノ飛物イタシ候、障子抔

白昼之如ク明リ跡ニテ鳴動、百五十ホンド大炮ヲ近

クヨリ聞タルガ如ク天地ヲ轟シ候、其飛物見タル人

承候得者、燈灯之程計ニテ浮々イタシタル青キ火ニテ通過、鳴リハ何方ニテ為有之歟皆不聞分候由承候、其節直ニ留置候筈之処、留後レ候ニ付今日爰ニ書留置候、奇妙成事モ有之哉、

山本孫兵衛

右者時世ヲモ弁セス

御趣意ニ触候儀種々雑言申立、人心ヲ動遙セシメ候段相聞得候ニ付、御役被成御免吃ト慎被仰付、親類タリ共面会・書通一切不相成候条、此段申達候、以上、

右十月三日

穎娃織部

右者被 聞召通趣有之、

思召不被為叶御役被成御免隱居慎被仰付候条、諸帳面等如例可被申渡旨(喜入久高)撰津殿御差図ニテ候、以上、

右九月十六日

吉川源右衛門

中山甚五兵衛

右者浪人鎮靜之儀等二付、種々誹謗等敷申立候段相

聞得、

皇国之御為モ不顧別テ不屈之至候条、御役被成御免、

吃卜慎罷在候様被仰付候条、此段申達候、以上、

中山中左衛門

大久保一藏

右、当御役ニテ右之通被仰付御用部屋へ相勤、御用

透ニハ御小納戸方へモ致心添候様被仰付候条、此段

申達候、以上、

九月晦日

十七日 晴、

暁大鐘ヨリ起、六ツ半出 殿、今日者

三郎様南林寺ヨリ福昌寺

金剛定院様・

順聖院様へ御参詣御供ニテ

御殿ヨリ二之丸江罷出、又御台所御門ヨリ入御中門

口江罷在居候処、四ツ時御出ニテ矢門御門ヨリ島津（来之）

登前通広小路へ御出、六日町通南林寺へ 大中公（廣公）・

順聖院様へ御参詣、又六日町通広小路ヨリ入来院恰

裏門通、新橋琉球館前通、立馬場通り、大龍寺前通、

さよミ坂福昌寺

金剛定院様・

順聖院様へ御参詣、御道筋本之通御帰殿ニテ、又御

殿へ罷出、八ツ前御暇、直ニ帰宅候得者八ツ後宮里

氏・前おミちさま御出、暮ヨリ平野林左衛門殿久々

ニ入来、訳ハ両三年跡ヨリ慎被仰付、其砌ヨリ川添

へ引入被居候テ、先日御赦免為有之由ニテ被来候、

夜入四ツ時分御帰、四ツ半臥候事、おつやとの御泊

ニテ候事、

十八日 晴、

朝六ツ起、朝出ニテ六ツ半出

殿、帰リ掛奥山藤左衛門殿へ参、九ツ過帰宅、夏菊

苗四品賞帰候、八ツ後町田喜次郎殿彦さんせんのけ

持来、夜入毎之通

母上様・おつやとの打寄酒共給候ナリ、

十九日 雨、

朝六ツ起、朝出ニテ六ツ半出 殿、島津藏人殿へ代合相勤、四ツ過御暇、終日在宿、七ツ時分花岡屋敷役人来、信濃殿未家督不被仰付候ニ付、忌中之節之通引統家督被仰付迄之間、火消承居呉候様承候、是迄御受申上置候事故御沙汰之通承知仕候段、被仰上給候様可被申上旨返答イタシ置候、暮ヨリ毎之通母上様拙者方ニテ御寢酒被召上、おつやとのニモ同断候、夜九ツ前臥候事、

二十日 晴、

朝六ツ起、今日者講堂詰ニテ四ツ時出勤、講訳ハ町田次郎四郎殿ニテ、君子泰而不驕、小人者驕而不泰之章ニテ候、八ツ時帰宅、今朝ハ島津内記様・美代藤兵衛殿・隈元直次郎殿・伊藤六郎右衛門殿入来、七ツ時分松岡喜左衛門殿被来候、今日者夏菊・百合・

せんのけ和合草植替候、暮ヨリおつやとの御寄合焼酎共給候、母上様ニハ暮ヨリ前へ御出、四ツ過御帰、九ツ時分臥候事、

二十一日 雨、

朝六ツ起、六ツ半時分島津右近殿へ朝出相勤候、四ツ後御暇、直ニ帰宅、今朝伊藤万次郎殿、夕方ヨリ松岡喜左衛門殿入来、四ツ時分被帰、母上様拙者方ニテ毎之通御寢酒被召上、おつやとのニハ些御不塩梅之由ニテ暮ヨリ御臥被成候、

一昨日御用人座ヨリ地頭取次御用有之、美代氏被罷出候処、左之通被仰渡候、

出軍御手当帳巻冊

内之浦

右之通被仰渡候条、所中之面々兼テ相貫、臨時之節聊無混雜様相心得、左候テ、猥ニ不取散入念格護可致置候、此旨地頭へ可申渡候、

但、以前被渡置候異国船御手当帳、此涯吃卜可致

返納旨可申渡候、

十月

(喜久久庵)
撰津
(川久遠)
但馬
(川久美)
式部

片折紙帳面一冊

出軍御手当帳

内之浦

急変御手当之次第

一 異変到来之節ハ其所ヨリ御城下江之注進第一ニテ、
万一茂及遲滞候テ者不可然事候条、無役郷士又者家
来之内式人早打ヲ以テ一先口達ニテ御軍役奉行・御
軍賦役へ届申出置、委細者追テ書付ヲ以同断届可申
越候、尤、早打之儀ハ兼テ人柄見合置、至其期聊遅
滞有之間敷候、

但、異国船卸錠候節茂同様可相心得候、

一 何方ニテモ急変致到来、早打夜白急速致往来事候二
付、通路之郷々ハ人馬并松明致手当可置候、

一 何方ニテモ御人数被差出儀候者、御城下御先手六組
之人数四百五十拾人、右物主御小姓与番頭六人、外二

諸郷ヨリ六組之人数四百八拾人、合士以上九百三十拾
人、足輕以下從卒相加凡上下千式百人被差出賦候、
右二付テハ別冊人数賦帳之通ニテ、人馬員数且継場
等之次第被定置候通可相心得、依時機米・大豆等於
出張先致用意儀茂可有之候ニ付、其節ハ人馬減少之
賦候、

但、御先手右之通被究置候得共、其節之依時機拾

式組之内増減茂可有之候、

一 前条之通急速御人数被差出儀候得共、依時機御家老
忝人右備之惣頭(物九)ニテ被差出儀モ可有之候、

一 諸郷物主之儀ハ其郷地頭ニテ、一郷限之人数被差出
候節ハ地頭物主請持ニテ、万端致指揮儀ハ無申迄事
候得共、譬ハ当番三組之郷ヨリ忝組、或ハ一組之内
ヨリ一手ト諸郷組合ニテ人数被差出候節ハ御備組物
主別段可被仰付事候間、兼テ所之者共心得違有之間
敷候、左候テ、万一異変到来事实相達候上ハ、早速

地頭差入指揮可致者勿論ニ候得共、御城下往返茂有
之、依時宜者地頭駈付間ニ不逢内看々事後レ相成候
儀モ難計、右体之期ニ至テハ第一郷士年寄・組頭等

差ハマリ御国名ヲ不失様可取計候、

一 右之通御先手被究置候得共、御領国何方ニテモ万一異変到来、其郷限ニ引受候儀当然之事情得共、自然難及時機茂候ハ、近郷互ニ致救応候儀ハ勿論ニ候、

一 大砲備被差出儀候ハ玉薬等夫々御格護之場所ヨリ可被相渡候、左候テ、大砲備一組之賦、大砲八挺、人数上下百拾八人、中途賄方并人馬差立候儀共前条同様相心得、混雜無之様可取計候、

一 右等異変之依時宜兼テ被仰付置候御手当人数追々幾組モ被差出賦候間、人馬手当并賄方等之儀共無混雜様可取計候、

一 諸郷人数出張付テハ兼テ集場相定置、面々一身之要具カ、リ等入付敷皮又ハ呉座包ニテ銘々木札二名前書記付置右集場へ致持參、其上人馬方之面々相請取可致荷付候、右ハ被定置候貫目御法モ有之候間、法外之荷物持越間敷候、左候テ、銘々小荷駄相立人馬可差立候、勿論止宿之場所ニテハ面々可致請取方候
二 付、無混雜様可相渡候、

一時宜次第中途へ茂可及止宿候間、兵糧人馬方之面々

致手分先立差越、別冊人数賦帳小屋割之向ヲ以テ家陣ニ候者數數見計家主相払、宿之善惡無構御備組之順番ニ一陣一陣引渡、宿毎ニ印札可相立置候、野陣ニ候者陣場其外小屋割等之次第是又普請方引受之事
二 候、

但、人数賦帳之通可成丈家陣イタシ候様可相心得候、

一 御備組被差出候節、人馬雜替之儀ハ今般被定置候通ニテ庄屋・郡見廻等出役可致差引候、尤、人馬寄方等之儀ハ郡奉行ヨリ可申渡候、

一 中途賄方之儀、御城下諸郷御先手拾貳組之人数凡上下千弍百人、屯人屯度之飯米貳合六勺宛、惣勢ニテ白米三石壹斗貳升程ニ相及候間、止宿之場所所役共ニ茂兼テ相心得、居所之者共ヨリ為差出、所横目見届之上シラケ方等百姓・町浜男女江申付焚調胡麻塩ニテ可致賄方候、兵糧方之役々ヨリ諸致差引、右米之儀ハ後日返米可被成下候、

一 諸勢滞在之場所ニテハ最寄御藏々ヨリ兵糧方役々ヨリ出入差紙ヲ以御米相請取、一組毎ニ焚調可致賄方

候、味噌・塩者御当地ヨリ被差廻、野菜・草鞋等ハ

所調申付候間、兼テ其手当可有之候、格別及長陣候
歟又者大勢相成候者別段御手当有之賦候、尤、右届
夫并飯米シラケ方等前条同様可相心得候、

一物主之儀、御家老以下御小姓与番頭等迄夫々持高之
依多少人数召列候儀故一様ニ難究置候得共、諸役者・

戦兵等從卒別冊人数賦帳之通可相心得候、左候テ、

昇預・什長戦兵相中夫被相渡賦候得共、自本人武用

ニ可相立見込之者召列候儀者勝手次第申付候間、夫

丈ハ夫数相減候儀茂可有之候、

一小荷駄之儀、中途不致混雜様屹ト可致取締候、勿論

御領内ニテ者イツモ御備組ヨリ先ニ繰立可差越候間、

毎手ニ兵糧人馬方之者手分ヲ以一手之小荷駄荷物ニ

相付可差越候、

一馬飼料之大豆雜葉糖菓、中途者勿論出陣先ニテ茂所

取替ヲ以テ相渡、以後返銀被成下筈候間、所賄方等

同様之振合可相心得候、格別及長陣候歟又者大勢相

成候ハ別段御手当可有之候、

一御備組ニ入候通人足之外小荷駄口引其外繼人馬之儀

ハ銘々自飯之賦候、

一幕其外賄方諸道具類、是又同断ニ候間致手当可置候、
一所中之面々鉄炮・藻玉・とふらん・玉葉等迄致用意、
御軍役不事欠儀肝要之事情間、兼テ所中之鉄炮数等

取しらへ置、急事之節無遲滯様可相勤候、

但、得道具持越度願出候者業之功拙吟味之上御免

可被成候得共、惣鉄炮ト被仰出候ニ付テハ鉄炮持

越候儀勿論之事ニ候、

一拾壱人間ニ夫壱人宛被下候面々甲冑持越度者ハ可為

勝手次第候、其外半首陣羽織・股引等ニテ可致出立

候、

一銘々支度并一身之要具

一陣笠又者半首

一陣羽織又者野羽織

但、頭立候役職之外者着用勝手次第、

一裁付又者股引

一草鞋

一鉄砲老挺 要具相添

但、玉目四匁・五匁・六匁・八匁・拾匁之間可

持越候、

二十二日 雨、

一兵糧一日分中飯庫裡入付可持越候、

朝六ツ起、四ツ前ヨリ講堂詰ニテ出勤、九ツ前御暇、

但、朝夕食事庫裡ニテ可相濟事、

帰掛伊地知才右衛門殿へ參候、近隣前川為兵衛殿へ

一雨具・渋紙・油紙類

御軍役どふらん并もたま被頼呉候様相頼候、拙者直

但、持越候儀勝手次第、

二頼賦候処、留主故伊地知氏ヲ以相頼候、無程帰宅、

一着替一二枚之間

暮過堀口玄端殿被来候、平佐ヨリおつやとの先日ヨ

一冊(筆カ)一ツ

リ御入来候処、昨日ヨリ些御不快候故申遣候、是モ

一水筒一ツ

無程被帰、御病氣時候ニ感セラレ矢張風邪之御塩梅

一敷皮呉座類之間一枚

ト承候、四ツ時分臥候事、

一干飯一日二日分之間心得ヲ以可持越事、

今晚ハ母上様モ御隠居ニテ御寝酒被召上候、拙者モ

一諸役者弓張挑灯可持越事、

罷出候事、

右一身之要具入付候冊等へ郷名并物頭、何野何某主殿

片折紙帳面一冊

持主何野何某ト姓名書記候木札相付可差出事、

諸郷備一組人数賦

一御手当方当番交代之節、諸役者へ諸事取計為心得人

内之浦

数賦帳并御手当帳為致拜見可置候、

諸郷備一組

内之浦

右之通被相定候条、緩疎有之間敷者也、

物主老驕

從卒六人

御軍役方

文久元年酉十二月

御家老座印

但、私領持等ニテ右從卒外ニ一手之人數召列候儀

勝手次第、

一昇壺本 持郷士壺人

但、乳付白地ニ御紋、裾紺、外城之文字、

一昇預壺人

但、小銃相携、

一談合役壺騎 從卒式人

但、乘馬不立置向者寄馬ヨリ出之、

一貝壺口 貝役壺人

一太鼓壺挺 太鼓役壺人

一什長六人、夫壺人ツ、什長戰兵拾壺人相中、

但、銘々小銃相携、

一戰兵六拾人

内、拾式人伍長、

右、取分一組被差出候節ハ医師壺人被召付候、

一鉄炮六拾七挺

内、六挺 什長六人

壺挺 昇預壺人

六拾挺 戰兵六拾人

外ニ

一玉藥方式人

一兵糧方式人

一普請方式人

一人馬方式人

右四役場主取夫壺人ツ、

但、水汲夫・薪取其外諸用者物主以下從卒并什長

相中夫等、惣人体ヨリ繰廻ヲ以兵糧方其外へ可召

仕事、

右外從卒不召列筋候得共、兼テ武用ニ可相立見込之

者召列度輩者其訳可申出候、手足之勞ニ代リ候迄之

者ハ一切可為無用、

一玉藥箱持夫六人

合上下百四人

内、士以上八拾人 主取夫四人

從卒八人 夫丸拾式人

合乘馬式疋

小屋割

一物主以下惣人数壺坪式人ツ、之賦ニシテ、五拾式坪、

外ニ馬屋式軒、玉藥・兵糧等ハ別段ニ可召置、且雪

隠式拾人間ニ壺坪四ヶ所之賦ヲ以可取立事、

右、老組人数一小屋縦横依地形可取立、木竹等其所
在合ヲ可用事候付細引繩等普請方ニテ見合可持越候、

乍然可成丈家陣又者布屋等ニテ可為相濟事、

右、一組之人数玉葉賦、

一塩硝三拾貳貫百六拾目

斤ニシテ貳百老斤、

発数ニシテ老万三千四百発、

但、八匁筒老発式匁四分ツ、

六拾七人分、老人ニ付貳百発ツ、

一七匁鉛玉老万三千四百

貫目ニシテ九拾三貫八百目、

斤ニシテ五百八拾六斤、

但、六拾七人分、老人ニ付貳百発ツ、

一火繩千三百四拾曲

貫目ニシテ貳拾老貫四百四拾目、

老曲ニ付拾六匁ツ、

内、一塩硝三貫八百五拾九匁貳分

发数ニシテ千六百八发、

一鉛玉拾老貫貳百五拾六匁

发数同断、

一火繩百三拾四曲

貫ニシテ貳貫百四拾四匁、

右、六拾七人、銘々式拾四发ツ、胴乱

入付自分持、

一塩硝六貫四百三拾貳匁

斤ニシテ四拾斤貳合、

发数ニシテ式千六百八拾发、

一鉛玉拾八貫七百六拾目

斤ニシテ百拾七斤貳合五匁、

发数同断、

一火繩式百六拾曲

貫ニシテ四貫貳百八拾八匁、

右、六拾七人分、老人ニ付四拾发ツ、

玉葉箱六荷入付、

老荷玉葉箱 四百四拾六发ツ、

貫目四貫九百拾六匁位箱共二六貫目位夫

老人持、

合持夫六人

外二

一 塩硝式拾壹貫八百六拾八匁八分

發數ニシテ九千百拾式發分、

一 鉛玉六拾三貫七百四五

發數同斷、

一 火繩九百三拾八曲

貫ニシテ拾五貫八匁、

合百貫六百六拾目八分

右 卷人ニ付百三拾六發ツ、六拾七人分、

右 馬付小荷駄五疋

右 同兵糧等之賦

一 米三拾壹石八斗先

打米ニシテ式拾五石四斗四分、

但、三盃入式俵負、小荷駄四拾八疋、

右、上下百四人卷日卷人打米八合ツ、

一 味噌百拾七貫八百四匁 小荷駄六疋

右 同斷卷日卷人ニ付三拾八匁ツ、

一 薪六拾束 長廻三尺

右、一日式束ツ、

一切藁九拾六貫目

右、一日卷疋ニ付卷貫六百目ツ、

小荷駄五疋

一 小糠三石

右 同斷ニ付五升ツ、

一 塩六升

右 同斷ニ付卷合ツ、

小糠塩共

小荷駄式疋

右 日數三拾日分、

右 同兵糧方陣丹荷類之賦

一 陣丹荷式荷

但、卷荷^(卷カ)斗入口切桶式ツ入付、

一 鍋式組卷ツ 米八升焚

但、式ツ入子桶入付、

一 飯貝 中四本・小拾本

一片口サル一組

但、式ツ入付^(子カ)

一 細引百尋

一梅干壹斗

小荷駄壹疋

一塩五升

（土瓶之）
合七拾九人、壹人ニ付壹貫目ツ、

一竹柄杓拾本

一合從卒式拾四人、壹人ニ付五百目ツ、拾式貫目、

右、小荷駄壹疋、

合九拾壹貫目

小荷駄四疋

右之通大概被究置候得共、陣丹荷其外之品所在合ヲ

惣合小荷駄七拾三疋

以一組之賄方相調候丈之品可持越事、

右者先年御備組被改置候処、猶又今般被相定候条、

一山鉞三挺

何篇堅固手当可有之者也、

一鉞式挺

御軍役方

一鉞五本

文久元年西十二月

御家老座

一鎌五本

一藁切

半切紙

一山刀等

志布志二組

一高張挑灯壹張

内、壹組惣物主二被仰付、

一弓張挑灯五組（張方）

申良一組

内、仕長・戦兵之間三張、兵糧方其外式張、

但、大砲隊、

一中蠟式拾挺

高張方

大崎一組

一中小蠟百挺

弓張方

高山一組

小荷駄壹疋

内之浦一手半

一物主壹騎

從卒六人

始良半手

右合一陣

右之通組合ニテ

御出馬之節被召付候条、兼テ被定置候人数賦之内ヨ

リ右之通当番相立、組合郷何篇申談、急速之御用無

滞可相勤候、此旨可申渡旨地頭へ可申渡候、

五月

（喜入入筋）

撰津

（川上人連）

但馬

（川上人美）

式部

御備組一組人数賦帳巻冊

内之浦

右者御軍役御備組人数賦此節御改正被仰付、右之通

被相渡候条、入念致格護置猥ニ不取散様可相心得候、

左候テ、被渡置候人数賦帳并絵図面等都テ差出候様

可申渡候、此旨地頭へ可申渡候、

但、所中へ申渡相済候ハ、其段可被申出旨是又可

申渡候、

五月

撰津

但馬

式部

右三通戊五月十一日肝付兵部ヨリ取次御用有之被相

渡候、左候テ、年寄組頭之内一人被召呼地頭所ニテ

被相渡管候間、申渡相済候ハ、御軍役方へ御用有之

候間御届可申出旨被仰渡候、

一戊五月十一日御用封ヲ以年寄御用申渡候処、同五月

廿日郷士年寄養毛郷兵衛致出府、同廿一日召呼御書

付相渡候事、

二十三日 晴、桜島嶽少々初雪、

暁大鐘過起、写本、四ツ時出勤、四ツ過御暇、九ツ

時ヨリ野屋しき江参候、参掛河俣氏へ一刻立寄候、

野屋敷ハ七左衛門ニモ参候、松木一件等用事、平野

氏ニモ被来、是ハ山一件、夕方被帰、拙者ニモ無程

帰候、夜入写本、四ツ過ヨリ 母上様御方へ罷出、

おつやさま御病キ同断、九ツ過御暇臥候事、

御書取

一 台場之事

右者

先御代神瀬御築之思召被為

在候得共、

御逝去後御取止相成、別テ遺憾之事ニ候、然処當時
危急切迫之世態相成候ニ付テハ、先当分之処沖小島
へ築立度存候得共、台場之儀ハ衆人之死生ニ係リ不
輕事候条、大目付以上ハ勿論軍役奉行・軍賦役中可
否十分可申出事、

一 集成館之事

右者大砲鑄立ハ勿論追々軍艦造立之含モ在之、當時
格別之場所ニ候条、掛役々右等之処深相心得、猶存
慮茂候ハ、十分可申出事、

一 宝藏金五万兩

但、古金、

右操替相成候ハ、拾五万兩ニモ可及候ニ付、内五万
兩者宝藏へ納置、残り拾五万兩拾万兩敷ヲ以テ神社修造
并集成館等当座之用途ニ可備置事、

一 窮士之事

右救之為勘定所其外江一往書役勤等申付有之事候得
共、以来右人数総而造士館・演武館へ致出席候様申

付、造士館ハ教授之印、演武館者師匠之印ヲ以扶持
米相渡、出席帳ハ月末掛側役へ差出候様可有之事、

一 米価之事

右精々尽吟味、今一往直下リ相成度事、

一 諸色之事

右諸色方之儀、掛役々吟味ヲ以取扱之事候処、近比
ヨリ徒目付壹人出席之由候得共、以来側役ヨリ掛申
付徒目付兩三人掛置、時々吟味之形行申出候様可致
事、

二十四日 霜降水、晴天、

朝六ツ起、朝伊藤万次郎殿・薬丸猪之介との被来、
今日者当番ニテ九ツ過ヨリ出

殿、夕詰北郷数馬殿へ七ツ前代合、御暇、直ニ帰宅
候得者又薬丸氏人来候、先日ヨリおつやさま御病氣
故ヨリ今朝書状ニテ申遣候ニ付テ也、余リ深シキ御
病氣トモ不被相伺候、郷十郎ニモ先日ヨリ泊リ居候
得共今日帰、又夕刻隈元直次郎同伴ニテ来、今日角
入イタシ御礼廻帰掛ニテ、酒取替シ共イタシ候、薬

丸氏ニハ五ツ過被帰、四ツ過臥候事、

少々快候、医師ハ先日ヨリ嘉美行ニテ候、

二十五日

御通達之写

朝六ツ起、朝猪之介殿、四ツ時出勤、四ツ後御暇、
帰宅候得者薬丸家おきさとの一刻入来、八ツ後権五
郎殿一刻入来候、暮ヨリ

久池三郎様御名遠慮ニ付、喜三左衛門・喜三次杯ト下ニ
用候儀ハ不苦段申渡置候得共、三之字同唱迄モ都テ
可致遠慮候、

母上様御方へ罷出御寝酒御相手申上候、おつやさま
御病氣少々御快候、昼堀口玄瑞殿ニモ被来被相伺、
夜四ツ時分臥候事、

一御実名
久光公ト奉称候ニ付、光之字者勿論同様之唱者実名
迄モ可致遠慮候、

二十六日 曇、

候、

朝六ツ起、五ツ時ヨリ千石馬場町田家へ参、四ツ時

十月

(川上人封
筑後)

ヨリ講堂詰ニテ出勤、講釈濟御殿へ罷出、今日者奏
者稽古日ニテ御書院へ出候テ稽古二三篇イタシ御暇、
訳ハ夜前吉次郎・徳熊兩人共腹瀉等ニテ不塩梅故也、
シカシ格別念入タル病症トハ思ハレス候、元来吉次
郎ニハ七八日跡ヨリ虫氣風邪等相混シ、寝タリ起タ
リ之上夜前如左、徳熊ニモ三日跡ヨリ些不食少々発
熱、機嫌ハサマデ悪敷モ昨日迄ハ無之候、今朝ヨリ

二十七日 霜降、晴、

七ツ過ヨリ島津権五郎殿・お広との、暮ヨリ薬丸猪
之介殿入来、夜入四ツ半被帰、お広とのニハ泊ニテ
候、先日ヨリおつやさま御病氣ニ付テ右御入来候、
昼玄瑞殿ニモ被来候、無程臥候事、

朝六ツ起、今日者御軍役奉行新納氏ヨリ御用ニテ罷

出候得者御手当帳拜見被仰付候、末川久馬殿一陣之

惣物主ニテ、外物主ハ末川主税殿・志岐藤兵衛殿・

拙者外一誰カ名前未存セス候、大砲物主ハ島津権五

郎殿ニテ候、諸郷備諸役者職掌大概一冊今一日拝借

イタシ罷帰候、皆々拙者ヨリ借入ニテ拜見之筈、本

書ハ明日返納之賦也、物主供廻ハ主従七人也、六人

共家来ニテモ又其内馬駈ニテモ為持候テ不苦、一組

ニ為持候昇ハ其郷駿之昇出軍之節被相渡也、八ツ時

帰宅、今朝葉丸氏・松岡喜左衛門殿入来、八ツ後ヨ

リ暮迄ニ右被相渡候、職掌之大概一冊者写済、是ハ

明日人々借用ニテ被写筈候間、今暫ハ拙者拜見モ不

出来賦候間、暮ヨリ又此末ニ写ス、五ツ半時分迄写、

母上様御方へ被招呼候ニ付、四ツ過迄罷出御寢酒御

相手、お広との今晚被帰候、夫ヨリ九ツ過迄写候得

者残リスクナニ成候間、明曉ヨリ成就之賦ニテ臥候

事、

今日拜見之一冊

片折帳面一冊

諸郷備諸役者職掌大概

一地頭物主

隣郷組合之法有之候得共、先一郷一陣之心得ニテ、

他二不讓如何成大敵モ一郷限之人数ヲ以出陣・居

守共ニ請合候手当備置候儀要務也、

一諸郷物主之儀ハ、一郷限之人数被差出候節ハ地頭

物主請持ニテ、万端致指揮之儀ハ無申迄事候得共、

譬ハ当番三組之郷ヨリ一組、或ハ一組之内ヨリ一

手ト諸郷組合ニテ人数被差出候節ハ、御備組物主

別段可被仰付、異変到来事実相違候上者早速地頭

差人指揮可致ハ勿論ニ候得共、御城下往返モ有之、

依時宜ハ地頭駈付モ間ニ不逢内看々事後レ相成儀

モ難計、右体之期ニ至テハ第一郷士年寄・組頭等

差ハマリ、御国名ヲ不失様可心掛候、

一其郷士家部ハ勿論百姓現夫野町慶賀等迄、貧富無

構御軍役人数其外現人数取調置、御軍役人数之儀

者現郷士麓居住・在居住或他郷中宿・御雇・足輕
稼等之訳審取調卷冊ニ相記置、麓居住・在居住ニ

テ戰兵成兼候者ハ相除、御軍役現人数ヲ三分一出陣、一者救応、一ハ居守ト相定、其内伍法敵ニ組合出陣・居守共ニ救合候様可心得候事、

一他国堺海岸ハ勿論其外逆茂、隣郷境目会軍場或ハ海岸鹿兒島迄何方ヨリ何里、山坂險阻有無且最奇郷之現出陣人数迄取調置、実用吟味可致置候、
一調練者六拾歳以下拾五歳以上、出陣ハ太体式拾歳以上五拾才以下、

一調練ニ緩猛有リ、先卷ケ年ニ一度位来ル何日調練之段前以相達、可成御雇・中宿之者迄モ致帰郷、兼テ被相定置候組合之諸郷一同会合シ、地頭物主等出張ヨリ帰陣迄三日程モ滞在、陣中朝夕一切之式アルヘシ、猛ニハ麓并在居住之御軍役人数其外三分^(A)ニシテ六ヶ月宛非番・当番・浮勢卜定、当番ハ兼テ何時モ出陣之用意可有之故、大砲或狼煙・貝等之合図ニテ急々人数ヲ集メ、郷士年寄以下ニテ一郷或二三ヶ郷会合シ行軍接戦之式アルヘシ、但、粮用ハ自分ニテ腰兵粮・干飯或ハ先方ニテ炊調タルヘシ、各郷会軍場ニテ着到之有無取調、

病氣故障ニテ着到無之者一日之軍食米壹升可差出、遅參之者ハ両度之教練可為致之類、遅速ニ依テ聊賞罰之式アルヘシ、

一他国行軍者備立清烈シ、敵地念遣敷処ニテハ直ニ接戦之用意ヲナシ、昇・太鼓之調子不相乱、中ニ茂戰場ニ至テハ貝・鼓之役者ヲ眼前ニ従へ、徐・破・急進退之調子ヲ下知シ、或昇ヲ伏セ兵ヲ立配ルヲ昇預ニ令ス、夫ヨリ以上接戦之下知等勿論ニテ、人数引揚ル砌ハ速ニ昇^(ラ脱カ)利地ニ立、貝ニテ合図シ、鼓ニ而足早ニ引取ヲ命シテ勝鬨帰陣之式ヲ令ス、

一物主ヨリ什長・伍長・同伍ト席順有リテ等ヲ躰ヘタル聞達ヲ禁ス、
一談合役

平日ヨリ教戦ニ至ル迄万事物主之參謀トナリ、物主差支候節ハ名代ニテ指揮シ、中ニモ諸郷物主之儀ハ常ニ其郷居住之訳ニモ至リ兼候故、專談合役引受万事物主同様可相勤、会軍ヨリ以上実場ニテハ物主之左右ニ随テ差引シテ、一組ヲ二手ニ相分

候時ハ一方之物主ト成、若物主戦死之折ハ直ニ其
一組ヲ指揮折敷セ死戦之用意ヲナスヘシ、其時若
シ御本陣ヨリ御下知之小指ヲ持来候者有之候ハ直
ニ物主同様其指揮ニ従フヘシ、

右職掌故兼テ地頭物主之職分迄相心得、兵機ヲ自
得候様可心掛候、

一昇預

但、夜中ハ高張ヲ司ル、

昇ハ一隊進止之目驗ニテ、古ヨリ其役別テ重スル
処也、故ニ当職之者平生嚴勇衆ヲ威服シ、戰場ニ
テハ如何成猛列之時タリトモ真先ニ進止シテ、戦
兵奮勇之目当ト成ヲ心掛ヘシ、

一會軍場ニテハ早く各物主之傍ニ立顯シ集来ル諸人
数之目驗トシ、着到有之御条書、終テ行軍ト成時
惣勢之真先ニ押立、貝之合図有之候ハ昇ヲ立ナカ
ラ折敷、食事ニ当テ側ニ寄セ、発足之太鼓ヲ打候
時又如前々押行ナリ、止宿着陣之折ハ相図次第ニ
立止リ折敷、発放之節物主之傍ニ押立、入営ハ真
先ニ押入、陣中ニテ戎営前ニ立或引取置、何時モ

其隊之人数出入之節夫々鼓調ニ応シ目当ニ押立ル、

中ニ茂毎朝之惣揃ニハ戎装出来次第先陣ヨリ営外
ニ出ル、折敷タル時接戦之御条書相濟、昇預鼓之
調子ニ応シ昇ヲ進メ候得者諸士是ニ依テ進行ス、
兼テ定之場ニテ太鼓打止候時昇押立折敷、帰陣之
節別ニ替ル事ナシ、実戦ニテモ繰出之規則ハ同斷
ニテ、先陣之昇預敵ヨリ打出ス矢砲ニ無構大砲発
節之間節迄押進メ、物主ヨキ見切之時昇ヲ左右ニ
振り候得者兵士不殘折敷、

但、待戦ハ惣勢繰入次第、鬨之声ヲ揚候時旗ヲ
振り惣陣ニ合図之通スル、是ヲ旗合ト云、

一惣勢既ニ繰詰、旗合之式終テ旗・昇ヲ陣後ニ伏セ
不立顯事也、次ニ勝軍之後歎或無扱人数可引揚旨
御下知有之者、速ニ各隊之昇ヲ利地ニ立顯シ目当
ヲ定、寄セ貝ヲ吹時諸勢帰来ルヘシ、

一貝之役

貝ニ寄貝・漂貝アリ、教戰場・実接戦共二人数ヲ
寄セ集ル為之相図寄セ貝ヲ吹、行軍等節折敷合図
ニ漂貝ヲ吹、

一味方路行軍之時、昼飯所或泊之宿着之節漂貝ニテ折敷合図ヲナス、

一陣中御本営ヨリ薪水取或無拋外用之者差出節、門

番ニ知令ル為ニ送貝ヲ吹、門番所ニテ迎貝ヲ吹キ、又帰來時門番所ニテ送り貝ヲ吹、御本営ニテ迎貝

ヲ吹、何レ茂荷物諸隊之貝役ヨリ老人ツ、交代ニテ相詰、

一訓練・行軍・陣營・接戰場、何レモ物主之傍ニアルヘシ、

一貝之役モ励キ接戰場士卒ニ物主之命ヲ伝ル至重之

役ナレハ、常ニ嚴威〔忠義公史料〕より補相励ミ、臨時不動揺精氣衆

ヲ動候様△相嗜事專要タルヘシ、

一太鼓役

夫太鼓之用ハ一ハ合図ヲ通シ、一ハ足並ヲ揃へ、

一ハ士氣ヲ励ス事ヲ司ル、徐・破・急之三様ニ候、

一徐之調子ハ行軍并接戰場ニテモ徐ニ歩スルノ相図

ニ打之、

一破之調子ハ足早ニ歩ル見切之合図ニ打之、

一急之調子ハ中走ニテ掛リ或引取之相図ニ打之、

一足ヲ留ル之合図ハ太鼓ヲ止ル、其時程節ヲ見テ什

長折敷事ヲ令ス、又立行ク合図徐・破・急之調子

ニ從テ打之、

一太鼓之役ハ矢砲励敷戰場ニテ少モ不動揺、物主之下知無テモ己カ見切ヲ以一隊ニ徐疾・進退ヲ命ス

ル至重之役ナリ、常ニ物主之前ニ在テ威嚴衆ヲ服候様可相励、

一行軍ハ常ニ物主之傍ニ在テ、徐・破・急之調子ヲカヘテ兵之歩行或旗ヲ進ル合図ヲナシ、止ヘキ合

図之時ハ打止ル、可立行相図ハ又打立ル、是以危

地行軍ニ限ル、陣中ニテハ毎朝繰出シニ其日御旗

本方当番之太鼓〔忠義公史料〕より補役門番所ニ在テ繰出シ、太鼓△

ヲ徐調ニ打之、戰爭之砌ハ門外ヨリ直ニ徐・破・

急之調子ヲ打テ大砲発節之間合迄押詰、或兵勢ヲ

盛ニスル為ニ將之令ニ仍テ烈ク破声ヲ発スル事ア

ルヘシ、扱物主之傍ニ付テ戰隊之下ニ押行、追留

之後歟或無拋戰兵可引揚砌ハ昇ヲ立顯シ寄貝ヲ吹、

是ヲ聞テ惣士卒後ヲ見返リ、什長可引揚令ヲナシ

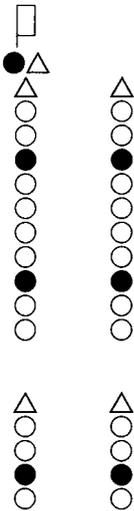
タル時、太鼓役直ニ急・破調子ヲ打テ兵之足並ヲ

揃ルベシ、

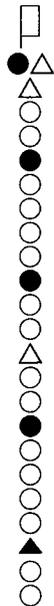
一 什長

訓練・実戦・行軍ニモ早ク令ニ通シ身ヲ以テ士ヲ令ス、訓練場ニテハ屯場之内夫々定之場所ニ順々詰寄セ銃発之間節詰ルニ、尚又什士ニ銃調ヲ命シ操打ニモ及候ハ進止之間節身ヲ以令シ、銃ヲ打哉否玉込シ先之方ニ踏出シ発銃ヲ令シ、何迄モ如此間節詰リ一文字ニ成テ折敷テ刀鍵之業ヲ令ス、物主之手許ヨリ寄セ貝ヲ吹タル時、昇ヲ目当各太鼓之調子ニ応シ静ニ什列ヲ正シク引集ルヲ令ス、

一 何レモ自身之銃ハ放事ナク要銃トシテ、敵ノ将吏又ハ目ニ立ツ武者ヲ覘撃ス、二三行ニユキ狭路ニテハ一行ニユク事図ノ如シ、



狭路



一 昼飯之合図・着陣在營之作法、何レモ身ヲ以テ早ク合図ニ通シテ士ヲ令ス、接戦ニ至テ教戦之格ニ同ク、別ニ子細ナシ、

一 大砲組ニテ火薬箱惣支配ト成ルモ、自身銃ヲ負、守砲士ト共ニ大砲ヲ守衛シ、兼テ拾人之見締ト成リ、玉葉之不足ナキ様ニ出入ヲ下知シ、或ハ手早ク取収ル事ヲ司ル、

一 伍長

假令平日互ニ中悪敷者ニ候共、一旦同伍組合之上ハ如手足合体シ、兼テ之約束戰場救應進止分合之次第什長之令ニ従テ互ニ助合、俱均シク鋒先ヲ強スヘシ、尤、伍中ニ大法ヲ犯候者同罪之御法有之候得者能々兼テ約束ヲ堅スヘシ、

一 戰場ニテ若什長戦死候者其列之伍長代テ九人之指揮ヲナスヘシ、若近キ接戦場ニテ於戦死ハ二伍共ニ無ニ切込、当之敵不得打ハ捨殺之罪科タルヘ

シ、

一 伍中長病氣・他行或死去或ハ五拾歳以上之者有之候者速ニ物主ヘ可申出、

但、四人迄ハ伍之場ニテ有之、三人ニ及候ハ外

之組合ニ忝人ツ、可相付、若同伍之中嫡子等致

成長式拾歳以上相成候砌六人ニ及候迄ハ可為同

伍、七人ニ及候節兩人共ニ他組ニ付ベシ、

一大砲隊之守砲士、当番ハ煙火黒煙之中四方ニ眼ヲ

配リ、不意来廻者アラハ火薬惣支配ト共ニ敵之目

ニ立者ヲ覘打スル之職務ナリ、

一 玉薬方

兵糧一切ヲ兼司シテ玉薬方支配ニ引合、銘々之火

薬鉛丸馬ニ付、主取夫忝人・足輕忝人宛引従ヘ、

行軍・陣營共ニ出入無滞取締スヘシ、

一 平日自筒ニテ御軍役相勤候者之玉目書出サセ、玉

目之大小ニ随テ銘々名前ヲ分チ并大砲隊之火薬取

聚メ夫々荷作試置、分数組合候上ニテ相渡、無混

雜様入念可取計、

一 右之次第ヲ以教戰陣中無混雜様相渡事ヲ支配シ、

陳中ニ而者時々其隊之夫ニ為持、士ヲ忝人宛宰領

ニテ差遣スヘシ、

一 陣中ニテハ火災之無キ所ニ置、矢砲之飛来候念遣

敷方ニハ土居ヲ筑ヘシ、

(築カ)

一 陣中何時モ玉薬渡付次第速ニ残分ハ荷作シ、出立

之用意片時モ不可怠、

但、道中人馬之儀ハ前以人馬等差越、無滞様世

話可有之候、

一 兵糧方

兵糧方支配ニ引合、兵糧・賄具・人馬宰領夫々相

円メ、大訓練之節ハ前以ヨリ町家ニ役シテ別ニ主

取夫連レ越、食用之都合ヲナシ或ハ行軍之中央ニ

押行キ、各隊之足輕夫ニ庫(總脱カ)之類ヲ每隊ニ取遣シ、

汁ヲ陣丹荷ニ入レテ庫裡ニ取添遣ス、

但、一日中之訓練ハ不及此儀、腰兵糧タルヘシ、

一 帰陣ハ何ヨリ先刻限、前以汲炊道具荷作候置無混

雜致下知、会軍場ニテハ諸隊掛之人數迄差越、自

国行軍之内ハ郷々二人數ニ応シタル賄食ヲ命スヘ

シ、

一他国境ニテハ最寄々々ヨリ米請取、前文通之取締

ニテ出行ス、其他領之内ニテモ無念遣先ニ差越、

營中汲炊之都合ヲナス、人馬統難成所者通スヘシ、

一普請方

万事普請方支配ニ引合木屋取ヲ司ル、急成時ハ出

軍ニ先立事一日、緩ハ四五日先立、夫々普請方夫

卒迄引連レ出立、橋々渡場之舟・歩渡之瀨踏ヲナ

シ、敵地行軍之時ハ止宿之形勢ヲ試ミ、或不用心

之場ハ屋ヲ壞チ垣ヲ結、野陣之節ハ地勢ヲ見テ雜

卒・陪卒ヲ役シ木竹ヲ切ラセ飯ニ風雨ヲ防之營舎

ヲ掛ル、陣中ニテハ当番夜廻リ之士卒ヲ支配スヘ

シ、

一人馬方

人馬方支配ニ引合荷物一切ヲ兼司シ、荷物人馬并

ニ宰領・足輕・夫丸引從ヘシ、

一大調練并會軍場ニテ諸士銘々之荷物相請取、取分

各馬ニ付支配シ、陣中着之後ハ印ニ從テ陣々二分

配シ、帰陣之時又々相請取、荷作シテ人馬ニ負セ

引返ル事ヲ司ル、

但、陣中ニテハ人馬之取締ヲ兼ル、

右ハ職掌之太概ニ候間、猶銘々職分之精力ヲ尽シ

兵威ヲ増候様可心掛事、

二十八日 霜晴、

朝六ツ起、松岡喜左衛門殿朝入来、同道ニテ出勤、

朝猪之介殿ニモ入来、昼主殿殿・権五郎殿入来、夜

猪之介殿・玄瑞殿入来、四ツ過被帰、おつやさま御

病氣余リ御替無之候、九ツ時分隊候事、

二十九日 晴霜、

朝六ツ起、朝出ニテ六ツ半出 殿、泊明堀四郎左衛

門殿へ代合相勤、四ツ後御暇イタシ候、朝猪之介殿

入来、昼二階堂弥六殿・同弥九郎殿・おこととの・

玄瑞殿入来、お筆も昼ヨリ夜迄、四ツ時分帰候、無

程隊候事、

日史第十七

三日 雨、

文久二年壬戌霜月中

名越時敏 (花押)

朔日 霜晴、

一 御用人勤

朝六ツ起、講堂詰ニテ四ツ前罷出、八ツ時帰宅、夕

一 奏者番兼務是迄之通

方堀口玄瑞殿入来候、おつやさま御病氣日々御快候、

名越左源太

夜入母上様御方ニテ御寝酒御相手申上、四ツ時分臥

候事、

仰付、御役料高是迄之通被下置候、

十一月

摂津

二日 大霜、屋中之水迄氷、

朝六ツ起、朝出ニテ六ツ半出 殿、堀四郎左衛門殿

御通達之写

へ代合相勤候、四ツ過御暇、直ニ帰宅、昼主殿殿・

権五郎殿・玄瑞殿・藤兵衛殿・内膳殿・六郎右衛門

給地高取納之儀被定置候御法モ有之候得共、高主相
対熟談之上直成取究代銀致引結候儀モ有之由候処、
近年諸色ニ列自然ト高料相成、又ハ遠路之百姓共馬

殿・万次郎殿被来候、明日撰津殿ヨリ御差図御用致

(喜入久高)

付越ニ令難渋、過当ト乍存高主直究通致引結候哉ニ

承知候、御取次ハ島津仁十郎殿ニテ候、夜入九ツ時

相聞得、当年ハ取納央之事ニテ、是迄右様過当之代

分臥候事、

銀取納為致者茂可有之候得共、此節ヨリ真米壹石ニ

一 たんたとふ野屋敷山之雜木三ケ一丈道ヨリ東之方、

下伊敷之長太郎ト申者へ売払、今日百四両貳部ニ約

付拾七貫文ヲ限ニテ致引結、赤米之儀ハ右ニ準シ致

定相済、近々之内ヨリ切方打立筈、

引結候様被仰付候、右ニ付テハ直成下料相成候ヲ幸

ニ存シ、愚昧之百姓共代銀引結之儀押々申出候茂難
計候ニ付、現米持越候テモ雜費不相掛場所柄之者共
ハ心得違無之様郡奉行ヨリ屹ト申渡、現米取納可為
致候、右者当時米価高料ニ相成輕キ者共及難洪候段
被

聞召上、別段御蔵米迄モ申請被仰付、一同融通相成
候様被遊

御配慮候折柄、給地高代銀取納之直成過當有之候テ
ハ米価引下候期無之不可然事候ニ付、右之通被仰付
候条其段深奉汲受、難有御趣意之詮屹ト相立候様取
計可有之候、此旨支配中へ申渡、奥掛・表方江茂可
相達候、

十一月

撰津

一三日御用人勤被 仰付候テ、八ツ後御下り後ヨリ御
礼廻、大鐘時分帰宅、八ツ後ヨリ客人川上源十郎殿・
町田民部殿(入寇)・島津権五郎殿・加藤権兵衛殿・伊藤六
郎右衛門殿・同万次郎殿・右松十郎太殿・伊藤整之
介殿、御用人座ヨリ書役兩人、隈元直次郎殿・美代

藤兵衛殿・町田八之進殿・葉丸猪之介殿、其外家来
共段々来候、夜九ツ時分臥候事、

四日 快晴、

朝六ツ起、朝兒玉佐平次殿・松岡喜左衛門殿被来候、
五ツ半出 殿、八ツ後川上源十郎殿・五代孫之丞殿・
伊藤整之介殿被来、山下伊右衛門・辻元新兵衛来候、
暮ヨリ内膳殿・児玉氏、五代モ夜又被来、各九ツ時
分被帰、無程臥候事、
八ツ後者上方廻々礼廻イタシ候、

五日 晴、

朝六ツ起、五ツ前主殿殿被来、五ツ時藤兵衛殿被来、
内之浦地頭所与頭蓑毛郷兵衛来候、四ツ八ツ出 殿、
八ツ後退出ヨリ下方礼廻、七ツ過帰宅、今日見廻人
数菱刈空之介殿・二階堂源太夫殿・伊藤彦助殿・河
俣仲次郎殿、おゑいとのおふきとの・おみつとの
三人同道ニテ被来候、宮之原善右衛門ニモ来候、拙
者事、夜前ヨリ服下(腹カ)シニテ服中冷タル様有之候故、

こたつに当り又温石ヲ入、風呂ニモ入薬用等イタシ候、暮ヨリ母上様御方へ罷出、日史留ニテ飲食ハ何モイタサス、御寢酒召上り共拜見ニテ御物語リ申上、夜四ツ時分臥候事、

六日 霜降、晴、終日嚴寒、

朝六ツ起、四ツ八ツ出勤、直ニ帰宅、今日ヨリ張付之才助来候、処々襖未成就不相成候ニ付張方ニテ候、暮ヨリ 母上様御方へ罷出、毎之通おつやさま漸々御快候、

公義仰出

大目付江

一 今度衣服制度御変革左之通被仰出候間、(廿三カ)明廿八日ヨ

リ書面之通ニ可相心得候、

一 颯斗目・長袴ハ総テ被廢止事、

一 正月元日二日装束、

一 正月三日無官之面々御礼服紗・小袖・半袴、

一 正月四日ヨリ平服、

一 正月六日七日服紗・小袖・半袴、

一 正月十一日御具足御祝服紗・小袖・半袴、

(統徳川実紀)より補
一 二月朔日装束、△

但、御礼席へ不拘面々ハ服紗・小袖・半袴、

一 三月三日服紗・小袖・半袴、

一 四月十七日

御参詣之節装束、

但、殿中ハ服紗・袷・半袴、

一 五月五日染帷子・半袴、

一 七月七日染帷子・半袴、

一 八朔染帷子・半袴、

(統徳川実紀)より補
一 九月九日花色二無之服紗、小袖、半袴、△

一 御神忌且格別重キ御法事等之節ハ是迄之通装束、

一 御定式

御参詣之節ハ諸向共服紗・小袖・半袴、

一 勅使

御対顔

(返答力)御通等之節ハ是迄之通装束、

但、席へ不拘面々ハ服紗・小袖・半袴、

一勅使御馳走御能之節ハ都テ服紗・小袖・半袴、

一御礼衆万石以上以下共都テ服紗・小袖(同拾脱カ)又者染帷子・

半袴、

一月次者別御礼衆之外平服、

一平服ハ以来羽織・小袴、襦高キ袴着用可致候、

右之通、万石以上以下共不洩様可被相触候、

閏八月廿二日

一今度被仰付之趣有之候ニ付、參勤御暇之割別紙之通

可被成下旨被 仰出候、就テハ在府中時々登 城致、

御政務筋之理非得失ヲ初存付之儀茂有之候ハ、十分

ニ被申立、国郡政治之不否(可カ)・海陸備禦等之籌策等相

伺或ハ可申達、又者諸大名互ニ談合候様可被致候、

尤、右件之 御直ニ御尋モ可有之候事、

一在府人数、別紙割合之通被仰出候得共、御暇中タリ

トモ前条之事件或ハ不得止事所用有之、出府之儀ハ

不苦候事、

一嫡子之儀ハ參府・在国・在邑トモ勝手次第之事、

一定府之面々在所へ相越候儀、願次第御暇可被下候、

尤、諸御役当之儀ハ別紙在府之割ヲ以可被仰付事、

一此表ニ差置候妻子之儀ハ国邑へ引取候共勝手次第可

被致候、子弟輩形勢見知之為在府為致候義、是又可

為勝手次第候事、

一此表屋敷之儀、留主中家来共人数不及差置、參府

中旅宿陣中等之心得ニテ可成丈手輕ニ可被致、且軍

備之外惣テ無用之調度相省、家来共之儀ハ供先使者

勤共旅装之儘罷在不苦候事、

一国許在所ヨリ懸隔候場所御警衛之儀ニ付テハ追々被

仰付品茂可有之候事、

一年始・八朔御太刀馬代、參勤・家督其外御礼事ニ付

テハ、献上物ハ是迄之通タルヘク候、乍去年数相逐(懸カ)

候品ハ品替リ相頼ミ不苦候事、

一右之外献上物ハ都テ御免被成下候、尤、格別之御由

緒有之、献上仕来之分ハ相同候様可被致候事、

当戊年

參勤割合

	春中	(慶應)
	松平兵部大輔	
	佐竹右京大夫	(義彦)
在府	鳥津淡路守	(忠意)

来亥年

春中二相替ル

夏中
加賀中納言(前田齊泰)
在府 細川越中守(慶順)

秋中
松平大膳大夫(毛利慶親)
在府 松平相模守(池田慶徳)

冬中
松平阿波守(蜂須賀齊裕)
在府 松平出羽守(定安)
溝口主膳正(直溥)

春中
松平美濃守(黒田齊漣)
在府 松平安芸守(淺野長訓)
津輕越中守(承昭)

夏中
松平修理大夫(高津忠義)
在府 立花飛彈守(飛騨守九、鑑寛)
亀井隠岐守(茲監)

来々子年

秋中
藤堂和泉守(高猷)
在府 松平越前守(茂昭)
松平土佐守(山内豊範)

冬中
松平内蔵守(内蔵頭九、池田慶政)
在府 南部美濃守(利剛)

春中
松平陸奥守(伊達慶邦)
在府 松平三河守(慶倫)
宗対馬守(義和)

夏中
松平右近将監(武聡)
在府 松平肥前守(鍋島直大)
松平飛彈守(飛騨守九、前田利益)

秋中
伊達遠江守(宗徳)
在府 丹羽左京大夫(長因)
松平富之丞(直克)

冬中
(音惠) 上杉彈正大弼
(慶頼) 有馬中務大輔
(信題) 南部遠江守
在府

九月十二日
御家老座印
右之通、文久二戊閏八月廿二日從
公辺被仰渡候、

右之割ヲ以在府之儀ハ三年目毎ニ大約百日ヲ限り可申、松平美濃守・宗対馬守・松平肥前守ハ大約一ケ月ヲ限り可申事、

御領国諸所移地頭・地頭代・抑等当分相勤候名前

夏中在府之面々、前年十二月中参府、四月朔日御暇被下、秋中在府之面々ハ六月中参府、七月朔日御暇被下、秋中在府之面々ハ六月中参府、十月朔日御暇被下候儀可被相心得候、尤、上使ヲ以御暇被下候面々、右日限前御暇被仰出ニテ可有之事、

甌島移地頭 国分十右衛門
長島右同 西郷八郎次

一松平美濃守・松平肥前守ハ三月中参府、正月末御暇可被下候事、

出水地頭代 野村源一郎
高岡右同 山田愛蔵
大口右同 木脇次郎右衛門
志布志右同 志岐正兵衛
隈之城抑 井上助右衛門
山之口抑 樺山武左衛門
倉岡抑 川上善左衛門

一当年之儀ハ松平阿波守・松平出羽守・溝口主膳正其儘十二月中途出府タルヘク、其外當時在府之面々ハ近々御暇被仰出ニテ可有之事、

綾抑 黒田嘉兵衛
穆佐抑 毛利孫兵衛
甌島地頭付役 佐多彦兵衛
長島右同 川畑伊右衛門

別紙之通從 公義被仰渡候条、此旨組中・支配中不洩様可申渡者也、

御通達之写

一年頭御式・初テ之

御目見・諸御礼事等是迄長袴用來候面々、以來素袍・

烏帽子、

一素袍之節迄鬘斗目、

一半袴之節、以來服紗物、

一元服之節、奏者都テ素袍・烏帽子、

一七夕・八朔白帷子無用、重陽青之物モ同断、

一御祭礼并御法事等二付

御名代迄素袍・烏帽子、其外

御代参又ハ詰之面々半袴、

但、重立候御祭礼二付御家老御代参ニテ長袴用來

候分ハ素袍・烏帽子、

一足袋不及願勝手次第相用、奏者之節モ同断、

一月次御礼之節、御一門方・島津図書殿名披露二不及、

御礼着座之上御家老御取合是迄之通、

一独礼之面々奏者名披露不及、

一若菜之御祝儀登

城二不及、以使者可被申上候、

一初テ之

御目見被 仰付候節ハ冬計足袋可相用候、

一御一門方其外屹卜立候御礼之節ハ是迄之通奏者名披

露、

一御一門方繼目御礼等之節、家来之内三家并差次三家

御太刀進上ニテ御礼申上來候者共長袴二不及、以來

半袴、

一毎月廿八日月次御礼不被為請候、

一十二月廿七日御一門方・島津図書殿・島津又六郎一

列以使者歳暮之御祝儀被申上二不及、廿八日登 城

歳暮之御祝儀被申上、出仕無之面々ハ以使者被申上、

大目付以上茂廿八日歳暮之御祝儀可申上候、

但、十二月晦日大目付以上暮之御祝儀申上二不及、

右之通、来亥正月ヨリ被相替候旨被仰出候、此旨向々

へ不洩様可致通達候、

十一月

(川上久封)

筑後

(島津久敏)

大蔵

(菅入久高)

摂津

(川上久運)

但馬

七日 雪一寸五部位積、昼九ツ半時分迄降、屋中水氷、

朝六ツ起、内膳殿・葉丸猪之介殿へ左之通り歌一首
読遣シ候、

独りして見るもおしけれとふ人は

あらしな今朝の雪の遠山

二階障子惣テ明ケ四方山ヲ眺望ス、絶景イハンカカ

ナシ、葉丸氏ハ三日跡ヨリ病氣ノヨシニテ返歌、

夕部より今朝のしら雪おもひ寐に

独りし見るもおしくそあるかな

内膳殿ニハ御再聞詰之のヨシニテ返し、

独りして見るもおししと遠山を

雪はきゆとものをちをまたれよ

ト申来、待ツレト風邪ノヨシニテ郷十郎へ伝言ニテ
不得參段承ル、今日モ才助来、襖張イタシ候、暮ヨ

リ玄瑞殿被来、夜四ツ過被帰候、おつやさま弥御快

方、四ツ半臥候事、

八日 晴、霜降、屋中手水鉢氷、

朝六ツ起、四ツ前出 殿、八ツ後退出、直二園牟田(草牟田之)

相良家ヨリ西田方千石馬場辺礼廻り、大鐘比帰宅、

今日ハ竹下宗右衛門殿・野呂新之丞殿被来、暮ヨリ

おむら様御出ニテ九ツ時分御帰り、おつやさま御病

氣日々ニ御快方、九ツ過臥候事、

九日 晴、霜氷、先日之雪未地ニモ残ル、

朝六ツ起、五ツ過ヨリ城ケ谷辺礼廻り、四ツ前出

殿、八ツ後退出、直二帰宅、又上方礼廻り、大鐘時

分帰宅、又直二市見物、夕帰宅、今日ハ井上弥兵衛

殿・池田三之丞殿・おこととの被来、夜葉丸猪之介

殿入来候、四ツ半時分被帰、無程臥候事、

一米直段拾六貫五百文迄売払候様今日仰出有之候事、

一兒玉雄之助・坂元乘左衛門・市来何某三人測量為稽

古出府、今日被 仰付候、

一一昨日伊集院平治殿儀、御側御用人ニテ御趣法方掛

松岡十太夫殿御趣法方御用人席御納戸奉行ニテ勤方

是迄之通、堀仲左衛門事伊地知何某御小納戸ニテ御

庭奉行勤集成館掛へ御役入、

十日 晴、

朝六ツ起、四ツ八ツ出勤、八ツ後帰掛浄光明寺へ参詣、直ニ帰宅、今日者豚味噌粥食相企、薬丸猪之介殿入来候、奥山藤左衛門殿ニモ鳥渡入来候テ寄合候、七ツ時分肝付兵部殿入来、重富屋敷御内用承候様御頼人之段承知仕候得共、拙者ニハ御案内通先日御用人勤被 仰付、未万事不取馴之事御座候間、どふも即事ニハ御請申上兼候段申演候処、左様ニ申呉候テハ不相濟、実ハ二之丸へモ御窺相成候上、兵部殿参相頼候様御承知之事候間、是非御請申上呉候様ニトノ事ニテ、左様ナラバ御請申上、折角念入相勤可申参上仕御請申上筈御座候得共、其内宜様相頼置候、無程被帰、薬丸氏同道腹ナヤシ如ク市見物イタシ、大鐘比帰宅、直ニ重富屋敷へ罷出御請御礼 周防様へ御直ニ申上候テ、直ニ帰宅イタシ候得者又梅田家ヨリ書状来り、左之通、

弥以御壮栄被成御座珍重奉存候、然者別紙之通山口直記殿ヨリ明十一日四ツ時二之丸御茶屋へ罷出候様御用致承知候間、右刻限前以御出可被成候、此旨奉得貴意候、以上、

十一月十日

写

名越左源太

阿多六郎

梶原清右衛門

山本五百助

相良左平太

諏訪八郎次

右へ御用之儀候間、明十一日四ツ時召列二丸御茶屋へ可被罷出候、以上、

十一月十日

大鐘過ヨリ梅田家へ参、暮過帰宅、四ツ過迄母上様御方へ罷出御寝酒御相手、おつやさま漸々御快候、

四ツ過臥候事、才助張付ニ来り、

十一日 小雨、

朝六ツ前起、五ツ時ヨリ早川五郎兵衛殿へ一刻参御座相頼、重富屋敷御内用承候儀共月番方へ御申出置給候様相頼候テ梅田家へ参、四ツ前御用人数同道ニテニ之丸御茶屋へ罷出候得者諸流共同様之向ニテ、諸流稽古 御覽有之、跡ニテ 御反物拝領、師匠ハ二反ツ、門人之面々ハ巻反ツ、拝領、誠ニ難有事ニ候、八ツ時相濟、山口直記殿迄御礼ニ罷出候、夫ヨリ梅田家御仏前へ拝礼、終テ東道盆酒共師家へ差上盃共イタシ、梅田家ヨリモ段々馳走有之、別テ被留候ニ付大鐘時分帰掛肝付兵部殿江参候而無程帰宅、今日拝領之御反物西洋布ニテ候、昼猪之介殿被来候由、張付之才助モ来候、暮ヨリ 母上様御方毎之通、おつやさま日々御快候、四ツ時分臥候事、

一今日玄喚迄重富役人中村善五兵衛・肥後隆右衛門、側用人中村鉄五郎、留守居厚地強兵衛被来候由、

一今日稽古 御覽ニ阿多六郎梅田家門人・田中仲次郎 鈴木門人影之流・黒岩正兵衛・上村清藏・田中太郎左衛門々人浜田多楽院・示現流種子島休藏二者七拾以

上ニテ老年迄稽古イタシ候ニ付、御引入之上御反物外ニ金子貳百疋ツ、 拝領被仰付候、

金目替候事

一今日ヨリ金目金巻兩ニ付九貫ツ、相成候、式朱之前錢ニシテ壹貫百貳拾四文、壹朱之金目錢ニシテ五百六拾文ニテ候、是迄ハ金巻兩ニ付八貫文也、

十二日 晴、

朝六ツ起、四ツ八ツ出勤、退出ヨリ直ニ帰宅、七ツ後ヨリ河俣氏江一刻参、夫ヨリ重富屋敷へ昨日御兩種被成下候為御礼御近習迄参上、此方ヨリモ今日御兩種進上イタシ候、夫ヨリ内膳殿へ参、帰ニ静洞殿・(忠念) 築水殿へ罷出、兩所共奥へ罷通候、夕帰宅、暮ヨリ母上様御方へ罷出候テ毎之通御寢酒御相手、おつやさま日々御快候、夜四ツ時分臥候事、

御通達之写

(斎妙女) 障姫様・
(斎妙女) 寧姫様御事、今般被遊

御下向候旨被

仰出、先月廿九日被遊

御発興筈候段申来候ニ付、諸御手当等之儀何篇

宰相様御隠居後

御下向之節之振合ニ準シ、早々取しらへ得差図候儀

ハ其通ニテ、諸事無手拔様可取計候、此旨可承向へ

可申渡候、

十一月

（川上八美）
式部

十三日 晴霜、

朝六ツ起、四ツ八ツ出勤、帰掛重富屋敷御三方様、

夫ヨリ戸柱町田家へ参、七ツ時分帰宅、又市見物ニ

参候、夕帰宅、夫ヨリ毎之通 母上様御方へ罷出御

寢酒御相手、四ツ時分御暇ニテ臥候事、今日薬丸猪

之介殿・渡辺彦太郎殿被来候由、才助来、張付共イ

タシ候、

十四日 快晴、霜、

朝六ツ起、四ツ八ツ出勤、帰掛花舜軒御墓へ参詣、

直ニ帰宅、七ツ過ヨリ市見物、今日者島津新八郎殿

入来候、暮ヨリ毎之通ニテ四ツ時分臥候事、才助四

ツ後ヨリ来候、

一今和泉御隠居茶翁殿（忠善）今晚御死去ニテ、日数三日鳴物

御停止、内実ハ去ル十二日晝御死去ニテ候、

十五日 雨天、

朝六ツ起、四ツ八ツ出勤、退出ヨリ重富屋敷へ一刻

罷出、直ニ帰宅、今日之来客薬丸猪之介殿・内膳殿・

相良吉十郎殿・島津助之丞殿・伊藤彦助殿、重富留

守居厚地強兵衛両度静洞殿御使ニテ、近習役名前不

存人・町田八之進殿・伊藤六郎右衛門殿被来候、才

助モ四ツ後ヨリ来候、大鐘時分馬毛疋引来候ニ付、

主税へ為乗見余リ十分ニ無之候、終テ御通達来、左

之通ニテ写置、

御通達之写

御流儀砲術・歩兵訓練之儀御吟味之訳有之、此度取

止被

仰付候条、向々へ不洩様可申渡候、

十一月

式部

大鐘過ヨリ襖張用ニ唐紙一枚ニ松ニ鶴之繪書調候得者、暮ニ相成張付之才助ニ酒共為吞致見物候、母

上様御方へ罷出、暮過ヨリ猪之介殿被来、四ツ過被帰候、おつやさま御病氣漸々御快方、嘉美行帖佐ヨリ昼時分帰り来候、四ツ半時分臥候事、

一新城島津主計・島津良馬今日御小姓与番頭被仰付候、

十六日 晴、

曉七ツ半起書見、茶モ入給候、吉次郎モ起出来候、

からいもあぶり置候間夫共給、是モ大学ヲ読候、拙

者教モイタシ候、六ツ過ヨリ静洞殿御使トシテ内膳

殿へ参候、帰りニ伊藤六郎右衛門との・同万次郎殿

へ参候、又静洞様御目通ニモ罷出候テ御本宅之方へ

相廻、留守居宿へ茂一刻参候、五ツ半時分帰宅、飯

共給直ニ出、殿、四ツ後御暇、拙宅襖押絵終日書方

ニテ候、八ツ時ヨリ島津主殿殿入来飯共被給、暫相

咄被帰候、暮ヨリ毎之通り 母上様御方ニテ御寝酒

御相手相成候、おつやさま御病氣御快、今晚共焼酎

モ相応相進ミニテ候、四ツ時分臥候事、張付之才助

儀今日モ四ツヨリ来、暮帰候、

十七日 晴、

朝六ツ前起、家之内取集共イタシ、四ツ前出 殿、

八ツ御下り後御暇、直ニ帰宅、庭取集イタシ、大鐘

過ヨリ大島与人厚淳

来居候、^(幸)来候、葉丸猪之介殿ニモ入来候テ、夜

九ツ半時分帰候、朝美代氏入来候、昼大口虎頭次郎

左衛門子召列来候、夜八ツ前臥候事、

去ル十三日

御筆仰出

軍政之儀者

^(齊)金剛定院様御深慮ヲ以慶長以前

御三代様之御旧法ニ被為基、西洋之砲術御採用ニテ

御変革相成候処、

順聖院様分テ

戌十一月

御心志ヲ被為碎調練等時々御指揮被為在候得共、未半途ニ茂不至事ニテ実以遺憾不少次第候、然処近年外夷愈猖獗之姿致増長、漸危急切迫之世体相変候付テハ、軍政向一涯嚴重無之候テハ不相濟事勿論ニ候、就テ於当国之毎事西洋人之挙動ニ倣ヒ候儀ハ兎角人心帰嚮薄ク、迎モ十分ノ境ニ至リ難ク別テ令心痛候、依之猶又致熟考慶長以前之御旧制ニ随ヒ軍備改革申渡候間、軍役方之面々綿密^(密カ)評議、趣意致貫徹候様可取計候、尤、攘夷之儀、今般

勅使ヲ以関東へ被

十九日 晴、

仰進候由致承知候得者、若夷賊掃攘之台命相達候節ハ、其通速ニ被行候様手当不行届候テハ奉対天朝 幕府無申訳事候条、此旨厚相心得聊緩怠之儀有之間敷候事、

但、台場備之大砲等ハ是迄之通西洋之規則ニ基可

申候、乍併是迄モ万事彼法制ヲ学候テハ我国力不

応儀モ可有之候間、右等之処^(又カ)深相弁、成丈易簡

ニシテ行レ安キ様可致研申儀專要卜存候事、

十八日 霜降、晴、

朝六ツ起、四ツ八ツ出勤、直ニ帰宅、八ツ後ヨリ藤田武右衛門殿入来、飯共寄合同道ニテ市見物イタシ七ツ時分帰宅、五代孫之丞殿・伊藤彦助殿入来、夜四ツ時分被帰、四ツ半臥候事、おつやさま今日ハ余程御快、拙者方へ御出ニテ御寝酒御進ミ候、母上様ニハ昼ヨリ前へ御出ニテ四ツ半御帰候也、

朝六ツ起、五ツ半内記様へ一刻罷出候テ四ツ前出勤、八ツ後退出、内記様へ一刻罷出、直ニ帰宅、七ツ後市見物、無程帰宅、今朝猪之介殿、昼権五郎殿被来候、辻元新兵衛モ来候由、夜六ツ半時分ヨリおつやさま所へ罷出御寝酒御相手、母上様ニハ前基太村新七郎殿射納ニテ二ツ矢被射候由ニテ御出ニテ、夜四ツ過御帰、七ツ後重富屋敷へ一刻参、留守居厚地強兵衛へ面会候、四ツ半臥候事、

御通達之写

諸御役人并書役小役人等ニ至リ年功等申出ル例ヲ以規之様相心得、不勘弁転役・昇進等之内意申出間敷ト之趣、追々分テ申渡事候処、程過候得者イツレモ忘却イタシ候哉、差タル年功進モ無之面々昇進沙汰ハ勿論、自己勝手ヲ存御心付向等之儀猥ニ内意申出、剩依人ハ不筋方へ強テ進達頼入候モ有之哉ニ相聞得、風俗ニモ相拘別テ不可然事ニ候、強テ年功サへ有之候得者悉ク御取拵被仰付儀ニテモ無之、兼テ心懸宜、格別御用ニ相立候者者別段之事ニ而人々其職分相守致精勤、年功・勤功相應之者ハオツカラ夫々品能御取扱可被仰付事候条、向後不勘弁之内意等申出候共會テ取揚間敷候、乍其上依品ハ屹ト可及沙汰候、此旨向々へ不洩様可致通達候、

十一月

- (川上久封) 筑後
- (島津久徴) 大蔵
- (喜入久高) 摂津
- (川上久運) 但馬
- (川上久美) 式部

二十日 桜島雪半ヨリ上降、終日小雨、

朝六ツ起、四ツ前出勤、八ツ後御下り後御暇、直ニ帰宅、おこととの被来候由、郷十郎モ同断、彦助殿被来候、才助来張付イタシ候、暮ヨリ大島書状案文認、五ツ過ヨリ 母上様方御寢酒御相手、おつやさまニモ先達テヨリ母上様御隠居へ御臥居之処、今日ヨリ拙者方納戸へ御床直リ候、御病氣日々御快候、一今日

公義仰出段々拜見、以後可写候、

二十一日 霜降、氷、晴天、

朝六ツ起、四ツ前出勤、八ツ御下り後退出、直ニ帰宅候得者お藤来居候、おあいとのものも同列ニ候、尤、おくわ・おふミニモ被来候、今朝猪之介殿一刻被来候由、八ツ後平左衛門召呼馮為認候、暮ヨリお藤其外家内中打寄酒給候、お藤などにハ五ツ前帰り、拙者ニハ四ツ前臥候事、

御通達之写

諸色之儀、今度以

御書取被

仰出且又常平倉御開キ相成、下直ニテ米屋共へ申請

被仰付、市中売出米・給地米直成被仰渡候儀、畢竟

諸人之困苦不相成候様ニト之不容易

御仁厚之

思召ニ候、就テハ大小身之面々ハ勿論諸士 御趣意

之程奉汲受、年中飯料之余計有之困置候面々ハ被定

置候直成通ヲ以早々売払、一同融通相成候様取計可

有之候、此旨支配中江申渡、奥掛・表方へモ可相達

候、

十一月

撰津

式部

二十二日 大霜如雪、水氷、快晴、

朝六ツ起、五ツ前評定所へ出席御吟味、四ツ前相濟、

婦リニ町田民部殿^{（久慈）}へ参候、夫ヨリ能勢氏へ参候、先

達テヨリ襖之画相頼置候ニ付最早出来居候半哉、且

者近日拙宅ニテ襖絵書相頼答候ニ付絵柄等之儀申置

候ハ、心得ニモ可相成哉ト参候処、頼置候絵ハ出来

居候テ一枚相残居候、是モ今日者成就之賦候由、出

来候分ハ持帰候、九ツ時分帰宅、無程又吉次郎召列

候テ市見物、八ツ時帰宅、七ツ時分税所七郎右衛門

殿被来候ニ付被嘶候様差留候得者、無抛被差越処有

之由、一刻参リ後刻モ来可申ト之事ニテ相待居候処、

大鐘過ヨリ入来、夜入四ツ半時分被帰候、昼渡辺彦

太郎殿・五代孫之丞殿一刻ツ、入来候、張付之才助

モ来候、右七郎右衛門殿被帰、又 母上様・おつや

さま御寝酒召上リ之所へ罷出候テ、九ツ過臥候事、

御通達之写

国分

伊作

川辺

田布施

阿多

加世田

出水

右者

御先代様以来御鷹場被立置候得共思召之訳被為 在、

御引取被仰付候条申渡、向々へ茂不洩様可申渡候、

但、八ヶ郷へ是迄被立置候制札之儀者返納申付候、

十一月

出雲

(舟形) 一 嘩姫様

寧姫様益御機嫌能、先月廿九日江戸被遊

御発興候旨御到来候、依之御一門方其外月次御礼罷

出候面々、明廿四日四ツ時登

城、

(忠義) 太守様

(久光) 三郎様へ御祝儀於席々相謁可被申上候、

但、大奥へ兼テ御祝儀被申上来候面々、当日又ハ

御精進日間御祝儀被申上、御女中方ヨリモ同断、

尤、御中途并二江戸へハ有来通り追テ飛脚便可被

申上候、

右之通表方へ致通達、奥掛・御勝手方へモ可相達候、

一 太守様御事、御用之儀候間被遊

御参府候様御老中様御連名之御奉書ヲ以被仰渡置候

処、御願之趣有之、来早春被遊

御参府候様御老中水野和泉守様ヨリ被仰渡候段御到

来候、依之御一門方并諸大身分其外月次御礼罷出候

面々、明廿四日登

城、

太守様

三郎様へ御祝儀於席々謁可被申上候、

但、大奥へ以下毎之通ニテ略ス、

右之通り表方へ致通達、奥掛・御勝手方へモ可相達

候、

十一月廿三日

(喜入久高) 摂津

二十三日 霜降、晴、

暁大鐘前起、書見共イタシ四ツ前出勤、八ツ後御下

り済ヨリ退出、直ニ帰宅、七ツ過浄光明寺下鉄炮師

へ一刻立寄キリ通シ相頼、夫ヨリ権五郎殿へ一刻參候テ、町田民部殿所へモ一刻參候、暮帰宅、昼渡辺氏被來候由、夜四ツ半臥候事、おつや様未御泊之事、

二十四日 大霜、快晴、

朝六ツ前起、四ツ前重富屋敷御近習役來、周防様私領御暇一件之事共承候、今日者同席、今日ハ新射場一番目ニテ同席中鉄炮有之、九ツ時分ヨリ出張三人ツ、三組ニテ一勝ツ、ニテ候、帰リニ入來院家へ早川氏・北条氏參候様承、立寄候テ五ツ過帰宅、四ツ時分臥候事、張付之才助モ^{來候脱カ}おつやさま未御泊、

御通達之写

年頭御式・諸御礼事等は迄長袴用來候面々、以來素袍・烏帽子相用候様被仰出候付テハ、烏帽子之儀御家折相用候様被仰付候条、此旨向々へ可致通達候、

十一月

式部

二十五日 晴、

晝大鐘ヨリ起書見、五ツ過重富屋敷へ一刻參、留守居へ面会、無程出勤、今日ヨリ島津仁十郎殿病氣跡月番相勤候、拙者初月番ハ正月之筈候処、内記様病氣初御月番難被相勤、來月モ拙者月番相勤筈候、八ツ後御下リ後御暇、帰リ掛宮之城へ御祝儀ニ罷出候、今日 御家老座へ五日置三日置ニ御出席有之候様御承知ニ付テ也、委細ハ跡以御通達書写置可申候、夫ヨリ今和泉へモ罷出、留守居へモ面会候、又重富屋敷へモ罷出、留守居へモ面会候、夫ヨリ帰宅、大鐘過ヨリ市見物、暮帰宅候、猪之介との被來候、才助モ來候、おつやさま御泊ニテ候、四ツ過臥候事、

二十六日 雨、

朝六ツ起、五ツ半出勤、八ツ御下リ後退出、直二帰宅、今朝猪之介殿被來候、才助來候、おつやさま御泊之事、

二十七日 晴、

朝六ツ起、五ツ過内記録へ一刻立寄、直ニ出勤、八

十一月

(喜入久庵)
撰津

300

ツ御下り後退出、直ニ帰宅、逼塞申渡有之、御目付
野村氏・御用人座書役伊地知清之丞被来候、無程申
渡相濟飯共給被帰候、夫ヨリ重富屋敷留主居方へ用
事有之參候、夫ヨリ内膳殿へ參候テ七ツ過帰宅、暮
過ヨリ毎之通おつやさま打寄酒共給候テ四ツ過臥候
事、母上様ニハ昼ヨリ前へ衣裳縫御加勢トシテ御
出ニテ、四ツ時分御帰候、

一三郎様 御内命被為蒙候段

仰渡承知、委細ハ又可写、

御通達之写

春秋兩度積業

右從

御先代様厚祭祀之礼被設置候得共、別段之思召有之、
御取止被仰付、以来ハ聖誕日・夏至・冬至日ニ香奠
菓子相備諸事易簡ニ取計、真実崇敬之道相立候様可
有之候、左候テ、当日者隔日講釈并素読・会説等休
息被仰付候条、此旨向々へ可致通達候、

一御一門方并四家之面々造士館致入学候様被仰付候、

一寄合并諸士勤方無之面々致入学候様被仰付候、

但、寄合以上之儀、追々被仰渡通自然重職ヲモ被

仰付事候得者別テ大任之身柄候間、治己治人之道

屹ト研究無之候テ不相濟事ニ候、諸士之儀モ其品

二応シ御擢萃被仰付候間、実著之修学專要ニ候、

一毎月一度宛御家老・大目付出席、講釈人ヨリ講議相

勤候様被仰付候、

但、御一門家ハ自分出席可有之、諸武芸師範人茂

罷出候様被仰付候、且御家老・大目付不時出席モ

可有之候、

一春秋兩度不時館中江

御入人数ヲ分御呼出、講釈又者素読・席書等御試可

有之候、

但、依

思召不時

御入モ可有之候、

一春秋兩度対策被相下候、

但、助教以下へ試業之日、当時急務等之御題被相

下候間、三日ニ差出候様被仰付候、第一學問之精

粗才能之巧拙御試之 思召ニ候、尤、平日被相下

儀モ可有之候、

一助教以下都講迄掛

和書兼和漢律令
格式

後題院彦次郎

新納弥太右衛門

經書兼歴史

山之内作次郎

町田次郎四郎

詩文章掛

篠崎甚七

今藤新左衛門

但、助教以下ハ右人数ヨリ可相調候、

一館中は迄大・小学校之儀設無之、踰等之弊モ有

之、且師員之者童子督責ニ日ヲ費シ候儀モ可有之候

間、以来童子四書五經相濟候上入学可被仰付候、左

候テ、当分通ニテ大小之兩局相設、一局者童子罷出、

句読師助ヨリ同寄迄請取致指南、讀書・手習・諸課

業相濟候上ハ、則御暇イタシ候様、一局者員外学生

ヨリ学生迄罷出、諸課業相勤、句読師頭取致指南候

テ大・小学校ト可心得候、

但、座配等之儀館中役々吟味イタシ可申出候、

一諸課業多端煩雜ニテハ、返テ其実益ヲ失ヒ候場モ有

之哉ニ相聞得候ニ付相省不苦、課業ハ相減候儀、館

中吟味次第被仰付候、尤、壯年之者武芸修行モ第一

ニ候間、余暇有之、（讀脱之）武館出席モ相調候様ニ可有之候、

一助教一人ツ、繰廻ヲ以講堂へ可相勤候、

一造士館掛御目付并進達掛横目之儀、詰席迄ニテハ出

席之詮モ無之候間、講堂へ茂可相勤候、右者造士館

之儀風教之根本

御国政之要枢ニ候間、

（齊彬）順聖院様御代深

思召ヲ以御変革被為

在候得共、時世ニ依自然之弊習モ生候間、此節大頭

迄右之通学制被

仰出候、畢竟

御先代様之御趣意貫徹イタシ、治教一致シ、実被相
行不朽之規則相立候様ニト之

思召ニ候間、尚又館中ノ役々精々遂評議、追々申出
候様被仰付候、此旨向々へ可致通達、

十一月

(喜入久高)
摂津

来二月

(家彦) 公方様御上洛ニ付、御先格之通於京師

(忠孝) 太守様御供奉御勤被遊度、御願書御掛御老中水野和
泉守様へ被差出置候処、先月六日為御名代御一類中

御老人被成御登

城候様被仰渡ニ付、御名代島津淡路守殿御登

城之処、於御白書院御縁頼御老中様方并二小笠原(長
行) 書頭様御列席、来二月

御上洛之節御供奉被遊御勤度御願之趣御尤之儀ニ

思召候得共、此度

御上洛付テハ下々不及難儀様卜之厚御趣意ニ候間、

御参府之上格別御手輕ニ

御上京御供奉

御勤被遊候儀ハ御勝手次第可被遊旨

和泉守様ヨリ被仰渡候段御到来候、此旨奉承知候様
表方へ致通達、奥掛・御勝手方へモ可相達候、

十一月

(川上久美)
式部

喜入摂津殿

右御内用之儀有之上京被

仰付候条、仕廻次第早々致出立候様被

仰付候、

右之通今度

御直被

仰付候条、此旨表方へ致通達、奥掛・御勝手方へモ

可相達候、

十一月廿八日

式部

二十八日 曇、

暁大鐘過ヨリ起、書見等イタシ、六ツ半川上式部殿

へ参、夫ヨリ喜人家・二階堂源太夫との・郷原転殿・

樺山家・島津大藏殿・永田氏・菱刈家江參、四ツ前
出勤、八ツ御下り後退出、直ニ帰宅、七ツ後市見物
ニ暫參候、今日見廻人数島津権五郎殿・渡辺氏、八
ツ後二ハ内之浦地頭所与頭白坂壮次来候、尤、美代
氏被来候、夕ヨリお筆来候得共、拙者齒之痛甚敷灸
治等イタシ候、寸切ト不相止、五ツ時分臥候事、

二十九日、雨、

朝六ツ起、五ツ時薬丸猪之介殿入来、五ツ半出 殿、
八ツ後帰宅、直ニ又重富屋敷御法事ニテ御役所へ罷
出、七ツ前図書殿御出ニテ大奥へ罷通候様承、罷出
候テ御亭主振申上、暮六ツ前御立ニテ御送り申上、
御付之人々御年寄・近習役等江暇乞イタシ、大奥御
玄喚へ刀相廻シ有之候ニ付、直ニ大奥ヨリ御暇イタ
シ候ニ付又御役所へ一刻立寄、図書殿只今御立有之
候ニ付御暇申上候段相述候テ帰宅候、御役所へハ此
前
(久志)
三郎様重富へ被成御座候時分、御付之人々両三人被
罷出居候、今日ヨリ能勢氏入来、襖絵書イタサレ候、

能勢氏之門人都之城之絵師モ入来候、拙者歸り之時
分ハ最早何レモ被帰居候、夕方松岡喜左衛門殿入来
之由候、暮過ヨリおつや様ナト打寄酒取ハヤシ、四
ツ時分臥候事、

一周防殿御事、去ル廿六日ヨリ御法事ニ付、私領御暇
ニテ被差越、(忠意) 静洞殿・泉水殿ニハ御病氣ニテ御亭主
(兼本方、忠公)
前御一人モ不被成御座候、

晦日 霜降、晴、

朝六ツ起、座内処々掃除、五ツ半出
殿、八ツ御下り後退出ヨリ演武館弓場へ罷出候、此
節ヨリ御改正之御軍備調練有之、物主中惣テ罷出、
何レモ稽古方有之候、尤、若年寄川上籠衛殿是モ物
主ニテ稽古ハ無之被罷出候、大目付衆モ樺山主殿殿・
川田將監殿被罷出候、其外御軍役方御役々出会指南
有之候、大鐘過帰宅候、能勢氏九ツ時分ヨリ被来繪
書イタサレ、大鐘時分被帰候由、美代藤兵衛殿・右
松十郎太殿被来候由、暮近藤七郎左衛門殿ヨリ今晚
来候様承、無程參候テ夜八ツ時分帰宅、直ニ臥候事、

名越時敏（花押）

文久二年壬戌十二月中

朔日 曇

暁大鐘過起、五ツ過出勤、八ツ御下り後退出ヨリ直ニ弓場へ参、昨日同断調練有之、大鐘過帰宅、暮ヨリ毎之通 母上様・おつやさま御寢酒被召上候御相手共イタシ、四ツ時分臥候事、猪之介殿・松岡氏・伊藤六郎右衛門との・伊地知八郎右衛門殿被来候由、

二日 晴

朝六ツ起、五ツ半出勤、御下り後ヨリ昨日同断演武館弓射へ参候、今日口菓迄打稽古有之候、大鐘過帰宅、暮ヨリ近藤氏へ申遣入来候訳、今日先月十二日立之飛脚到着之、御用人座書役問合ニ （齐彬） 順聖公結構御贈官之儀申来候故、未御発シハ無之候得共、家内中打寄ニテ奉祝候、久々ニ大盃モ頂戴、其儘打臥、近藤氏帰りハ何共不存候、今日指宿猪之介殿モ被来候由、能勢氏モ被来絵書イ

タサレ候、

御通達之写

酒会沙汰之儀ハ追々被

仰出置候通候処、初朝初泊等之節御役所へ酒食等振舞候聞得有之、別テ不可然候条一切右様之儀無之様可申渡旨被

仰出候条、向々モ不洩様可申渡候、

呉服職之者共、上方表ヨリ絹布類買下儀一切不相成候、尤、当分買下居候絹布モ売買為致間敷旨被

仰出候、此旨末々迄吃下可申渡旨町奉行へ申渡、向々

へモ不洩様可申渡候、

但、紬太織以下之品ハ不苦候、

今日書役問合之大概左之通、

齐彬公御事、

御存生中為

御国家被抽

御丹誠候儀共達

叡聞、京都ヨリ被

仰進候趣有之、被 追贈

權中納言從三位候旨被為蒙

仰候旨被仰渡候、

三日 雨、

朝六ツ前起、五ツ前ヨリ花舞軒へ參詣、夫ヨリ

順聖院様御靈屋へ參詣、夫ヨリ松岡氏・加藤家へ參、

淨光明寺參詣、四ツ前出

殿、八ツ御下り後ヨリ二之丸御茶屋へ參、先日ヨリ

ト同断ニテ調練有之、今日者現打之稽古ニテ藥モ込

候テ打事ニ候、拙者ニハ大砲備ハ伍長、小銃備ハ戰

兵二人數賦有之、明日モ今日通之由候、大鐘比婦宅、

又夕方ヨリ前内記様へ罷出候、暮過帰宅、五ツ時分

ヨリ母上様・おつやさま御打寄申上酒給候事、

御通達之写

太守様へ御用之儀被為

在候ニ付、為

御名代御一類中様御老入御登 城候様先月十二日御

用番井上河内守様ヨリ被仰渡候ニ付、御名代島津淡

路守殿御登 城候処、於御白書院御縁頼 御老中様

方并小笠原圖書頭様 御列座、

御先代

順聖院様御存生中為

御国家之被為抽御丹誠、御病末ニ及ヒ三郎様等江

御遺訓之儀共達

叡聞

御感不斜候、

御先代

家久公雖

御存命中 權中納言

宣下之御家列モ有之候間、格別之叡慮ヲ以贈 權中

納言從三位可被

宣下旨京都ヨリ被

仰進候、

順聖院様御存生中彼是被為抽御丹誠候趣モ有之候ニ

付、

叡慮之通權中納言從三位御追贈被仰出候旨、河内守

様ヨリ御演達之旨御書付被成御渡候段御到来候、依
之御一門方并月次御礼罷出候面々、明五日四ツ時登
城、於席々御祝儀被申上等候条、此段致通達候、以
上、

十二月四日

同役中間通達

齊彬公御贈官位御承知御書付之写

先代薩摩守儀、存生中為國家抽丹誠、病末ニ及ヒ弟
(久光)三郎等江遺訓之儀共達

叡聞

御感不斜候、先代家久雖存命中權中納言

宣下之家例モ有之候間、格別之

叡慮ヲ以贈權中納言從三位可被

仰進候故、薩摩守存生中彼是抽丹誠候趣茂有之候ニ

付、

叡慮之通被追贈權中納言從三位旨被

仰出候、

四日 終日雪霰雨、

朝六ツ起、五ツ過出勤、今朝伊藤万次郎殿入来之由
候、九ツ時分ヨリ二之丸御茶屋へ罷出、物主中同断

ニテ、此節御改正相成候御軍備

(忠義)
太守様・

三郎様

御上覽有之、拙者ニハ大砲備伍長并小銃隊ハ戦兵ニ

テ罷出候、八ツ過

御入ニテ

七ツ過相濟、俄稽古ニハ能出来候段蒙

御褒詞、蕎麦切被成下候ニ付一統相待候様ニテ頂戴、

暮過帰宅、今晚ハ早ク五ツ過臥候事、

五日 雪降積、

今朝之詠、

夜のほとけの峯のあらしハ音たへて

よも山しろき雪の朝あけ

朝六ツ起、五ツ過出勤、八ツ御下り後退出、七ツ過
松岡喜左衛門殿入来、無程役所方へ用事有之被参候、
医師玄適被来候、先日ヨリ主税少々風邪ニ被犯候テ

打臥罷在故相頼候、先日ヨリ度々入来候得共不書留候、暮過ヨリおつやさま・母上様御寢酒被召上、御相手相勤候、

六日 雨、

朝六ツ起、六ツ半過ヨリ田原氏・戸柱町田家・名越彦太夫殿・近藤氏・河俣仲太夫殿へ一刻ツ、参、五ツ半出 殿、八ツ御下り後退出、直ニ帰宅候得者能勢被来、絵書イタサレ候、七ツ時ヨリ内膳殿へ用事有之参候、直助殿へモ一刻立寄候、暮ヨリ直助殿入来候テ、九ツ前被帰候、此節調練ニテ火繩筒・雷帽子銃相試候得者、何レモ兵銃ハ雷帽子ニ無之候得者并理悪敷候故、直助殿へ相頼候テ細工人へ拵方頼呉候、

御備組惣鉄炮被仰付候付テハ玉目四匁・五匁・六匁・八匁・拾匁限被仰付候ニ付、持合之筒右玉目ニ合置御軍役可相勤ト之趣ハ嘉永之度細々申渡置候通ニテ、人々其心得ヲ以手当為有之筈ニ候、右ニ付三拾発分

之玉葉ハ自分用意可致、左候テ、以来軍役用トシテ新筒張調候向ハ可成八匁大雷帽子打ニ取仕立候様、其余ハ是迄之通可相心得候、此旨向々へ不洩様致通達、諸郷・私領江モ可申渡候、

十二月

(喜入八高) 撰津

(川上八連) 但馬

(川上八美) 式部

年頭・八朔・五節句、御一門方以下諸御役人迄供廻り等之儀、以来都テ朔望ニ付登

城之節之通、

一大番頭以下諸大身分・御側役以上寄合並迄挾箱為持候儀、御代参亦者諸御礼事等被仰付入用之節計、

一 御一門方初其外

御直元服又者隠居・家督等之御礼被仰付候節ハ夫々

家格相当之供廻可被召列候、

一 小番家格之内

御直元服之御礼且諸御役人御使者并檢使等相勤候節ハ都テ是迄之通、

右者御一門方初供廻等之儀、去ル辰年被定置候得共、
以来右之通被仰付候条、此旨向々へ可致通達候、

十二月

筑後
(島津久封)

大藏
(島津久徴)

撰津
(喜入久直)

但馬
(川上久運)

式部
(川上久美)

十二月

筑後

大藏

撰津

但馬

式部

重富屋敷御軍役調練伺案文

口上覚

今般御軍備御改正ニ付、歩兵調練被召替候様被致承

知、右ニ付私兵之儀何篇御備組ニ基手当被致候ニ付、

調練之儀何様相心得可申哉、私ヨリ可申上旨岩松殿(久宝)

ヨリ被申聞、此段申上候、以上、
(加治木)

何月何日

名越左源太

服製之儀ハ

金剛定院様御代御一門方始末々迄モ夫々等級ヲ以テ

被究置、尚又

順聖院様御代茂質素有之候様ニト之趣細々被

仰出置候得共、何分緩セノ向成立候ニ付、先達而吳

服職之者共上方表ヨリ絹布類買下候儀一切不相成、

当分持合之所モ売買不相成段被

仰出、其段ハ人々奉承知通ニテ、畢竟質素ニ有之候

様御趣意候間、向後士分以上ハ勿論末々迄モ屹ト被

究置候通龜服相用候様被仰付候条、聊取違有之間敷、

此旨向々へ不洩様可致通達候、

七日 晴、

朝六ツ起、評定所詰ニテ候得共、五ツ半時分出 殿、

四ツ打出評定所之様參候、四ツ過帰宅、八ツ後源十

郎殿被来、夕ヨリ伊地知才右衛門殿入来候テ四ツ半

被帰、伊藤彦助殿ニモ夕一刻入来候、今日早川氏申

渡、伊藤万次郎殿御役御免ニテ逼塞被仰付候、外ニ御目付四人、横目三人、万次郎殿ニハ横目ニテ候、都合八人、張付之才助書物表紙懸ニ来候、

八日 快晴、

朝六ツ前起、五ツ時ヨリ伊藤万次郎殿・同六郎右衛門殿へモ参リ、五ツ時過出 殿、八ツ御下り後八ツ半帰宅、又横目兩人御役御免ニテ逼塞、拙者申渡候、何レモ名代御目付ハ碓山氏、書役ハ大久保半助被来候、八ツ半松岡十太夫殿被来、主税余リ塩梅不宜候故今日ヨリ沖瑞雲殿相頼入来候、昼ヨリお藤親子三人、おゑいととの親子三人被来候、各夜入五ツ過被帰候、四ツ時分臥候事、

九日 雨、

朝六ツ起、五ツ時伊藤六郎右衛門殿入来候、五ツ半出 殿、八ツ御下り後退出、直ニ帰宅候得者能勢氏絵書ニ被来居候、都之城絵師モ七ツ時分ヨリ来候、伊藤氏今朝内意承候一条相頼候ニ付、同刻一刻六郎

右衛門殿へ参候、只今ヨリ自身被見廻置方可然段相咄置候、重富屋敷へモ用事有之参候テ、大鐘時分帰宅候得者重富屋敷留守居又被来候、絵書之衆ハ暮前被帰、四ツ時分迄主税方へ参居候テ臥候事、母上様初おつやさま家内中集酒共給候事、

一北郷浪江殿、去ル七日之夜金子百両余盗ニ被逢候由、今日披露有之、尤、居間格護金子之由浪江殿ニハ其夜泊ニテ為有之由、

十日 晴、

朝六ツ起、五ツ半出 殿、今日者島津権五郎殿御用被致承知、六番御小姓与番頭へ御役替被仰付候、八ツ御下り後退出ヨリ梅田家へ参、夫ヨリ鉄炮残之松方へ参候、先日大雷帽子銃等相頼置候ニ付、中雷帽子ニイタシ呉候様頼替候、大雷帽子之儀、四方少シツ、切有之候故火通シ不宜由候、中火門却テ能通スル之由承候間、中火門ニ頼替タル事ニ候、夫ヨリ日置・花岡へ近習番所迄寒中見廻ニ参候、七ツ時ヨリ権五郎殿へ祝ニ参、夜入四ツ時分帰宅、直ニ臥候事、

能勢氏・都之城絵書モ来候、

十一日 晴、

朝六ツ前起、六ツ半ヨリ重富屋敷罷出、周防殿御目
通り江罷出、留守居ヘモ面会、夫ヨリ御隠居御三居
ヘ罷出、伊勢平右衛門・高橋金五郎殿・末川久馬殿
ヘモ一刻ツ、參、何レモ面会、五ツ半過出 殿、八
ツ半御下り後ヨリ淨光明寺・花舜軒・川上龍衛殿、
重富屋敷御三居ヨリ今日御伝言之儀有之候間、罷出
候テ七ツ過帰宅、今日モ能勢氏・都之城絵師モ今朝
ヨリ来候テ書方イタシ候、夜入六ツ半被帰候、五ツ
前ヨリ内記様ヘ罷出、四ツ時分帰宅、直ニ臥候事、

御通達之写

市中米価高料ニ付、諸人困苦不相成様ニト之思召ラ
以給地米売買之直成被相定候趣者分テ申渡置通ニ候
処、于今過当之直成ヲ以売買、又ハ肴料等ニ名ヲ付
増錢相請取候向モ有之哉ニ相聞得、不容易
御仁厚之御趣意ヲ茂不汲受、別テ如何之至候条、向

後高料ニ売払候者ハ勿論買取候者迄モ屹ト可及御取
扱候、尤、見聞ヲモ掛置名前承届、無用捨申出候様

申付置候ニ付、聊無取違飯料外ハ不困置被定置候直
成通ヲ以無滞売払、融通相成候様可取計候、此旨支
配中江申渡、與掛・表方ヘモ可相達候、

十二月

(川上久美)
式部

十二日 晴、

朝六ツ起、朝藤兵衛殿入来、五ツ過ヨリ高橋縫殿殿
江戸十郎御作事下目付助勤続内意ニ參、夫ヨリ末川
家江御軍備調練之儀ニ付相談ニ參候テ、四ツ過迄相
掛り出

殿、七ツ後退出掛又末川家ヘ參候テ、大鐘前帰宅、
今日郷原家ヘモ面会、十五日砲術館ヘ八ツ退出ヨリ
集リ之筈相成候、今朝ハ伊藤六郎右衛門殿入来之由、
能勢弥九郎殿入来、今日迄ニテ絵書相済候、都之城
絵師中原南溪モ来候テ終日絵書、未成就不相成、辻
元新兵衛モ七ツ後ヨリ来、伊地知才右衛門殿モ暮ヨ
リ被来候テ、各四ツ時分被帰、無程臥候事、

当分相勤候表御用人名前

川上右近
以上御小姓与番頭ニテ
北郷作左衛門

島津内記

二階堂源大夫

島津右門

御小姓与番頭へ寄
相良治部

伊集院伊膳

拙者以上当番頭ニテ
入来院恰

島津仁十郎

市来次十郎

川上正十郎

早川五郎兵衛

北条織衛

柳正之丞

福崎助八

御用人書役
橋口正左衛門

村橋左膳

野津藤左衛門

平田仲左衛門

毛利勇之助

鎌田宗之丞

中島宗太郎

大久保半助

古河清兵衛

吉原彦左衛門

廻彦六

伊地知清之丞

寺師休五郎

上村嘉兵衛

能勢彦八

今村幸之助

野崎善之丞

弟子丸翁助
黒田藤七郎

白石彦七

上村喜八郎

堀正八郎

染川源之助

上村佐八郎

伊藤彦左衛門

重久嘉十郎

十三日 快晴、

朝六ツ起、五ツ半出 殿、八ツ半御下り後退出、直

二帰宅、見廻人数伊藤六郎右衛門殿・島津主殿殿・

井上弥兵衛殿被来、中原南溪絵書今日成就、今日主

殿殿当御役ニテ御側役勤

〔欠地〕三郎様御方へ相勤候様被仰付、七ツ過ヨリ主殿殿へ

参候、夜五ツ前帰宅、無程臥候事、

帖佐ヨリ此節御軍備訓練ニ来候名前

年寄

蓑毛五郎左衛門

与頭

時任平吉

横目

蓑毛長左衛門

(忠義)
太守様御後見被仰付度

公辺江御願之趣被為

在候処、御願之通

御後見被

仰付候条、御国政向ヲ初諸事厚被仰談御取計被遊候

様、御老中松平豊前守様(信忠)ヨリ被仰渡候、依之明十五

日御礼後居殘、謁 御家老御祝儀可被申上旨被仰渡

候ニ付、此段致通達候、以上、

十二月十四日

十五日 曇、風少々アリ、

朝六ツ前起、六ツ半時分ヨリ帖佐郷士蓑毛郷兵衛・

時任平吉・蓑毛長左衛門、蒲生郷士指宿仲右衛門・

瀬之口覚右衛門・赤塚清左衛門来、五ツ過迄備振旁

委敷絵図面ヲ以致教諭候、後程砲術館へ罷出候様相

達候ニ付テハ、差付候テハ受取モ可悪存候間、折角

丁寧ニ相諭候事ニテ候、五ツ過出 殿、今日者當日

御祝儀ニ付テ

御出座、又

十四日 晴、

朝六ツ起、五ツ過御軍備調練之事ニ付末川家へ立寄、

四ツ前出 殿、八ツ過御下り後帰宅、直ニ砲術館へ

參、物主中集リ稽古方有之候、諸郷モ少々ハ出候、

大鐘過帰宅、今朝名越彦太夫殿入来、大鐘過内膳殿・

松岡喜左衛門殿入来、冲瑞雲殿ニモ入来候、おたね

并徳熊病キニ付テ先日ヨリ入来候、当分流行之風邪

ニテ候、主税ニモ先日ヨリ同断相煩候処、昨日共ヨ

リ少々快、今日月代イタシ候、

一重富地頭所、帖佐・宮之城地頭所、蒲生へハ御軍備

調練拙者ヨリ致指南候様、帖佐之儀ハ御軍役方ヨリ、

蒲生之儀ハ宮之城ヨリ承候、地頭又ハ物主ヨリ郷々

之者共指南之筈ニテ、此節何方郷々ヨリモ郷士年寄

老入、与頭老入、横目老入、都合三人ツ、罷出賦候、

御通達之写

(久光)
三郎様御儀、

三郎様へ之御祝儀ニ付テ御家老謁、夫ニ付而モ寺院・琉球人等惣出仕有之、且月限申渡且又御恩赦人三百人余有之、中々取込ニテ足モ地ニ不付、七ツ前申渡相濟候テ帰宅、飯差急キ給候テ又砲術館へ出、御軍備訓練ニテ夕方帰宅候、今日見廻人数、民部殿・鷲之介殿・新十郎殿入来候、暮過ヨリ 母上様・おつやさまナト御寢酒被召上、拙者ニモ御相手申上、四ツ過臥候事、

一末川主税殿ヨリ大崎郷士へ御軍備訓練拙者ヨリ致指南方呉候様承候、大崎八年寄山本庄左衛門、組頭堀之内雄右衛門、横目藤井次郎右衛門、

十六日 間々小雨、

朝六ツ起、五ツ時ヨリ田原直助殿へ一刻参り、夫ヨリ川上龍衛殿・島津出雲殿・川上但馬殿・川上筑後殿(久封)へ昨日家来塩田龜太郎殿江御恩赦被仰付候御礼ニ参候、五ツ半出 殿、八ツ半御下り後退出、直二帰宅、飯共給候テ又砲術館へ蒲生・帖佐・山崎之者之共へ為指南方参候、大鐘帰宅、又重富屋敷へ御歳暮

之御品々被成下候御礼ニ罷出、夫ヨリ薬丸氏へ悔トシテ参候、昨日猪右衛門殿死去ニ付テ也、暮帰宅候得八町田家お筆来候、今朝内記様一刻御入来之由候、お筆四ツ過帰、四ツ半臥候事、

御通達之写

一始良ヨリ郷士年寄野添平右衛門・組頭田野辺新藏・横目石田休右衛門来候由、明朝来筈、
給地高式百石以上、現在米并是迄時々売米、年中飯料困米之儀、急成御用ニ付間々別冊ニ取仕立、明後十九日限無間違当座へ可被差出候、此書付刻付ヲ以致廻達、留ヨリ但馬方へ返納可有之候、以上、

十二月十七日

十七日 晴、昨日迄兩三日ハ暖氣ニ候処、今日ヨリ又寒催、朝六ツ起、おたね先日ヨリ之病氣未快カラス、夜前モ安眠出来兼、舌煎干キ候由申候ニ付早朝沖氏へ又々主税遣シ、今朝来被呉候様申遣候処無程被来呉、是迄之残り薬リ八九ツ時分迄為吞仕廻、八ツ前ニハ今

朝転輔之葉責付為吞候様承候、始良之昨日出府之野添平右衛門・田野辺新藏・石田休右衛門来候、此節御改正之御備組調練之次第委細相咄候、五ツ過何レ

モ帰り、今日四ツ過砲術館へ罷出候様相達候、又入代り蒲生之瀬之口覚右衛門来、又同断、調練一件承候間委細相達候、マタ髮結、片手飯モ差急キ給候矣早川五郎兵衛殿入来、是モ調練一件二付御座被相頼、拙者老人ニテ請合候、且今日調練イタサレ候ニ付テハ御軍役方ヨリモ同様承居候事故、拙者指南イタス賦之始良・蒲生・帖佐・大崎之者共罷出候ハ、早川氏杯一陣人数之内へ被召加調練イタサセ呉ラレ候様相頼候、四ツ前出 殿、八ツ過御下り後退出、直ニ帰宅、又砲術館へ罷出、夕帰宅、暮過ヨリおむら様御出、四ツ半御帰、九ツ時分隊候事、

十八日 曇

朝六ツ起、五ツ半出 殿、八ツ半過御下り後帰宅、七ツ時ヨリ砲術館へ出席御備組調練ニテ候、諸郷ヨリ多人数出候、夕方帰宅、暮前ヨリ内膳殿へ用事有

之参候テ四ツ過帰宅、無程臥候事、今朝内記録・藤兵衛・源太夫殿入来候事、

十九日 快晴

朝六ツ起、今日者諸郷人数へ御備組調練指南ニテ五ツ過ヨリ砲術館へ参、八ツ時一刻帰宅、又参、夕帰宅、始良年寄川添平右衛門・組頭田野辺新藏・横目石田休右衛門来候、細々指南、酒共出候、六ツ過各帰、夫ヨリ内座ニテおつやさま・母上様ナト御打寄申上酒ナト少々給候、四ツ前隊候事、今朝伊藤六郎右衛門殿入来、昼野呂氏のおむめとの入来候也、

二十日 快晴

朝六ツ起、六ツ半時分ヨリ馬ニテ砂揚場調練場へ参候テ諸郷人数調練有之、大砲隊一組・小銃隊二組稽古方能出来候、八ツ前帰宅、八ツ半時分ヨリ早川氏へ一刻、川上右膳殿へ一刻参候、夫ヨリたんとお野屋敷へ参候テ夕方帰宅、暮ヨリ田原直助殿入来、

四ツ半時分被帰候、九ツ前臥候事、昼梅田九郎左衛門殿・沖瑞雲殿被来候、おたね病気モ余程快方、

二十一日

朝六ツ起、出勤掛重富屋敷へ罷出、周防殿へ御目通罷出候、図書殿へモ同断、五ツ半出 殿、御下り後八ツ半過帰宅、直ニ砲術館へ參、大鐘帰、今日六郎右衛門殿入来、八ツ後蒲生役々三人入来候、色々御手当事等細々申聞、今朝図書殿へモ調練随分指南仕候様、心得候段承届候段承届申候間、御暇被下候テモ可宜段申上候ニ付宮之城之方へ御届申上、御暇申上候テモ可宜旨相達シ、夜入九ツ時分臥候事、

二十二日 曇、寒冷又増、

朝六ツ時起、五ツ過起、重富屋敷へ周防殿へ御目通罷出、五ツ半出 殿、今朝鮫島何某被来候、是ハ兄吉左衛門殿今日御用之処、病氣ニテ不罷出候ニ付届承、左候テ、別段御殿ニテ御届可申上哉之旨承候ニ付、別段御届ニ不及、御殿ニテ御届有之候筋相心

得可申旨返答イタシ置、都合イタシ置候、外ニ小野強右衛門・三雲藤一郎御目付被仰付、拙者ヨリ相達候、今日又出雲殿ヨリ佐多地頭物主之由ニテ拙者ヨリ致指南呉候様致承知御受申上置候処、七ツ後佐多之者共来、川辺藤兵衛・組頭兒玉郷吉・横目橋元空之丞へ絵図等ヲ以テ細々致指南候、自分明日モ於砲術館可致指南旨相達候、八ツ後六郎右衛門殿入来、夜入五ツ過被帰、四ツ半臥候事、昼指宿猪之介殿へモ入来候事、

二十三日 晴、

朝六ツ起、五ツ過佐多郷士年寄川辺藤兵衛・組頭兒玉郷吉・横目橋元直之丞来候、昨日出雲殿ヨリ調練指南之儀承居候ニ付細々申聞候、五ツ半出 殿、七ツ後御下り後退出、直ニ帰宅、又砲術館へ參、大鐘時分帰宅、又直ニ重富屋敷へ參役人へ面会、調練一件致談合候テ日入比帰宅、夜入毎之通母上様・おつやさまナト御寝酒被召上御相手中申上、四ツ時分臥候事、

一重富屋敷留守居代合候由ニテ野間八郎左衛門来候、

敷へハ暮ニモ一度参候、

二十四日 快晴、

二十六日 雨、

朝六ツ起、五ツ半出 殿、七ツ時御下り後退出、帰
掛早川氏同道ニテ小松帶刀殿^(清惠)へ参候、今日御家老ニ
テ御側詰兼務被 仰付、為祝儀玄喚見廻候、七ツ過
帰掛砲術館へ一刻参候テ帰宅候得者、戸十郎先日ヨ
リ野屋敷ニテ病氣之処別テ不塩梅之由承候ニ付、嘉
美行列参候得者考ヨリモ宜敷方ニテ仕合ニ存候、葉
モ当分通ニテ随分相応之方故夕帰宅、暮過ヨリ平野
氏入来泊ニテ候、

二十七日 晴、夜入小雨、

二十五日 晴後細雨、

朝六ツ起、五ツ時折田平八殿へ参候、内之浦之者共
此節遅参之事、且重富屋敷調練之事共段々対話之事
有之、暫罷居候テ直ニ出 殿、七ツ時御下り後帰宅、
又直ニ重富屋敷へ罷出今日ヨリ調練相勤、日入比帰
宅、暮過ヨリ 母上様杯御寢酒之御相手申上、四ツ
過臥候事、今朝美代氏・指宿猪之介殿入来、重富屋

朝六ツ起、五ツ時分美代氏被来、五ツ半出 殿、七
ツ時分帰宅、七ツ過ヨリ重富屋敷へ罷出調練指南イ
タシ候、夕帰宅、昼権五郎殿入来、夕ヨリお広との
入来、九ツ前被帰候、九ツ過臥候事、
一昨日森川孫太夫大坂御留守居被仰付、今日相良治部
二番御小姓与番頭へ御役替被 仰付候事、

二十八日 曇、

朝六ツ起、朝藤兵衛殿入来、五ツ半出 殿、今日八
ツ時五番御小姓与番頭川上右近罷下迄之間寄役被

仰付(川上久運)但馬殿ヨリ、御取次ハ早川五郎兵衛ニテ候、八

二十九日 雨、

ツ後ヨリ与方へ参候、右ニ付テハ早川五郎兵衛ヲ以

朝六ツ起、五ツ過戸柱町田家へ一刻参候、又入来院

御用人ヨリ掛テ相勤可申哉、マタ与方へ混テ相勤可

恰殿へ参候テ昨日承知之御頼入之儀申入候処、能受

申哉之旨相伺候処、混テ相勤候様致承知候、八ツ過

合ニテ四ツ前出 殿、八ツ後退出、帰掛重富屋敷罷

帰掛重富屋敷へ罷出、御内用承候ニ付右之届申上、

出恰殿儀御首尾申上、御三居・御隠居へモ一刻ツ、

誰人ト歟跡御内用頼之儀被仰付候様申上候処、入来

御近習迄罷出候テ帰宅、夜九ツ時分臥候事、

院恰ニテハ如何可有之哉、又外ニ近方ニハ無之候哉

之旨被仰付、外ニモ御座候得共、恰殿儀ハ御続柄ニ

テ兼テ御出入モ申上候事故、恰御頼入可然旨申上候

得者、尤可然、其通拙者頼入呉候様ニト之御沙汰承

知仕候テ、今日ハ御暇、直ニ帰宅候得者美代氏被来、

地頭所内之浦年寄兼丸弥右衛門・与頭白坂壮次・横

目(空色)「空色」采居候ニ付面会盃共イタシ、一反ハ引入内座

ニテ委細調練絵図面等イタシ嘶申聞候、夕帰、暮過

ヨリおむら様・新次郎殿御出ニテ拙者并ニおたね誕

生祝イタシ候、おつや様ニモ未御泊候、母上様御

隠居開修甫ニテ此節新規同前イタシ差上候テ、今日

御移初モ有之、御隠居ニテ酒被下候、夜九ツ半時分

臥候事、

名越時敏日史

文久三年癸亥
正月ヨリ
三月マテ

日史第十九

(貼紙)
「名越日史」

文久三年癸亥正月ヨリ

三月迄

糺合未済

名越時敏 (花押)

文久三年癸亥正月中小

元旦 快晴

朝六ツ起、五ツ過ヨリ出勤掛少々礼廻、四ツ前出

殿、九ツ前退出、夫ヨリ新照院・西田・高麗町・上

荒田・下荒田・新屋敷辺・日置・花岡・千石町馬場

筋廻礼イタシ、夕帰宅、詰之家来共益共イタシ、夫

ヨリ家内中規式、拙者今晚些風邪気分之様有之候ニ

付、五ツ過比夜具三枚かぶり打臥候、夜分汗出、大

小便通シ、夫ヨリ余程快相成候事、

一今朝扇相開候得者椿ノ花咲タル図ナレハ、

咲初る椿ハ千代の色なれや

とし立かへるはるのあしたに

則是ヲ試筆ニ認ヌ、絵之書初ハ、如此、三男吉次

郎扇子蛤式ツ書タル図ナレハ、

治れる御代の春にも逢ぬれば

ひろひあつむる今朝のはまくり

主税扇子舞鶴ノ絵ナリケレハ、

立帰る春のあしたの大空に

千代をよほふる鶴の諸声

一当年ヨリ供廻等朔望通ト被

仰達、家来壱人鏈持下人ニテ登

城、廻礼之事、委細ハ仰出可見合、

二日 快晴、

朝六ツ起、朝内膳殿入来、四ツ時ヨリ岩崎ヨリ内之丸・後迫・横馬場町口辺・鶴江崎等礼廻、昼暫中戻ニテ又出、暮前帰宅、夜五ツ半臥候事、

三日 快晴、夜入雨、

朝六ツ前起、今日者

（久逸）

三郎様御装束ニテ福ヶ迫諏訪社御参詣ニ付、御清之

段承候ニ付 殿不致候処、夕方承候得者ニ之丸迄

御清ニテ為有之哉之由ニモ承候、昼御墓参、花舜軒

石心院ニ茂参詣イタシ候、夜四ツ半時分臥候事、

一 今日承リシ断

或人花山院様へ額ヲ願奉リシニ、泐如此一字ヲ御書

被下候由ナレトモ読人ナカリケルニ、市中ノモノナ

レハ往来之人読ケル人モアラン歎ト通り之方ニ掛置

ケルカ、アル日アンギヤ体之人立ト、マリ、扱面白

カイタ、サテくト賞美シケル故、イツラガ面白ク、

是ヲ読人サヘナカリシ故、誰ソ読人モカナト出シ置

タリ、何ト読可申哉ト問ヒケレハ、自分ニモ能ハワ

カラネット一句ト、

風月をはたかになして角力かな

トイタシ、誰トモイワスイツカタヘ歎ユキシ、此人

芭蕉ニテアリシトナリ、

一 今日来客之人江輪切大根ニ穴ヲ入、煮タルヲ出シケ

レハ、

しゅんかんのだいこ花咲山くじら

ト一句イタシ、面白故爰ニ記ス、

四日 晴、

朝六ツ起、五ツ半出 殿、八ツ御下リ後帰宅、七ツ

過ヨリ城ヶ谷・上之原・浄光明寺マテ参詣、帰宅、

夜入四ツ時分臥候事、

五日 霜降、快晴、

朝六ツ起、四ツ時出勤、八ツ後退出、今日者地頭所

招呼、暮ヨリ田原直助殿・奥山藤兵衛殿被来、九ツ

過被帰候、無程臥候事、

六日 霜降、快晴、夜入雨、

朝六ツ起、五ツ時ヨリ重富屋敷へ一刻罷出、夫ヨリ家鴨馬場辺礼廻イタシ、四ツ前出 殿、八ツ退出、直ニ帰宅候得者嘉美行来居、今日者都合次第岩爪元真可来旨承候ニ付今夕方ヨリ来候様相逢候、伊藤彦助殿・吉国壮吉へモ来候様申遣候処、伊藤氏ニハ故障有之不被来、各四ツ時分被帰候、無程臥候事、

七日 快晴、

朝六ツ起、四ツ八ツ出勤、退出ヨリ直ニ帰宅、直ニタンタウ・福昌寺門前辺年礼廻、夫ヨリ加藤家稽古始ニ参候テ稽古イタシ候、夕帰宅、暮ヨリ写本イタシ、四ツ過臥候事、
今日始良之役々へ御軍備調練指南イタシ候為礼黒岩与右衛門・田野辺卯助来候、

八日 晴、

朝六ツ起、四ツ前出 殿、夫ヨリ無程演武館初へ参

り、四ツ半帰宅、直ニ砲術館へ参、重富屋敷家中稽古指南イタシ候、周防殿ニモ八ツ過ヨリ御出、伊地知正治ニモ被来候、拙者ニハ夕方帰宅、五ツ時分ヨリ酒トモ 母上様杯打寄給候、

母上様御事、五ツ過ヨリ前へ御出、

先日御小姓与番頭寄被仰付候ニ付物主之儀相伺置候処、今日被成御免、吉利群吉へ代り被 仰付候、

一 今朝重富組頭牧瀬権兵衛・肥後運之丞被来候ニ付一刻面会イタシ候、帖佐之岩爪元真ニモ来致面会候、

一 御通達之写

御流儀砲術稽古方ニ付取締被仰付置候面々、都テ被成御免候条可被申渡事、

右之通被仰渡候間、此段致通達候、以上、

亥正月九日

六組触役所

九日 曇、夕ヨリ烈風、小雨、

朝六ツ起、四ツ時内記様へ一刻罷出、夫ヨリ砲術館

へ出席、重富家中訓練ニテ指南方イタシ、大鐘比帰

宅、是迄家来共ヨリ相企具置候模合来月迄ニテ相成

候ニ付、又々企具候筋ニテ松岡氏・児玉氏・美代氏

被来、家来名越祐右衛門・村田平藏・塩田市兵衛・

宮之原善右衛門其外模合方相掛居候者共両三人役所

へ打寄、彼是卜談合イタシ候由、拙者ニハ毎之通母

上様打寄六ツ半時分ヨリ酒共給候、四ツ時分臥候

事、

一柳五郎兵衛殿事、今日与方五番組書役寄被仰付候由

ニテ見舞之由、

十日 快晴、

朝六ツ起、五ツ過ヨリ重富へ罷出、周防殿御目通ニ

モ罷出、役人別府市郎左衛門へモ面会イタシ、四ツ

前演武館勤方ニテ田中氏剣術・平田家弓術見分イタ

シ、四ツ過ヨリ下方礼廻、八ツ前帰宅、無程上方廻

残シ田之浦ヨリ花舜軒御墓参詣、七ツ過帰宅、暮戸

柱町田家へ参候テ、四ツ半時分帰宅候得者前ヨリお

ミちさま・おせつとの被来、九ツ時被帰候、昼モ内

膳殿へハ参候処、明日御用承知之段承候、

十一日 霜降、快晴、

朝六ツ起、四ツ前出 殿、今日地頭繰替・御役替等

段々有之、

佐多

国分

関山札

大藏殿

阿久根

谷山

出雲殿

龍衛殿

小根占

鹿屋

将監殿

縫殿殿

顛娃

内膳

八ツ時帰宅、八ツ半ヨリ内膳殿へ参候テ、六ツ半時

分帰宅、四ツ時臥候事、川上清嘉殿ニモ御小坊主ヨ

リ御小姓へ御役替ニテ候故主税遣候、五ツ過帰ル、

一昨日潮音院ニテ宜湾親方詩歌自筆之者見候、至テ見

事、尤、詩歌モ宜候半ト存写取返リコ、ニ写、

朝鮮国漂着之時

宜湾

向有恒

我住天南君海北 人心何処不相同

衣冠言語雖分別 礼楽文章本可通

右朝鮮人見テ余程褒候而、是ハ商売杯ニテ乗居候人

ニテハ無之、何歎訳アル冠人ニテ可有之ト為申由、

宜湾

朝保

毎朝聞鷺

あさな、なきふるしてもあたらしく

きこゆるものはうくひすのこゑ

月前風

吹ま、にさわりし雲の行見れハ

風こそ月のひかり也けれ

夕帰雁

おしとおもふわかこ、ろさへひきつれて

ゆふへのそらをかへるかりかね

四十二なりけるとしのはる

霞さへ春とさためて立ものを

なほまとひぬるわかこ、ろかな

十二日 晴、

朝六ツ起、五ツ過重富屋敷役人別府市郎左衛門被来

候訳ハ、先日此節御手当御用トシテ二封度御申請ア

ラセラレタク役人迄嘶イタシ、周防殿御聞ニ入候

処、御覽ハ出来申間敷哉、其上御氣ニ入候ハ、御申

請可相成段致承知候ニ付、則御軍役方へ拝借之儀申

出先日御覽ニ入候処、御氣ニ入候ニ付御申請相成候

様御世話可申上旨承候ニ付、今日出 殿之上御軍賦

役伊地知正治へ内意申出候処、些六ヶ敷申候ニ付、

先達而都之城ニモ申請相成候ニ付、どふぞや被成様

ハ有之間敷哉之旨申出候得ハ、夫ハ訳有之、御免有

之候段被申候ニ付、重富之儀モ海岸場所柄、殊ニ先

日拝借ニテ 御覽ニ入候処、至極御氣ニモ入候ニ付

どふか御吟味之付様ハ有御座間敷哉之旨申候得者、

僅四挺位之事情間御人体モ被成御替候御方故、不参

モノニテモ有御座間敷候ニ付願書差出候様承候、五

ツ半戸柱町田家へ参、四ツ前ヨリ演武館勤ニテ相勤、

四ツ過帰宅、野屋しきへ参、八ツ半帰宅、夜四ツ過
臥、

正月十三日

(川上久美)
式部

十三日 霜降、晴、

朝六ツ起、平田九十郎殿被来、五ツ過河俣へ参、又
演武館勤ニテ相勤、四ツ過ヨリ御殿へ罷出、八ツ前
帰宅、大鐘ヨリ内膳殿・川北孫左衛門殿・野村勘兵
衛殿・近藤七郎左衛門殿・安田喜藤太殿被来、四ツ
半過被帰候、無程臥候事、

此度以

勅使攘夷之儀被仰出、策略之次第ハ衆議被為尽候上

御決策被

仰上トノ趣、今般從

公義被

仰渡候、就而者

御領内之儀、専海岸之要路ニ候得者諸士一同策略被

聞召上度被

思召候、此旨早々可申渡旨被仰出候条、向々へ不洩

様申渡、諸郷・私領へモ早々可被申渡候、

但、郷士以下タリ共建議仕度モノハ不苦候、尤、

来ル廿日限一同可差出候、

正月

式部

御通達之写

琉球通宝

但、裏ニ当百之文字

右者琉球為通融

(辨カ)

公義御届之上此節御禱造被仰付候ニ付、御領国中之
儀茂通融被仰付候条、壹枚ニ付百式拾四文ニテ、今

日ヨリ御蔵々入私者勿論、諸人致取遣候様被仰付候、

此旨支配中へ申渡、奥掛・表方へ相達、諸郷・私領

へモ可申渡候、

十四日 晴、

朝六ツ起、六ツ過伊東次郎右衛門被来、五ツ時分伊

藤彦助殿入来、無程被帰候、五ツ過ヨリ重富屋敷へ

罷出候、周防殿御目通へモ罷出、役人へモ面会、

夫ヨリ出 殿、八ツ後帰宅、又河俣氏・河野家・伊

藤六郎右衛門殿・田原直助殿杯へ参候、大鐘前帰宅、

夕方内之浦へ異船来候届口上ニテ承候二付、川上但

馬殿へ御届申上候、異変無之候ハ、時々ハ不申上

一段申上候、其後又書付ヲ以兩度届承候、物主吉利群

吉殿ニモ一刻入来有之候届書ハ左ニ記ス、

御通達之写

此節従

公義

勅書写等被成御渡候二付、御一門方并島津図書殿・

島津又六郎一列、大番頭以下月次御礼罷出候面々、

無格小番・新番・御小姓与へ拝見被仰付候条、明十

五日四時被罷出候様向々江可致通達事、

老番口上届

二番届

覚

正月十三日申之刻仕出

内之浦

蒸気船壹艘

右者今七ツ時分爰許大崎沖へ異船ト相見得候二付、

則口達ヲ以御届申上候処、無間茂当浦ヨリ六七丁之

所へ汐掛仕候二付早々御届申上候、尚委細之儀、追々

可申上候間此段申上候、以上、

横目

亥正月十三日

久木元喜左衛門

組頭

白坂壮次

郷士年寄

吉井玄泰

三番届

覚

正月十三日戌刻仕出

蒸気船壹艘

右者今七ツ時分当浦ヨリ六七丁之処へ乗人汐掛仕候

二付、則御届申上置、直ニ役々右船へ乗付様子尋問仕候処、啖咭利船八拾人乗組ニテ江戸・横浜出帆、長崎表へ差越候ニ付薪・楢柑・庭鳥玉子・肴及払底致所望度候間、右品々書記、明十四日六ツ時船へ持来具候様、左候得ハ直ニ致出帆、右書付之儀ハ於長崎可差出段承申候ニ付、右品々相渡申答御座候、尚相変候儀ハ追々可申上旨、此等之形行早々申上候、以上、

但、相渡候諸品之儀、一昨年五月御軍賦役田原直助殿ヨリ被仰渡候直成ヲ以壳渡申答御座候、

横日・組頭・郷士年寄
亥正月十三日
名前等名前右同人

十五日 晴

朝六ツ起、四ツ前出 殿、今日於敷舞台勅書等拝見被 仰付候、諸士拝見之節ハ与頭ニテ席詰イタシ、七ツ相成退出、直ニ帰宅候得者家村幸之丞殿被来、無程被帰、お筆ニモ来候テ夜入九ツ時帰候、無程臥候事、

一内之浦へ来居候異船モ出帆之届有之候由ニテ、取次美代藤兵衛ヨリ届申出置候由、

今日拝見之

勅書等之写五通

勅書写

攘夷之念先年来到今日不絶日夜患之、於柳營各变革施新政欲慰

朕意、怡悦不斜、然拳天下於無攘夷一定、人心難到一致乎、且恐一心不一致異乱起於邦内、早決攘夷布告于大小名、如其策略武臣之職掌、速尽衆議定良策可拒絶醜夷、是朕意也、

勅使持參御書付写

今般攘夷之儀決定有之、天下へ布告ニモ相成候上者外夷何時海岸ヲ却掠シ(畿内)幾内ニ闖入之程茂難測候間、

禁闕之 御守衛嚴重被

仰付度被

思召候、然処海国ハ夫々防禦向茂有之、海岸ニ引離

候諸藩ハ救援之手当等有之候事ニ付、辺鄙ヨリ畿内ニ警衛差出居候テハ自然不行届之筋茂可出来、且自国之兵備手薄ニ相成、国力之疲弊ニモ可至候間、京師守護之儀者御親兵トモ可称警衛之人數ヲ不被召置候而者、実以

宸襟ヲモ不被安候間、諸藩ヨリ身材強幹・忠勇氣節之徒ヲ令撰募、時勢ニ従ヒ旧典ヲ御斟酌ニ相成、御親兵ト被遊度被

思召候、右親兵被為置候ニ付テハ武器・食糧等准之候間、是亦諸藩へ被

仰付、石高相応貢獻致候様被遊度候、但是等之儀ハ制度ニ相渡候事ニ付、於関東取調諸藩へ伝達有之様被仰出候、最即今之急務ニ候間、早速評定可有之御沙汰被為在候事、

勅定之書付写

先般墨夷仮条約無余儀次第ニテ於神奈川調印、使節へ被渡候儀、猶又委細間部下総守上京被及言上之趣(監勝)候得共、先達而

勅答諸大名衆議被

聞食度被

仰出候詮茂無之、誠

皇国重大之儀、調印候後言上、

大樹公

叡慮御伺之御趣意茂不相立、尤、

勅答之御次第ニ相背輕卒之取計、

大樹公賢明之処有司心得如何ト御不審被

思召候、右様之次第ニテ者蛮夷之儀ハ暫差置、方今

御国内之治乱如何ト更深被(備)腦

叡慮候、何卒公武御実情ヲ被尽、御合体永久安全之

様ニト偏ニ被

思召候、三家或大老上京被

仰出候処、水戸・尾張両家慎中之趣被

聞食、且又其余宗至之向(室カ)同様 御沙汰之由モ被

聞食及候、右者何等之罪状ニ候哉難被計候得共、

柳宮羽翼之面々当今外夷追々入津不容易之時節、既

二人心之帰向ニモ可相拘、旁被腦

宸衷候、兼テ三家以下諸大名衆議被聞召度被 仰出

候者、全永世安全公武御合体ニテ被安

叡慮候様被

思召候儀、外虜計之儀ニモ無之、内憂有之候而者殊

更深被腦

宸襟候、彼是国家之大事候間、大老・閣老其他三家・

三卿・家門・列藩外様・譜代共一同群議評定有之、

誠忠之心ヲ以得卜相正シ、国内治平・公武御合体弥

御長久候様

徳川御家ヲ扶助有之、内ヲ整外夷之侮ヲ不受様ニト

之

思召、早々可致商議

勅諭之事、

御演達書写

先年中水戸中納言殿江御渡ニ相成候

勅諭、其比井伊故掃部頭等不都合之取計致置候ニ付、
(直題)

此度改テ御承奉之儀、水戸中納言殿江被

仰出候、右

勅諭之趣銘々厚ク相心得候様被

仰出候事、

御書付写

此度

勅書之通被 仰出候付テハ銘々之策略被為聞度被

思召候間、見込巨細相認、来二月

御上洛前ニ早々可被差出候、依テハ御国内之人心一

致ニ無之候テハ難相成ニ付兼テ茂申達置候得共、猶

此上別テ入念武備嚴重相整候様可被心掛候、尤、委

細之儀ハ 衆議之上

叡慮御伺ニ相成候間、方今無謀之所行無之様、銘々

家来下々江茂屹ト可被申付置候事、

十六日 晴

朝六ツ起、四ツ前出 殿、八ツ後退出、直ニ帰宅、

七ツ時分ヨリ塩田武右衛門来候、暮帰候、美代藤兵

衛殿ニモ入来、七左衛門ニモ出候、各夕方被帰候、

暮ヨリ写本、喜悅来、おたねアンマトリ候、

十七日 晴後細雨、

朝六ツ起、五ツ半出 殿、八ツ退出ヨリ島津仲殿・島津良馬殿・島津権五郎殿同伴ニテ家鴨馬場学校所希賢堂へ参候、童子素読講義、劍術・鎗術致見分候テ夕方帰宅、 母上様其外家内中五ツ過ヨリ打寄御寝酒御相手申上候、喜悅来、昨夜同断、

十八日 風雨、

朝六ツ起、五ツ過市成島津彈正殿仁十郎ヨリ上京、今日出立ニ付暇乞ニ参候、夫ヨリ竹下清右衛門殿へ参候、是此節重富屋敷ニ封度大砲四挺御申請之事ニ付而、都合向等宜相頼置候、町田民部殿へモ参候、四ツ前出勤、八ツ退出ヨリ演武館弓射へ参候、同役談合之儀有之候、島津求馬殿・島津良馬殿・島津権五郎殿・相良治部殿・島津主計殿・島津織之介殿・島津帶刀殿・関山札殿・町田民部殿・川上右膳殿被参候、七ツ過島津権五郎殿へ一刻参候、先月十九日江戸ヨリ島津登殿当年御年五十九才写真鏡ニテ被取候御像昨年被差下候、十二月十九日御着之由ニテ今日初テ拜上、

誠ニ寸分モ御違ヒ無之、感心之者ニ候、

一 太守茂久公、今日者不時御乗廻ニテ七ツ時過白尾、七ツ過加藤、大鐘過重富へ御蹈込被為在 御座、誠ニ難有御事ニ奉存上候、白尾所未出席、加藤者居相十人計出席ニテ切候処ニテ為有之由、重富ハ御式日ニテ白尾罷出、御稽古相濟御料理等頂戴之所為有之由候、

御通達之写

(青柳文)
暁姫様・

(青柳文)
寧姫様

御光着ニ付

御通路へ罷出候面々、

御乗輿

御通過被為

在候共御跡乗迄ハ御行列内之事候間、右通行相濟迄ハ折敷罷在、不敬之儀有之間敷候、此旨不洩様可致通達候、

正月十九日

(川上久美)
式部

障姫様・

寧姫様明後廿一日

御光着ニ付、島津又六郎一列其外月次御礼罷出候面々、

先達テ申渡置候通夫々

御通路筋へ御刻限前以被罷出、

御光着以後登

城謁御家老御祝儀可被申上候、

以下略ス、

正月十九日

式部

十九日 晴、

朝六ツ起、四ツ八ツ出勤、朝伊地知八郎右衛門殿一

刻被来、八ツ前ヨリ二階堂弥六との被来、七ツ時分

被帰、おこととの・郷十郎来候、夕ヨリお村さま御

出、夜四ツ過御帰候事、六ツ半時分ヨリ 母上様御

隠居ニテ御嘶申上候事、

二十日 快晴、夕風、

朝六ツ起、六ツ半過出勤掛田原直助殿へ参、夫ヨリ

重富屋敷へ罷出、夫ヨリ平田家・加藤家・花舜軒御

墓へモ参詣、四ツ八ツ出勤、八ツ後伊藤六郎右衛門

殿入来、村田平蔵同断、暮ヨリ田原直助殿入来、九

ツ時分被帰候、無程臥候事、

正月十五日地頭繰替又ハ被仰付候来

串木野

隈之城

島津主殿

島津仲

大始良

山之口

島津頼母

島津内蔵

初テ被仰付候、

高江

市来次十郎

初テ被仰付候、

踊

北条織衛

御通達之写

一小番・新番・御小姓与打込、拾五歳以上六拾歳迄五

人組イタシ申出候様被仰付候、左候テ、可成同組ニ
テ組合候様被仰付候、

但、他行其外伍人之内一人者不苦候得共、式人以
上不相成候、

一 寄合以上タリトモ二男三男小番二準シ候面々ハ諸士
同様与合被仰付候、

一直触以上奥向之儀ハ組合不及候、

一 三年ニ忝度組合出入之調被仰付候、

右之通被仰付候条、此旨表方へ致通達、奥掛・御
勝手方へ茂可相達候、

正月

式部

右四番組

一 豎馬場ヨリ西南

右五番組

一 豎馬場ヨリ東北

右六番組

右之通六組方限被相替候条、此旨表方へ致通達、奥
掛・御勝手方へモ可相達候、

正月

式部

暉姫様・

寧姫様明廿二日四ツ時伊集院地頭仮屋

御立、諸所

御休等ニテ御行掛未下刻比被遊

御光着候旨申来候間、諸御手当向者勿論

御祝儀等之儀モ先達テ申渡置候通、向々へ不洩様早々

可申渡候、

正月廿一日

式部

一 高見馬場ヨリ西北

右一番組

一 新上橋辺・草牟田・西田・常盤方限

右二番組

一 高見馬場ヨリ東南

右三番組

一 高麗町・荒田・中村

二十一日 小雨、

朝六ツ起、平佐へ出勤掛一刻参候、今日者

暁姫様・

寧姫様御着之筈候処、

暁姫様御風邪氣ニテ御延引相成候、

御着御日限之儀者追テ被仰渡段被

仰渡置候処、右御通達通被 仰渡、明日御着之賦、

八ツ後退出、直ニ帰宅、夜入過ヨリ 母上様打寄酒

給候、家内中同断、四ツ過臥候事、

二十二日 曇、

朝六ツ起、五ツ過出

殿、今日者

暁姫様・

寧姫様御着之御賦ニテ九ツ半ヨリ御台所御門下へ同

席中其外モ出張 奉待上候処、暮前御着相成候、直

ニ帰宅、千石馬場拜上人数無限込合候事夥敷候、

御姫様方皆様御在国相成候ハ三百年以上ニテ、誠ニ

難有御事ニ奉存候処、不思両眼ニ涙浮フ、夜入意祝

ニ家内中打寄酒取替シイタシ候、然レトモ拙者ニハ

用事有之故、八ツ過迄起居候テ臥候事、

二十三日 快晴、

朝六ツ起、五ツ過出

殿、今日ハ組分・方限分一件段々吟味有之候故、八

ツ半時分帰宅、夕方伊藤彦助殿一刻被来候、夜七ツ

時分臥候事、

二十四日 快晴、

朝六ツ起、御用談ニ付仲殿へ一刻参候、四ツ八ツ出

勤、昼新兵衛来候、国分之家来（空白）銀助嫡子之銀蔵

初テ列来候、今夜泊候九ツ、九ツ半臥候事、

二十五日 夕雨、

朝六ツ起、四ツ八ツ出勤、七ツ過ヨリ町田民部殿入

来、夜四ツ半時分被帰、無程臥候事、

太守様御方御側役へ取次上書申上候、

二十六日 晴、

朝六ツ起、四ツ八ツ出勤之事、

二十七日 晴、

朝六ツ起、四ツ八ツ出勤、退出ヨリ直ニ帰宅、又無
程馬ニテ民部殿へ参、夜九ツ過帰宅、貞操院との・

三木原等殿妻・山岡家ヨリ被来居候、おすまとの・

おつるとの被来被泊候、おすまとのニハ被帰候、

一今日大番頭御座御引取ニテ御小姓与番頭打込被仰付

候、伊集院巨殿ニハ大番頭ニテ六番御小姓与番頭兼

務被仰付、与頭ヨリ島津仲・島津壬生・川上源十郎・

関山糺・島津良馬大番頭寄被仰付、御小姓与番頭是

迄之通り相勤候様被仰付候、是迄相勤被居候巨殿外

ニ島津隼人当御役ニテ御勤定奉行勤、比志島静馬同

断、菱刈李之介当御役ニテ寺社奉行勤、是迄ハ大目

付ニテ大番頭勤ニテ候、

二十八日 晴、

朝六ツ起、四ツ八ツ出勤、退出ヨリ島津権五郎殿同

刻拙者迄六人集リ、四日九日之調練之儀談合イタシ

候、外ニ参候人数、樺山要殿・町田民部・北郷数馬・

島津織之介ニテ候、暮ニハ皆引取、拙者二者夜四ツ

前帰候、帰掛平佐おつやさまへ罷出候、昼ヨリお広

との・おたねなと被参居候、九ツ前帰候、無程臥候

事、

御小姓与番頭

右者是迄造士館掛・演武館掛御人擢ヲ以掛被 仰付

置候得共、以来惣掛被仰付、大番頭之儀モ同様被仰

付候、此旨可申渡候、

正月

(島津久敏)
大藏

御小姓与番頭

右者御近習通被 仰付、依事テハ御前へ被召出儀モ

可有之候条、尚又平常其任ニ堪候様可申渡旨被仰渡

候、

正月

大藏

二十九日

朝六ツ起、四ツ八ツ出勤、八ツ後帖佐之岩爪玄真来

候、郷十郎并町田(空目)殿被来候、夜入四ツ過ヨリ

母上様御前へ罷出御寝酒御盃共頂戴、四ツ半時分臥

候事、

一 島津主殿殿事、今日

(久志)三郎様御上京御供被仰付候旨吹聴来、

今日仰出之写

寄合以上之儀ハ自然重職ヲ茂被仰付、大任身柄ニ候

得者治己治人之道屹ト研究無之候テ不相濟事候ニ付、

造士館へ被致入学候様被

仰付置候間、折角被致出精候様、左候テ、精粗之次

第可被遊

御覽候間、星帳取仕立毎月末御用部屋へ差出候様

御沙汰被為 在候条、此旨寄合以上面々江致通達、

教授へモ可申渡候、

正月

大蔵

日史第二十

文久三年癸亥二月中

朔日 晴

名越時敏 (花押)

朝六ツ起、四ツ前出勤、同刻造士館へ出勤、又九ツ

時ヨリ出 殿、八ツ過退出、直ニ帰宅、今日チラト

承候ハ、異国船数艘前之浜へ近々押寄候様相聞得、

其事ニ付御軍役奉行新納次郎四郎明日早々長崎へ可

遣候段承候、就テハ御軍役之事、何歟ト先度ヨリ手

当イタシ置候得共、尚又精微手ヲ付候含ニテ銀太刀

拵掛置候ニ付、是非四五日之内致成就候様翰師岸良

喜右衛門呼寄、直ニ何歟ト相頼候、拙者相達候通無

相違近日中成就イタシ可申旨承候、ヒストン筒モ拵

掛置候ニ付是モ尚又手ヲ付候、早籠入付、其外来搗

入、家来共之儀モ駈付申渡置候得共、尚又委細相達

置候様申付候、陣羽織モ少シ短メ候賦ニテ仕立物之

良介申遣、夜入候テ来候、今晚出来不申候哉ト申候

得共、今晚之儀ハ難出来申候ニ付、明日ハ拙者調練

ニテ早クハ差支候ニ付、八ツ後來呉候様相達候テ六

ツ半帰、昼者内膳殿入来、夜五ツ半ヨリ 母上様御
寝酒御相手申上、四ツ過臥候事、

今日

御筆仰出之写

条々

- 一 詩歌諸游技専ニ相嗜、士ニ不似合所業有之間敷事、
- 一 応知行高軍役人数且兵器・粮食之不足有之間敷事、
- 一 衣食住ニ奢侈無用之事、
- 一 組合中長病或死去之者候ハ同伍ヨリ早速物主へ可申
出事、
- 一 什伍之組合互ニ可和陸事、
- 一 右之通堅固可相守之者也、

文久二年壬戌十月

御名乗御判

二日 晴、冷氣アリ、

朝六ツ起、五ツ前ヨリ田原氏へ參候、ヒストン筒拵
方下知相頼置候ニ付為催促參候、一刻ニテ直ニ馬上
ニテ調練場之様參候、今日御先手一隊調練之賦候得

共、六組共出張ニテ候故矢張一陣之調練有之候、来
ル五日一陣調練被仰付候ニ付、其内ニ一隊調練申出
今日有之候、御旗本ハ来ル七日一陣被仰付、明三日
一隊調練、拙者当分承候、御城下守兵ハ来ル九日調
練被仰付候ニ付、四日ニ一隊調練之筈候、拙者五番、
同組御先手島津仲殿・御旗本川上右膳殿ニテ候、守
兵之同組一番北郷数馬殿・二番町田民部殿・三番樺
山要人殿・四番島津織之介殿・五番拙者・六番島津
権五郎殿、八ツ前帰宅、八ツ時什長以上御手当人数
拙者宅へ招呼、四日九日調練之儀委細渡候、書役村
田林兵衛来候、仕立物良介モ来、陣羽織短メ方早ク
出来候、夜五ツ過ヨリ
母上様杯打寄御寝酒御相手ニテ、四ツ時臥候事、

昨日

御筆仰出之御家老衆御添書

御軍役ニ付、平常

御沙汰之趣御別紙之通

御筆ヲ以被

仰出候条、一統謹テ可奉承知候、右ニ付テハ当今士
風一涯致振起、文武之励ハ勿論之事ニテ、衣食住之
儀弥費用ヲ省キ質素節儉ヲ相守、兵器・粮食夫々分
限相応致用意、急場之御用無滞可相勤、就中組合中
ハ和睦信義ヲ専ニ相心得、聊疎意無之御条目之趣堅
固可相守候、

右之通可被奉承知候、

二月

(川上入封)
筑後

(島津入徴)

大蔵

(川上入運)

但馬

(川上入美)

式部

三日 快晴、

朝六ツ起、五ツ過ヨリ馬上ニテ調練場江出張、今日
ハ御旗本御手当一隊調練一篇無砲ニテ稽古有之、又
現打調練有之、八ツ後帰宅、今日四ツ過白浜小兵衛
刀拭ニ来候、大鐘比帰候、刀大小三拾本余解崩シ忠
迄拭候、(心カ)間之鏑落シ茂イタシ候、其内ニハ身刀モ有
之、家来以下冠用之半首緒付方イタシ、主税ニモ付

方イタシ候、

御通達之写

砲術館

右、以来上演武館卜相唱候様被仰付候条、此旨向々
へ可致通達候、

二月

筑後

種子島家ヨリ来候書状之写

当月七日ヨリ

毎月七日・十七日・廿七日

筑地射場

右毎モ八ツ後ヨリ式日相建申候間、御出場被下度此
旨御参申上筈御座候得共、乍恐申上置候、以上、

二月四日

種子島直次郎

名越左源太様

谷崎仲次郎様

名越主税様

一二月十九日 巳刻

右

御首途、

一同廿八日 巳刻

右

御発駕、

右

三郎様就

御上京、右之通被

仰出候条、可承向へ

可申渡候、

二月

（川上久封）
筑後

一 （忠義） 太守様御儀、先達而

御参府被遊候様被

仰出置候得共、此節

三郎様御儀

御上京被遊候様被

仰出候、付テハ右御用被為濟候上、

太守様ニハ被遊

御参府候様於京師一橋中納言様ヨリ被

仰出候条、此旨向々へ不洩様可致通達候、

二月

筑後

四日 晴、

今朝御先手御備組調練ニテ夜前八ツ前起、七ツ時ヨ
リ調練場江出候、五ツ半時分相濟、帰掛川上式部殿
所江、四ツ時迄源十郎殿方ニテ相断候テ、直ニ馬ニ
テ乗切帰候、今日ハ久々ニ隙ニテ余リ屋敷草生茂リ
候ニ付、家来下人皆共集草取共イタシ候、岩崎島津
求馬殿所へ是迄居候馬飼今日ヨリ拙者方へ召置候、

御通達之写

別紙三通之通従

公義被仰渡候段申来候条、此旨表方へ致通達、奥掛・

御勝手方へモ可相達候、

正月

（島津久敏）
大蔵

一 御軍艦ニテ来二月

御上洛被遊候ニ付、一旦大坂 御城へ

御着城、夫ヨリ淀川通御乗船ニテ伏見へ御泊、翌日

二条

御城へ被為 入候旨被

仰出候、

右之趣、万石以上以下并御供之面々へ不洩様可被相

達候、

十二月

一来二月

御上洛之節久能山 御社参、

還御之節三州大樹寺

御立寄、

御拜可被遊旨先達而被 仰出候処、今度御軍艦ニテ

御上洛被遊候ニ付、 御社参等不被遊旨被 仰出候

間、此段万石以上以下并御供等之面々へ可被相達候

事、

一 近来御国人民品々御用途相勤、宿駅疲弊不少趣被

聞召、就テハ来二月

御上洛之節、陸地御旅行ニテハ一同之疲弊モ甚下深

御憂念被遊候ニ付、御軍艦ニテ

御上洛被遊候旨被

仰出候、依テハ陸地通行御供之面々等モ精々冗費相

省候様可致旨被

仰出候、右

思召之程銘々厚相心得可申様、

右之趣、万石以上以下并御供之面々へ可被相達候、

十二月

五日 曇、

今日者御先手御備組調練ニテ夜八ツ時起、七ツ時ヨ

リ砂揚場調練場へ出候、戦兵六ツ時揃ニテ、六ツ過

調練相初リ、五ツ半時分相濟候、直ニ帰宅、惣物主

者御家老川上但馬殿ニテ候、御軍役方ヨリ田中治右

衛門・永田十郎物見ニ出候、惣物主之後ニハ御軍賦

役折田平八・田代宗次郎騎馬ニテ被付居候、暮ヨリ

武井半之丞殿久々不参候ニ付参度承被来候テ、四ツ

時分被帰候、塩田吉次郎ニモ来候、無程臥候事、

御軍役ニ付テハ近年追々被仰渡趣有之、殊ニ去春伍

人組合帳差上候様承知仕、郷士人体組合帳差上置申

候、其後御人数賦帳御渡相成、右ニ基キ賦帳差上置

申候、然処此節職掌帳ヲ以勤場之次第細々被仰渡趣

承知仕、職務御請仕居候人柄実場ニ引競へ得卜吟味

仕候処、役職相勤候者共ニモ過半ハ近年諸郷ヨリ之

移郷士ニテ、全体困窮者於本郷茂在方・中宿、又ハ

幼少之砌ヨリ大工職・木挽職等ニテ諸郷へ稼ニ出、

其郷々去出之者共而已ニテ、筆算者勿論武芸等之業

合分テ無御座、帳面ニハ多人数相見得申候得共、土

民同様之素生ニテ実場之武用相立候者無 御座、

御国家御一大事之御用筋、今形ニテ御請為仕置、後

日実場ニ望不都合罷成、何様御断申上候テモ其甲斐

無御座、第一不忠之大罪難忍御儀卜奉存、依之役々

中得卜尽愚案申談、近郷等振合承合申候処、当所御

賦卜ハ甲乙有之向承知仕、爰許之儀モ人数御減少御

願申上度奉存候、何ソ御軍役太儀ニ存、右様申上候

儀ニテハ曾テ無御座、前文之人柄故後日之大患奉恐
入、此等之御願申上候間、何卒成合候様被仰上被下
度奉存候、以上、

横目

亥二月朔日

久木元喜左衛門

右同

江口次左衛門

右同

東郷五郎右衛門

組頭

養毛郷右衛門

右同

白坂壮次

右同

相良治左衛門

郷士年寄

吉井玄泰

郷士年寄

兼丸弥右衛門

郷士年寄

養毛郷兵衛

御地頭所御取次衆中

右地頭所ヨリ申出候得共、不容易事ニテ表通難差出願書ニテ取次前ヨリ相下置候様相達置候、乍併夫形ニモ難召置候ニ付、内分拙者ヨリ御軍役方へハ申出置候賦、

御通達之写

喜入撰津殿（久西）

右者御内用之儀有之上京申候得共、江戸へ御内用之儀有之出府被仰付、御用濟之上島津登殿（久也）へ致交代候様被仰付候、

右之通、先月八日於京都被 仰付候、此旨表方へ

致通達、奥掛・御勝手方へモ可相達候、

二月 （小松清麿） 帯刀

御供其外旅行等之節縮緬羽織之儀、袷単相用候テモ不苦旨被仰渡置候得共、此節

御変革被

仰出候付テハ以来御供等之節逆茂致着用候儀一切不成候、

但、拝領品之儀者別段之事候間、相用候而茂不苦候、

右之通り屹下可申渡旨被

仰出候条、此旨向々へ可致通達候、

二月

（川上久封） 筑後
（島津久徳） 大蔵
（小松清麿） 帯刀
（川上久連） 但馬

鹿兒島

横井御飯屋

苗代川御飯屋

湊御飯屋

向田御飯屋

西方御飯屋

阿久根御飯屋

但、御着翌一日

御逗留、

阿久根ヨリ

御乗船、

兵庫江

御着船、

但、御着翌一日

御逗留、

兵庫

西之方

大坂

但、御着翌一日

御逗留、

大坂

但、川御登一日、

伏見

但、御休無之、

京都

右者

三郎様

御上京右之通御休泊可被遊御通行旨被

仰出候条、此旨可承向へ可申渡候、

六日 朝曇、夜入雨ト成ル、

朝六ツ起、四ツ前出 殿、四ツ時ヨリ造士館へ相勤、

八ツ後帰宅、夕ヨリおむら様御出、拙者ニハ明日御

旗本訓練ニテ、七ツ時ヨリ砂揚場訓練場へ出張之賦

候間、乍御失礼六ツ半時分ヨリ臥候事、

一富国策并木崎館へ御台被相下、詩文章ニテ申上候様

被 仰付候由、

七日 雨風、

今日ハ訓練ニテ夜八ツ時起、七ツ時ヨリ砂揚場訓練

場江出張、五ツ半相済帰宅、昼おミちさま御出、夜

四ツ時分臥候事、

今日者御名代島津周防殿御軍賦役徒ニテ御付添申上

候、

八日 雨、

朝六ツ起、四ツ八ツ出勤、昼加藤権兵衛殿入来、郷十郎モ同断、今日拙者銀太刀拵成就相成候二付、福留吉太郎・岸良喜右衛門此内ヨリ拵方致世話候二付、夕ヨリ招呼酒共為呑候、夜五ツ時分臥候事、明日又拙者当番之御城下守兵之訓練有之賦、

九日 霜降、桜島雪、昼雪降、

今日者御城下守兵訓練ニテ拙者当番故夜九ツ過起、八ツ過ヨリ砂揚場之様出候、六ツ前戦兵惣テ揃之届承、惣物主御家老ハ川上（久速）但馬殿ニテ、六ツ過稽古相初り、五ツ時稽古相済、夫ヨリ野村門人射候、暫見候テ五ツ半時分帰宅、九ツ過比沖小島・桜島上下遠見番所異国船相図有之候二付、則受持之祇園之洲之様駈付候処、拙者一番早く、追々島津仲殿・島津権五郎殿ニモ被駈付候、然ル処異国船ニテ無之、蒸気船ニテハ候得共、日之丸并十文字御紋付目印有之候二付八ツ過ニハ帰候、些風邪之様有之候二付、暮ヨリ夜具重ネ取カブリ臥候事、昼加藤清十郎殿被来候、

名越祐右衛門ニモ明後日ヨリ小倉辺迄暫之旅イタス由ニテ来候、宮之原善右衛門ニモ同断、祐右衛門同列ニテ参ル由、墨一件卜聞カレ候、

十日 雪降、

朝六ツ起、四ツ前ヨリ造士館へ相勤、八ツ後退出ヨリ川上家へ一刻立寄、夫ヨリ二階堂家御姉様御法事ニテ参、暮過帰候、今日嘉美行帖佐ヨリ来泊、

御通達之写

島津周防殿

右者別段

思召之御訳被為

在、三日置又者五日置ニ一往御家老座へ出席有之、

御家老中ヨリ御用向御相談申上候者御聞届、且又品

二寄候テハ可被遊

貴聞旨今日

御直ニ被

仰付候、

右之通表方へ致通達、奥掛・御勝手方へモ可相達候、

二月十日

(小松藩)
帯刀

島津周防殿

右者此節御家老座江出席被仰付候付テハ御家老座上席被罷在候様被

仰付候、

一年頭・八朔其外節旬日・朔望或屹立候御祝儀事等之節ハ家格之通可有之候、

但、其節之御礼濟二者居残、御家老座江モ出席可有之候、

一御領國中江連判ニテ申渡事并近国等江書通之加判ニ不及候、

一平日出席之節ハ中之口ヨリ被罷上、退出モ其通ニテ御目付出迎ニ不及、表坊主先立ニテ御付、御納戸格等中之口ヨリ御家老座入口迄付添、退出モ同断、

一御名代勤并火消被成御免候、

一御用無之節ハ八ツ前ニテモ退出、又出仕モ四ツ過ニ

テモ不苦候、

右之通被

仰付候条、表方へ致通達、奥掛・御勝手方へモ可相達候、

二月十日

帯刀

島津周防殿

右者別段

思召之御訊被為

在、三日置又ハ五日置ニ一往御家老座へ出席有之、御家老中ヨリ御用向御相談申上候ハ御聞届、且又品ニ寄候テハ可被遊

貴聞旨

御直ニ被

仰付候、依之御役人之面々、

周防殿御宅へ不洩様御祝儀ニ罷越候様、向々江可申渡候、

二月十日

帯刀

十一日 晴、

朝六ツ起、五ツ時ヨリ 周防殿江罷出、昨日之御祝儀且可罷出旨被仰下候ニ付御礼等申上候、夫ヨリ役人へ用事有之参候処、別府市郎左衛門ニハ交代ニテ帰候由ニテ、緒方織右衛門ト申候役人来居候、用事之儀モ相達、夫ヨリ町田龍右衛門殿へ参、花舜軒御墓へ参詣、四ツ前出 殿、八ツ後退出、直ニ帰宅、七ツ時分ヨリ伊勢平右衛門殿・山名半之丞殿・田原直助殿・町田内膳殿・伊藤六郎右衛門殿へ一刻ツ、ニテ、夕帰宅、 母上様ニハ昼ヨリ前へ御出ニテ、夜五ツ過御帰、四ツ半臥候事、

十二日 曇、夕雨、

朝六ツ起、四ツ八ツ出勤、退出ヨリ加藤家ニ而門人之内江稽古饒別有之候ニ付参候様承り参り候テ差越、大鐘比帰宅、又馬ニテ島津権五郎殿へ参り、同伴ニテ上下浜辺乘廻シイタシ候、異船来候節張出為心得候、暮帰宅、夜八ツ時分臥候事、

御通達之写

御家老

若年寄

大目付

大番頭

御小姓与番頭

御趣法師
御側御用人

御側役

御軍役奉行

御軍賦役

郡奉行

右者は迄出勤、八ツ時御暇被定置候得共、方今不易時世内外多端之御処置御変革之折柄ニテ繁務之事候間、以来七ツ時御暇被相定候段被 仰出候条、此旨表方へ致通達、奥掛・御勝手方へ茂可相達候、

但、大番頭・御小姓与番頭・御軍役奉行・御軍賦役之儀、調練等之節ハ御届之上退出可致候、

二月

(島津入敷) 大蔵
(小松清康) 帯刀
(川上入道) 但馬
(川上入美) 式部

異国船前之浜江渡来之節、桜島并大門口・祇園洲遠見番所ヨリ相凶砲打揚候節、八ツ後出役之御役場左

之通、

大番頭

御小姓与番頭老人

御作事奉行式人

物奉行式人

御目付

右之内、月番老人ハ一先勤場へ罷出、其外定之場所

御裁許掛之間式人

へ出役、

郡奉行式人

御側御用人老人

右勤場へ可罷出候、

(忠義公史料「より補」)
右之通勤場へ可罷出候、

御台所頭

御用人式人

御春屋役

右御軍役掛老人并月番老人ハ勤場へ罷出、外掛之儀

右都而勤場へ可罷出候、

ハ定之場所へ出役、△

(旗方)
御徒目付式人

御側役老人

横目三人

御趣法掛老人

右 御殿へ罷出、勤場へ可控居候、

御納戸奉行老人

御用人老人

右之通勤場へ可罷出候、

御軍役奉行

定之場所へ出役、

御軍賦役之間老人

右之通被 仰付候条、其外之御役場不及出役、組中

右之通勤場へ罷出、其外定之場所江出役、

御船奉行老人

二至ル迄都テ致在宿、兼テ御手当被仰付置候面々ハ
勿論一統不致動揺、無用之奔走屹卜不相成候、尤、

右御殿へ可罷出候、

御手当向ニ付テハ兼テ申渡置候通堅可相守候、此旨

大番頭・御小姓与番頭へ申渡、向々へ不洩様急度可
申渡候、

二月十三日

帯刀

十三日 雨、

朝六ツ起、四ツ前出勤、今日者村橋左膳ヨリ御用致
承知罷出候処、五番御小姓与頭寄ニテ候処、北郷作
左衛門旅跡寄被仰付候、六番組二組替ニテ候、八ツ
半退出、直ニ帰宅、井上弥兵衛殿一刻被来候、夜四
ツ過臥候事、

母上様ニハ昼ヨリ前へ御出、今晚御泊り、

十四日 曇、

朝六ツ起、六ツ半戸柱町田家へ参候、五ツ過出 殿、
四ツ前ヨリ造士館出勤、東郷藤兵衛・小野郷右衛門・
川上八次郎演武館へモ参不時致見分候、与頭ヨリ外
ニ参候人数島津頼母・島津織之介・北郷数馬ニテ候、
八ツ前ヨリ出 殿、今日ヨリ昨日仰出通七ツ時御暇
ニテ、七ツ後帰宅、大鐘比ヨリ書役川上十郎殿入来、

緩々被相嘶四ツ時分被帰、無程臥候事、

十五日 曇、

朝六ツ起、六ツ半ヨリ平田五兵衛殿・右松十郎太殿
今日出立ニ付暇乞ニ参候、夫ヨリ島津権五郎殿へ参
候テ六番組支配下小組頭兩人ツ、招呼候テ達事、尤、
六番方限小番・新番之儀ハ大番頭寄島津壬生殿被来、
惣テ一緒ニ相達候、四ツ前出 殿、七ツ後退出ヨリ
直ニ平佐おつやさま江罷出候、外ニ権五郎殿・猪之
介殿・お広との親子三人・おたね参候テ四ツ時分帰、
無程臥候事、

十六日 陰、薄霜、

朝六ツ起、五ツ過税所七郎右衛門殿へ参候テ布屋作
候者之名前承候、佐藤伝右衛門ト申者之由候、居所
ハ下町広馬場ヲ参候へハ石灯炉通左手角ニテ候由、
則七ツ後來呉候様申遣候、四ツ前造士館へ出勤、演
武館和田・梅田・高田へ不時見分ニ参候、九ツ過マ
夕造士館へ参、八ツ後出 殿、七ツ後帰宅、七ツ半

時分佐藤来候、雨凌之數、差羽織ト立揚造候賦ニテ布屋作同様葉引方相頼候、地合ハ小倉袴地ニテ作候賦、夕ヨリ伊藤彦助殿入来、五ツ前被帰候、夫ヨリ火頭巾入紙袋造共イタシ、四ツ時分ヨリ

母上様御方へ罷出、暫御寝酒御相手申上、四ツ半時分臥候事、今朝平佐おつやさまへモ一刻参候、

十八日 晴、薄霜、

朝六ツ起、四ツ前出勤、七ツ過御暇直ニ帰宅、板藏脇石体直シ等下知、草取同断、

琉球書状案文認ニ階ニテイタシ居候処、夕お筆来候、大鐘比ヨリ来居候由候得共、拙者二者ニ階へ居候故不存候、暮ヨリ下ニテ打寄酒共給候、尤モ、是迄外物見へ長々召置候名越善左衛門妻今晚引移之筈候間、召呼酒取替シ候共イタシ候、善左衛門妻ハ弟名越祐右衛門所へ参候賦、四ツ時分お筆帰リ、無程臥候事、

御通達之写

地頭職又者御役替等被仰付候節、御軍役御手当拝見

之儀時々何来候得共、今般御軍制向御变革ニ付御手当帳向々へ被渡置候間、其通相心得以来何出ニ不及候、此旨向々へ可申渡事、

寺社奉行

御勘定奉行

御側御用人

御用人

御勝手方掛
御用人

右者是迄出勤、八ツ時御暇ニ被定置候得共、当时内外多端之御処置御变革之折柄ニテ繁勤之事候間、以来七時御暇被相定候、此旨申渡、向々へモ可致通達候、

但、右外諸御役場之儀モ前条同様繁務之事候得共、御用仕廻次第二八七ツ時ヨリ内ニテモ退出不苦候、

二月

(小松清康)
帯刀

十九日 晴、

朝六ツ起、四ツ前造士館へ出勤、梅田演武館へ見分

ニ参候、大脇へモ同断、海老原へモ参ル賦候処、二之丸

御子様方御兄弟為

御覽被為 入候ニ付不参候、八ツ後ヨリ二之丸へ罷出、御側役へ取次上書奉差上候処、控居候様承知ニテ相控居候処、

御前へ被召出、

御直ニ難有承知之趣トモ有之、誠ニ存外之事ニテ奉

恐入候、七ツ時出

殿、七ツ過御暇帰宅、直ニ山名氏へヒストン筒鉄炮

拵方催促ニ参候、直ニ帰宅、鉄炮玉作ニテ四ツ時分

迄之間口切迄二百計相濟、御軍役御手当用ニ候、四

ツ過ヨリ

母上様御方へ罷出御寝酒御相手申上、無程臥候事、

二十日 曇、夜雨、

朝六ツ時起、四ツ前戸柱町田家へ参候、今日者

(久光)
三郎様

御首途、

御名代小松帯刀殿へ被仰付、御清ニテ拙者未服中故

御代参濟、四ツ過ヨリ川上右膳殿ニモ同断服中ニテ

同道出 殿イタシ度参候得者些内用之儀有之、殊ニ

演武館の方へ御用有之候間、彼方ヨリ遅ク相成候ハ、

出勤不仕候段モ月番迄申出置呉候様承出 殿、然処

今日ハ伊集院亘・島津仲・川上源十郎・川上右膳・

島津求馬・町田民部・島津良馬ハツ後

御前へ可被召出旨御小納戸申来、亘・仲・民部ニハ

病氣ニテ其御届申出、求馬ニハ桜島調練、源十郎・

右膳ニハ演武館へ相勤居候ニ付早々申遣、良馬ニハ

御清ニテ服中故御座相頼是以早々申遣、三人各ハツ

前出 殿、八ツ半時分御側の方へ被相廻、七ツ半時

分詰座へ被相下、段々

御直

御意之趣有之候由ニテ承知、与頭中銘々不差置 御

変革之上書仕筈候、出勤無之同席中へハ銘々手分ニ

テ差越申入候筈ニテ、拙者ニハ北郷数馬殿へ参候、

直ニ帰宅、則ヨリ上書下書共相認、九ツ半臥候事、

一今日ハ島津主殿殿ニモ首途祝ニテ参候様承候得共、

おたね并主税遣候、四ツ半時分帰候、

右同

御一門方并鳥津図書殿・鳥津又六郎一列、大番頭以

右同

下月次御礼罷出候面々、奥・表・御勝手方諸御役人

二男

御用之儀有之候間、明廿一日被罷出候様向々へ可致

一何御役

何野何某

通達事、

右同

但、嫡子ヨリ末子迄、八歳以上可被書出候、

年号月日

右之通相違無御座候、此段申上候、以上、

明細帳

何野何某用頼

何野何某用頼

月日

何野何某

何野何某

右之通各被得其意、御用見合相成候間、別冊案文

一持高何程

之通来ル廿五日程当座江可被申出候、此書付刻付

一御役料高何程

ヲ以致通達、留ヨリ但馬方へ返納可有之候、以上、

一何御役

二月廿日

申刻

何野何某

大身分触役所

当何歳

江戸詰其外旅行等之訳

二十一日 晴、

一居屋敷何方

朝六ツ起、今日ハ

嫡子

(音形女) 暁姫様・

一何御役

何野何某

(音形女) 寧姫様御着後初テ五社御参詣、御清ニテ九ツ時出勤、

七ツ後退出ヨリ町田民部殿へ参、夜九ツ過帰宅之事、

二十二日 細雨、

暁大鐘起、上書之清書、六ツ半ヨリ御用談ニ付伊集院巨殿へ参、四ツ前権五郎殿へ一刻立寄、造士館へ出勤、四ツ過ヨリ出 殿、七ツ過退出、島津権五郎殿同道ニテ又伊集院巨殿へ為御用談参、大鐘過帰掛内膳殿へ一刻立寄帰宅、権五郎とのニハ川上龍衛殿へ一刻被立寄候テ被来、夜九ツ半被帰候、

二十三日 雨、

暁大鐘起、五ツ時島津権五郎宅ニテ御筆 仰出弘、

四ツ過相済出勤、大鐘比帰宅、今日者

母上様其外家中屋敷へ参候由、主税卜拙者兩人、

戸十郎ニモ居候、暮過御帰リ、四ツ過臥候事、

一大番頭・御小姓与番頭打込被仰付候、進達掛多人数

相成居候処、今日西郷宗次郎御目付被 仰付、其外

岩下新太夫・川上九戸・堀源右衛門・武仁之介・平

島平八・大脇矢五右衛門・徳永周左衛門・基太村方

之介・曾木権之介・林権一郎・日高次左衛門・上原八郎・今井十郎・岩切彦兵衛、都合拾四人ハ御役人并申御役格被召立、御祝儀事等之節迄御番所へ罷出候様被仰付候、日勤ニ不及候、進達掛残り人数、川上班之進・川上弥八郎・新納十郎・川村与十郎・福崎壮九郎・園田与藤次・伊藤七郎左衛門・四本喜兵衛・弟子丸矢一郎・大迫助八・村橋壮之丞・肝付新太夫・阿多勘五左衛門、

一今朝権五郎宅ニテ異船来着之節不致動揺様御請書之儀相達シ、小与頭名前、

山鹿弥助 大庭七郎右衛門

飯牟礼吉兵衛 郡山直助

朮岡伊之介 新納新兵衛

津留六郎左衛門

先日銘々御請書為致候得共、御請書之書面不宜候向モ有之ニ付、此節ハ銘々ニハ不及、銘々御定通相心得居候段無相違承、届サへ候得者、其段小与頭ヨリ一紙ニテ差出候テ宜段申達候、案文左之通相渡、

異国船前之浜へ渡来之節、相凶打揚等拳候ハ致在

宿居、相図之御太鼓鳴候上兼テ御定之場へ罷出候

様被 仰渡置、此節尚又被仰渡趣奉畏候、為後日

御受書如此御座候、以上、

右者忝人前之御受書ニ候間、此趣意ニテ取束、小与

頭ヨリ一紙ニシテ差出候テ宜段申達置候、

名越左源太様

町田為兵衛様

讚良権兵衛様

市来勘助様

大野五左衛門様

上村藤之丞様

右者明廿五日於二丸流儀御呼出有之筈候間、当日五

ツ時御出席被下度、尤、御出席之間無明早朝為御知

可被下候、以上、

二月廿四日

梅田九左衛門

二十四日 晴、

暁大鐘起、立木ヲ打、夫ヨリ御用書付等イタシ、川

上右膳殿へ一刻立寄り、四ツ時出勤、七ツ過退出、

直ニ帰宅候得者、明日五ツ時二之丸御稽古所へ梅田

家中極意以上之人數ニテ御呼出有之段、梅田家へ吹

聴来候間、暫稽古モイタサス候ニ付前内稽古へ出候、

暮帰宅、七ツ過川上源十郎殿ニモ一刻入来候、夜四

ツ半時分鐘又扱ヒ、無程臥候事、今日ハ

母上様ニモ七ツ過

(實久)大中様御參詣、夫ヨリ佐志へ御出ニテ四ツ時分御帰

候事、

廿一日御筆仰出

御

口達之覺

国政変革永世不朽之治体相居候義、実以不容易訳者

勿論、方今内外危急之世態ニ臨ミ候テハ、殊ニ至難

之場合ト存候、依之

(久光)三郎様御帰国涯被

仰出候通為

天朝国家深被遊

御配慮、富国強兵・海防守禦之術ヲ初士風一新・文
武磨勵之道ニ至リ、昼夜被為碎肝胆精々

御世話被為 在、我等ニヲヒテモ重疊及心痛候得共、

今日ニ至リ其詮モ不相見得、既ニ

御発駕モ近寄候得者必至ト当惑、飯食モ咽ニ下ラサ

ル仕合ニ候、事之行ルト不行ハ畢竟我等之不肖無申

迄候得共、各要枢之重任其實ヲ免ル可カラス候得共、

猶又為国家断然尽死力異度、兎角数十年来之弊風動

モスレハ因循苟且ニ墮リ候故、時世ニ後レ候義而已

有之候間、能々時務之然ル所以ヲ觀察シ、常例古格

ニ泥候腐腸ヲ一洗シ、非常之節ニ応スル之活法ヲ用

ヒ大变革之基本判然相立候様有之度、当時ハ

大樹家ヲ初各国变革被相行、旁不可失機會ニ候、幾

重ニモ時世切迫、尋常之処置ニテ中々六ヶ敷訊ヲ相

弁シ、

三郎様御留主中之義ハ勿論、右之趣意国内ニ拡充大

業成就之処、各職掌ニ付存寄之趣不差置可申聞候事、

以

勅命攘夷之儀被

仰出、於幕府御請相成、猶策略寬急之次第ハ

大樹公御上洛御決議之上

叡慮可被奉伺ト之御事ニ候処、

三郎様御儀、追々從

天朝幕府御用召之被為蒙

内命被遊御上京候、就テハ屹度御建議之御趣意モ被

為在候間、何レ御上京之上大謀

御決定可被為

在候、依テハ万一御留主中前之浜へ夷船致到来候節

ハ、兼テ申付置候法令堅固ニ相守、人々不致動揺候

儀肝要之事ニ候、攘夷之

勅命相下リ候ヲ心得違、若モ暴卒挙動有之候テハ第

一手元之号令不行届場ニ相当リ、且

皇国治乱ニ相係リ候大事之將決セントスル之時機ニ

臨ミ、無名之事ヲ醸シ候テハ実ニ奉対朝廷無申訳事

ニ而、

家老中江

朝議決定

勅諭相下り候上ハ策略寛急ニ応シ、如何様共以全国
遵奉イタシ、自ラ攻守之命令可相加候条、一同不勤
弁之儀ハ無之筈候得共、

(久光)
三郎様御留主中相成候得者一入令配慮候間、克々輕
重ヲ慮リ右之旨聊取違無之様諸士末々迄モ可申聞事、

御家老衆御添書

一昨十九日我々并若年寄・大目付・大番頭・御小姓与
番頭・御側御用人・御側役・御軍役奉行御休息所へ
被

召出、非常之時世御变革御一条等細々御沙汰之上、
猶又御別紙之通

御筆ヲ以被

仰出、実ニ臣子之罪故不一方

御配慮之程奉恐入候、依之方今之時世(等不力)篤ト致勘弁、

各職掌ヲ尽シ必死ニ差ハマリ、

此涯成功相立候様無之候テハ屹ト不相成候、且又前
之浜へ異船渡来之節之儀ニ付テハ

御筆ヲ以被

仰出候通至大至重之時機ニ候間、屹ト御趣意相守可
奉安

尊慮候、

右之通支配中・組中へ可被申渡候、

二月廿一日

(島津久敏)

大藏

(小松清廉)

帶刀

(川上久運)

但馬

(川上久美)

式部

二十五日 雨、

曉大鐘過起、六ツ半ヨリ梅田家へ參、壬生殿同道ニ
テニ之丸へ罷出稽古イタシ候、白尾流儀モ同断御呼
出ニテ兩流互ニ拝見被仰付候、八ツ過ヨリ又出 殿、
大鐘時分退出、直ニ帰宅、四五年市来ヨリ相勤居候
女なか、此節暇呉親迎ニ来居候ニ付、夕ヨリ招呼酒
共為吞候、四ツ時分臥候事、

二十六日 晴、夜雨、

朝六ツ前起、六ツ半ヨリ六番御先手不時調練ニテ砂

揚場へ出張、八ツ前島津権五郎殿玄喚ニテ支度替イ
タシ、直ニ出

宅、無程臥候事、

殿、七ツ過ヨリ太鼓打拭トシテマタ砂揚場へ同席中

今日地頭繰替人数

參候テ、暮帰宅候得者暮過川上十郎太殿入来、五ツ

加世田

伊集院

半被帰候、四番組御旗本備島津主計殿物主ニテ訓練

小松帶刀殿

川田將監殿

有之、御軍賦役貫島新左衛門・坂本簾四郎出役有之

顛娃

指宿

候、

菱刈空之介殿

町田内膳

小根占

伊集院平治未部屋住

二十七日 快晴、

朝六ツ起、四ツ前出 殿、大鐘時分退出、直ニ又御

用ニ付テ川上右膳殿・加藤権兵衛殿・北郷数馬殿へ

指宿

町田内膳

參、暮帰宅、今日者加藤家三段目以上御呼出ニテ罷

出候様承候得共、御用透無之相断候、今日者お藤来

居、夜五ツ時分帰候、四ツ時分臥候事、

二十八日 夕雨、五更大雨雷鳴、

朝六ツ起、川上右膳殿・町田内膳殿へ參候、五ツ過

帰宅、四ツ前出 殿、大鐘前帰宅、直ニ内膳殿へ今

日指宿へ地頭繰替被 仰付候祝ニ參候、四ツ時分帰

仰付候、

二月

帶刀

行届候様可心掛旨被

右当御役ニテ右之通地頭繰替被
仰付候、就テハ海岸之要地ニテ上下致一定、防禦筋
等敵重無之候テハ不相濟場所柄付、混与居地頭ニ而
一郷中差引者勿論、士風振起海岸手当向等之儀每事

物頭

右者往古之通御兵具奉行御役名被復候段被 仰出候

条、此旨申渡向々へ可致通達候、
(可脱也)

二月

(川上入連)
但馬

都テ被成御免候、

右之通被仰付候条、此旨表方へ致通達、奥掛・御

勝手方へモ可相達候、

二月

但馬

御兵具奉行席、右之通新規御役場被召立、御役順之

儀ハ御兵具奉行末席ニテ、御兵具所へ致日勤候様被

仰付候段被 仰出候条、此旨向々へ可致通達候、

二月

但馬

調練ニ付諸手当

一 什長并諸役者へ達之事

銃業方

一 銃業問合之事

集成館

一 雷帽子問合之事

集成館

一 大砲手当之事

御兵具所

一 貝・太鼓之事

御兵具所

一 旗之事

御兵具所

一 幕之事

鳥津(久造) 函書殿

右者西目海岸防禦惣頭取且御当地調練場請持被 仰

付置候得共、今般御軍備御改正ニテ夫々物主等モ被

仰付候ニ付、都テ被成御免候、

鳥津元丸

右者未幼年ニハ候得共、東目海岸防禦惣頭取且御当

地調練場請持被仰付、成長迄之間一族之内ヨリ陣代

相勤諸事致差引候様被仰付置候得共、前条同様ニ付

御兵具所

一昇持足輕之事

町奉行所

一町夫之事

御作事方

一鉄砲掛之事

御厩

一談合役馬之事

御春屋

一押巻之事

一御賄被下候節者御軍役方へ引合、御春屋手当可承届事、

御切米・御扶持米被下置候師家

示現流

一御切米百五拾俵

東郷藤兵衛

日置流

一右同七拾五俵

東郷左太夫

鎌倉流

一御扶持米百俵

鏡智流

川上十郎左衛門

一右同三拾五俵

梅田九左衛門

一右同三拾五俵

白尾（大島流脱力）金左衛門

一右同三拾五俵

稻留流

一右同三拾五俵

種子島次郎右衛門

一右同三拾五俵

稻留流

一右同三拾五俵

郷原軒

一右同三拾五俵

日置流

一右同三拾五俵

平田平六

一御扶持米貳拾五俵

大坪流

一御扶持米貳拾五俵

町田佐七郎

一右同貳十俵

水之流

一右同貳十俵

東次郎左衛門

一右同貳十俵

木上矢太郎

一右同貳十俵

関口流

一右同貳十俵

海老原庄藏

田中太郎左衛門

一右同式十俵

加藤權兵衛

一右同三拾五俵

和田乗助

一右同式十俵

日置流

伊集院半五右衛門

飛太刀流

一右同式拾俵

小野強右衛門

一右同三拾五俵

日置流

高田猛八郎

大刀流

一右同式拾俵

大山後角右衛門

一右同式十俵

水之流

篠崎七郎左衛門

飛太刀流

一御扶持米式拾俵

大脇孫右衛門

一右同式十俵

神人流

田代宗次郎

二十九日 雨、

一右同式十俵

水之流

有川五左衛門

暁六ツ前起、六ツ半ヨリ島津主殿殿へ参候、夫ヨリ

一右同式十俵

甲州流

田中清右衛門

造士館へ出、四ツ過ヨリ出 殿、七ツ過御暇、直ニ

一御切米五拾俵

高麗流

成田正右衛門

日之間指宿へ被差越、拙者ニハ無抛用事有之、一刻

一御扶持米七拾五俵

示現流

高橋甚五兵衛

ニテ帰ル、帰掛田原直助殿へ参、同道ニテ拙宅へ帰、

一右同式十俵

稻留流

伊集院嘉盛

晦日 晴、

直助殿暮被帰候、暮ニ又鉄炮師種子島之者来、ヒス

トン筒ニ挺急キニテ拵方相頼候、暮過ヨリ島津權五

郎殿へ参候テ、夜九ツ半帰候、八ツ過臥候事、

朝六ツ起、五ツ過鳥津權五郎殿入来、四ツ前出勤、

大鐘前退出、直ニ帰宅、書見写本等ニテ夜八ツ時臥

候事、

堀四郎左衛門殿・鳥津左膳殿被出候、

二日 間々小雨、

朝六ツ起、五ツ半町田鷺之介殿入来候、同刻ニ之丸

へ建白持参、四ツ前出勤、七ツ過退出、直ニ帰宅、

夜九ツ過臥候事、

日史第二十一

名越時敏 (花押)

文久三年癸亥三月中

朔日 雨烈風、

勸農之儀者

御先代様ヨリ分テ

朝六ツ起、四ツ時造士館へ出勤、四ツ打切隔日之講

釈、教授山田十介殿季子第十六ライタサレ候、四ツ

過ヨリ出

殿、七ツ過退出、直ニ帰宅、琉球書状案文認、五ツ

半時分ヨリ 母上様拙者方御出ニテ御寝酒差上候、

四ツ御引入無程臥候事、

一 昨日ヨリ御用人造士館へ非番御用不差支面々ハ罷

出候様被仰出、一昨日始テ市来次十郎殿・北条織衛

殿召出候、昨日者福崎助八殿・川上正十郎殿、今日

者伊集院静馬殿・村橋左膳殿被出候、今日ハ当番頭

御沙汰被為 在、百姓御救助筋之儀、先年来品々御

手厚御取扱被 仰付候得共、重斂課役等積年之疲勞

ニ追レ何分詮立候涯不相見得、既ニ諸郷下代蔵役人

付属蔵之悪弊ヲモ被相改憲法之御仕向ニテ、去秋ヨ

リ三ヶ年御拭^(試カ)被仰付、現事之取扱ニ依リ追々御治定

可被居置旨被仰渡置候処、段々故障之簾有之、且又

諸郷差入之御奉公人数多之人数ニ相及、送人馬・水

夫ハ勿論、野菜・油・薪類入付之費用年分ニハ多分

之出錢ニ相及、其外百姓痛ニ相成候儀共、此節別段

之御吟味ヲ以テ左之通被仰付候、

一 御年貢取納方ニ付テハ御藏付數十ヶ村一緒ニ相成、込合候ニ付日々持込候丈取納相濟候儀ハ無之、無廻

数日及滞在飯料諸雜用モ入嵩候上、隙ヲ費シ百姓第一迷惑之事情ニ付、当秋ヨリ村取納被仰付候条、庄

屋役所又者便宜場所へ仮藏相調置、郡奉行・地方
檢者引受、庄屋方ニテ仮ニ致取納置、都合ヲ以不込
合様御藏本へ付届、惣俵掛占圖当計例ヲ以取納被仰
付候、就テハ掛役々者勿論百姓共ニハ五人ツ、組合
ヲ以繩俵米拵、枿目・斤目不同無之嚴重取扱行届候
様、左候テ、納人亦者取扱之所役々名前相記差札入
置、尤、所役々ヲ始、組中迄モ御請書差出候様申付
候、右ニ付万一不正之手数相企候者モ候ハ、当人者
不及申、組合之者迄モ重キ御取扱被仰付、所役々迄
モ屹卜可及沙汰候、且取納振津廻又者勘定向等之儀
者御勘定奉行・高奉行・郡奉行・御代官ヨリ致吟味
可申出候、

一 御定納外上納米式升四合之儀、当秋ヨリ壹升相減、
壹升四合宛、先升ニテ別段取納被仰付候、就テハ諸
座書役等へ被成下候御心付向之御金筋可及不足候間、

琉球出米代砂糖七拾五万斤御余勢銀御内用金へ差向、
右ヲ差足可被成下候、

一 下代藏役人之儀、人柄吟味之上申付事ニハ候得共、

多人數之事ニテ是迄致付屬等相勤候者モ相交リ、旧
習直リ兼候事情茂有之、第一士風ニモ相拘、当秋ヨ
リ村取納被仰付候付テハ、別段之御吟味ヲ以テ其郷
内又者近郷役々・無役郷士ヨリ人柄細々取しらへ之
上下代藏役人申付、取納之次第ハ前条之通郡奉行所
役々引受諸下知イタシ、津廻掛渡等締方横目見分ヲ
請、所役々出会等之儀当分通、猶又一涯嚴重取扱イ
タシ勘定相遂候様申付候、左候テ、御扶持米三石六
斗宛被成下、苦勞銀員數之儀ハ追テ可申渡候、

一 真幸表之儀、近年取分差勞 御高格護モ調兼候者モ
不少哉ニテ、右者第一御藏本遠方、殊ニ坂道等ニテ
致難渋候処ヨリ、先年御吟味ヲ以栗野中取藏被召建
候処、取納方之分ハ埒明難有詛ニハ候得共、翌春藏
本迄津下等之儀モ有之、格別御取扱之詮モ無之難最
通、當時ハ先年通加治水へ負下致取納、連年疲勞弥
増候ニ付別段之御吟味ヲ以真幸之内へ本藏新規被召

建、村々取納米右本蔵へ致取納候迄ニテ、御前

之分ハ是迄之通御蔵付郷ヨリ加治木迄致津下候様被

仰付候、右ニ付テハ取納米津下之道無之、御用米難

被振向候ニ付御当地三町酒屋中江申請被仰付、於真

幸表酒造イタシ御当地へ差廻、当分之通致商売候様、

尤、御蔵米ニテハ是迄造入高ヨリ及不足候分ハ、郷々

百姓余米持合之者共ヨリ相對買入ヲ以造入候様申付

候条、於

御府内者一切酒造等不相成候、

一 地方櫛方檢者人数減少ニテ、兩役兼帶等申付候儀ハ

別段申渡通ニ候、

一 山方下目付之儀以來引取被仰付、拔木取締等之儀ハ

津口番所詰見聞役廻勤山見廻等ヨリ猶又取締行届候

様申付候、

一 諸所移地頭并地頭代抑之儀、此節御改正之御軍役調

練差引、或ハ拔米・拔馬其外諸取締被仰付候、

一 福山御牧之儀、數ヶ郷ニ相掛御普請向繁多ニテ、百

姓共公役相掛請負人共へ相頼過分之及出銀候由候ニ

付、別段之御吟味ヲ以此涯御引取被仰付、左候テ、

牧馬八百疋程モ及生育居候由候間、真幸・肝付方限

等勞郷牛馬不持合窮民共江下料ニテ申請被仰付候、

左候テ、地面之儀當御時節大調練被仰付候儀モ可有

之候得共、畠作望之者モ候ハ、郡奉行承り届差免、

其届申出候様被仰付候、

右者百姓御救助筋者勿論、一統融通之為當時柄御失

費相拘り候儀ヲモ無御構右之通御改革被仰付候条、

其旨厚汲受、夫々請持之御役場一涯相勵、取扱之儀

精微ニ尽吟味得差凶、聊等閑之儀無之様可致精勤候、

此旨支配中江申渡、奥掛・表方へモ可相達候、

二月

(小松清康)
帶刀

(川上久美)
式部

異国船御手当之次第

一 山川辺へ四艘以上之異船相見得、内海之様可乘入模

様モ候ハ、兼テ郷々小高キ所へ遠見番所・烽火台

等取建置、且大炮五発位ヲ打、直ニ烽火可相立候、

但、烽火台等取建候場所ハ山川・指宿・今和泉・

喜入・谷山・垂水・新城、

一右二付前之浜へ四艘以上之異船相見得候ハ、直二諸

手当可有之、又者卷式艘ニテモ碇船応接之上手切之模様候ハ、掛御家老ヨリ御軍役奉行・御軍賦役へ差

図次第早鐘忝度ニ二ツ、続ケ打、一呼吸ヲ置二ツ、

此相図ニテ御作事方并上下西田町三ヶ所之太鼓相鳴

シ、其外吉野・草牟田・郡元等ハ（兼力）宿寄之寺鐘打鳴シ、

又者御馬乗等ニテ庄屋所抔へ相図ヲ告ケ候次第モ可有之、

一右通相図相鳴シ候節ハ御先手人数一番・二番組弁天

波戸、三番組大門口台場、四番組調練場、五番組新

波戸場、六番組祇園之洲台場へ早々馳付、御差図可

相待候、

一御旗本人数ハ御本丸ヨリ護摩所辺へ罷出、右同断、

一三郎様御旗本人数ハ二之丸下ヨリ造士館・南泉院辺（久光）

へ、右同断、

但、当分御手当被仰付置候御城下守衛人数、本行

之場ニ被振向候、

一御城下守衛六組

右演武館内又者御台所御門内辺へ、右同断、

右依時宜

御姫様方為御警衛被召付賦二候、

一両御旗本人数之儀、

御一方様

御留主之節速モ右集場へ罷出御差図可相待候、

一右外之人数拾五歳ヨリ五拾八歳迄之間、各御先手与

頭備之次ニ相集リ、右同断、

一諸郷・私領之儀モ内外共海岸有之候分ハ地形遠近・

險易・兵卒之衆寡ニ從テ互ニ可致救応事、

一右之通夫々集場へ早々馳付、大小砲其外要具相揃戦

争之致用意、弥手切レニ及征討之時機候ハ、御家

老ヨリ御軍役奉行・御軍賦役へ差図次第鐘樓之太鼓

三ツ、続ケ打、是又一呼吸ヲ置可打鳴候間、是ヲ手

切之相図ト可相心得候、

以上、

右へ相添別紙

異国船渡来之節諸向手当心得之儀、去ル申年中渡置

候得共、猶又此節別冊之通被仰付候条、早鐘等之相

図打鳴シ候節ハ早速諸士之面々各請持之場ニ相集、

御小姓与番頭へ届可申出候、左候テ、万一心得違相

図無之内馳出候歟、又ハ兼テ御定之場所へ到着不致、

一己之了簡ヲ以於他所何様之功勞有之候共可為曲事

段、組中之面々へ平日御小姓与番頭・仕長等ヨリ嚴

令可有之候、此旨大番頭・御小姓与番頭へ可申渡候、

但、依勤場急變之節迎モ出役不相調向者其訳早々

御軍賦役へ可申出候、

文久三癸亥二月

（川上久運）
但馬

大目付以上出勤之儀、是迄乗物相用候様被仰付置候
得共、方今之時勢可成易簡ニテ可相濟被

思召候ニ付、以来乗物并馬上勝手次第被仰付候、此

旨可承向へ可申渡候、

二月

但馬

調練ニ付諸手当申渡、処々問合等左之通、

一 仕長并二諸役者へ達之事、

諸役者

一 昇預忝人 一 談合役忝人

一 醫師忝人 一 貝役忝人

一 太鼓役忝人

四 役場

一 玉薬方忝人

四 四

一 兵粮方忝人 一 普請方忝人

四

一人馬方忝人

一 玉薬方足輕忝人

一 兵粮方足輕忝人

一 普請方足輕忝人

一人馬方足輕忝人

右四役場主取夫忝人宛三町ヨリ出、

但、水汲・薪取其外諸用ハ物主以下

從卒并仕長相中夫等惣人体ヨリ繰廻

ヲ以兵粮方其外へ可召仕事、

（三五四頁文書に同じ、本文略）

三日 快晴、

朝六ツ起、美代藤兵衛入来、五ツ半重富屋敷河俣仲
太夫殿へ一刻ツ、参り候、四ツ前出勤、先日調練之
節之儀ニ付

御目通之儀相伺置候処、遠慮ニ不及段承知ニ付今日
ハ敷舞台

御目見罷出候、八ツ時退出、直ニ帰宅、七ツ過内記
様へ一刻参候テ、夫ヨリ島津主殿殿明日

(久光)
三郎様御供ニテ出立ニ付祝ニ参り候、夜五ツ過帰宅、
四ツ時分臥候事、

内膳御用有之候処

一 菱刈奎之介殿名代ニテ承知ニテ御書付大目付座書役
石神氏ヨリ相受取候テ、大山新兵衛へ遣候御書付之
写左之通、

右者一陣惣物主ニテ

御出馬之節者被召列、串木野一組之人數可被召付旨
被

町田内膳(久慈)

仰付置候得共、指宿居地頭被仰付候ニ付被成御免候、

三月 (川上久運)
但馬

御通達之写

此節

三郎様御上京ニ付阿久根ヨリ可被遊

御乗船旨被

仰出置候得共、天氣次第ニハ前之浜ヨリ可被遊

御乗船旨被

仰出候、

但、風波等強難被為整

御乗船之節ハ御宿割通御通行ニテ阿久根ヨリ被遊

御乗船候、

右可申渡候、

三月

(小松清康)
帯刀

四日 雨、

朝六ツ起、五ツ過出 殿、今日者

三郎様

二之丸ヨリ

御立ニ付 御門脇へ罷出候、四ツ打切

御立、蒸氣船へ御乗付、九ツ半時分

御出船、東目

御廻船ニテ今夜

内之浦湊へ 御滞船之哉ニテ承事候、七ツ過退出、

直ニ帰宅、山川ヨリ今朝嘉美行帰来候ニ付今晚緩々

相咄候、四ツ過臥候事、

母上様御事、今日者前へ為御台開御出之処、今夜ハ

御泊之段申来候事、

公義御通達之写

此度御軍役兵賦、兼テ差出候様被 仰出候上ハ銘々

収納高之内ヨリ差出事ニ付、家作ヲ始日用之諸雜費

相減、惣テ自己之奢侈致間敷事、

一家来共平常間ニ合候程ニ相減、下女・小者等猶更余

計ニ差置申間敷、御役相勤候者モ仕来不拘掛リ役々

人数減省致シ可申、右ニ付テハ諸事格別易簡ニ申合

候様可致事、

一 冠婚喪祭ハ人事之大礼ニ候得共、惣テ実意ヲ主トシ

万事手輕ニ虚飾無益之費致間敷事、

一 御役付同役并組支配之者等寄合候節、時刻ニ相成候

ハ、手輕之湯漬差出候儀ハ格別、酒肴差出候儀ハ勿

論、譬有合タリトモ聊馳走ケ間敷儀是迄之仕来ニ不

拘急度相止可申事、

一 転役被 仰付候節、同役伝達之者家来共迄之贈物、

前々之仕来ニ不拘一切相止可申、且吉凶・年始ニ不

拘一切相止可申、且吉凶・年始・暑寒近親ハ格別、

其他ハ贈物以來相止可申事、

一 親規御役被 仰付候節、取持之坊主其外ハ祝儀差遣

シ候儀、是迄之半減ト可被心得候事、

一 御役ニ付二季付届贈物、惣テ是迄之半減(通脱カ)タルヘク事、

一 養子并婦之土産金、是迄度々

御沙汰有之候得共、以來堅ク不相成、右等受候者モ

贈リ候者於有之ハ屹ト 御沙汰之品モ可有之事、

一 妻女衣服之儀ハ夫々分限ニ応シ候儀ニハ候得共、兎

角奢侈ニ流レ以外之儀ニ付、以來規式之節縫模様

着用ニ不及、龜末之品相用、平日之着類等ハ猶更質

素之品着用可為致事、

但、万石以上之面々へモ万石以下相觸候段為心得
可被達候、

大目付江

田安大納言殿御事、御後見中御政事向御不都合之事
(慶應)
共有之、被对 京都深ク被恐入候ニ付、御官位一等
御辞退且御隠居御願之趣、都テ無御拋被 思召候ニ
付京都モ被仰進、今度御願之通り御官位一等御辞退
之段被遊 御伺届、御隠居之儀茂御願之通り被 仰
出、只今迄被遣候拾万石徳川万千代殿江被遣候旨被
仰出候、此段為心得向々々可被達候、

正月

五日 曇、

朝六ツ前起、四ツ前出勤、七ツ過退出ヨリ権五郎殿・
兵十郎殿同道ニ付、御用談ニ付伊集院巨殿へ参候、
帰掛町田内膳殿へ一刻参候、大鐘過帰リ、飯共給候
得者無程夜入九ツ過迄御軍役御手当帳共拝見イタシ、

母上様御方へ罷出、直ニ臥候事、

(重豪力)
齊豪公御筆仰出

支配下之儀ハ頭役タルモノ受持之事故何角致差引、
且シラへ事等之節モ本ヨリ頭役手前ハ旨趣治定之上
支配之下役へ吟味申渡、其内ニテ事理明細ニ相聞得、
シラへ之筋ニモ相当イタシ候上又々頭役同席中可遂
吟味詮モ不立、以来オロソカニ成立候基ニ候、勿
論訴訟事等付テ頭役ヲ差越、内意等申出候儀是以不
可然候、為其夫々立置候役目之事候間、筋々ヨリ申
出段々役々吟味ヲ経候処ニ委可相届事ニ候、尤、答
目重儀ハ格別、支配頭前ニテ判断可相濟程之儀ハ随
分可取計候、右次第二付テハイツレ役々ヲ用候ニ專
其人々事業才職撰ミ、職ニ可叶者ヲ用候処可為肝要
候、左候ハ、頭役モ夫々持量有之、(持量カ)当職モ銘々手前
ニ而可弁程知識有之候得者下役モ自然ト致心服、品
ヲコへ訴訟イタシ或者不輕儀共無之、自頭役之詮モ
可相立事候、畢竟頭役人ニヨリ候テハ下役之蔭ニテ
勤居候者有之候処ヨリ右式之儀モ致到来事候条、役々

ヲ用候処一往二往モ遂吟味、可叶職者ヲ可揚用候、

明和九辰七月

家老中江

毎月二日・十三日・廿四日

右者二丸調練日ニ付大番頭・御小姓与番頭之儀モ

両人ツ、致出席、差支無之節ハ三四人モ四ツ時ヨ

リ致出席候様大久保市藏ヨリ致承知候間、此段致

通達候、以上、

三月六日

川上右膳

六日 間々細雨、

暁大鐘過起、六ツ半ヨリ島津権五郎殿へ参、今日御

手当交代相達候、権五郎殿ニハ六番組御先手被相達、

拙者ニハ六番組御旗本相達候、夫ヨリ出 殿、九ツ

過御暇、八ツ半ヨリ伊集院亘殿へ参候、九ツ時ニハ

六番組

^(久光)三郎様御旗本亘被相達候、七ツ後亘殿宅ニテ六番組

城下守衛物主島津兵十郎殿ヨリ御城下守衛人数被申

渡候、是迄之御城守衛ハ

三郎様 御旗本ニ被振向、別段御城下守衛被仰付候、

大鐘過内膳殿へ一刻立寄、帰宅候得者高橋半兵衛殿・

基太村助左衛門殿被帰、夜五ツ時分被帰候、夜四ツ

過臥候事、

七日 間々細雨、

朝六ツ起、四ツ前ヨリ造士館へ相勤、八ツ後ヨリ出

殿、七ツ過帰宅、今朝中村吉左衛門殿、夕基太村助

左衛門殿入来候、暮過ヨリ島津権五郎殿へ参、夜九

ツ時帰宅、無程臥候事、

八日 雨、

朝六ツ前起、四ツ前出 殿、四ツ時ヨリ造士館へ相

勤、八ツ後ヨリ出 殿、七ツ後帰宅、今朝基太村助

左衛門殿入来候、夜九ツ過臥候事、

御通達之写

一御花園御門ヨリ西江四拾三間

一南泉院表門下ヨリ大手橋土手筋八拾八間

一山奉行所下角ヨリ右土手筋へ拾四間

右者

御殿内御手狭二付、

右之通

御丸内御用地相成候条、此旨向々へ可致通達候、

三月

(川上久美)
式部

九日 雨、

朝六ツ起、四ツ前出 殿、七ツ過帰宅、七ツ半時分

田舎馬引來候ニ付式疋乗方致見分候、夜四ツ過臥候

事、

十日 晴、昼ヨリ曇、夜入雨、

朝六ツ前起、六ツ半ヨリ調練場へ參り御先手調練有

之候、九ツ前相濟候得共、今日者御座相頼置候ニ付

直ニ帰宅イタシ居候得者八ツ時御用封來、明後十二

日六組惣人数調練 御視有之段致承知候付、早々出

勤イタシ候様申付、直ニ致出勤、大鐘過帰宅、仕長

其外諸役者宅へ只今御用申渡置候処、大鐘過ヨリ追々

被來、明後十二日調練之儀委細申渡、仕長之分ハ先

日ヨリ緩々相晰度致約束置、殊ニ明後日御視モ有之

候ニ付テハ何歎ト談合モイタシ置度候間、夫々伍長

へ細々達シ、相濟候ハ、又々被來候様相達、六ツ過

ヨリ西田矢兵衛殿・基太村助左衛門殿・長束十郎殿・

中村吉左衛門殿・阿多源左衛門殿・相良正之介殿被

來、各九ツ過被帰候、無程臥候事、

十一日 雨、

朝六ツ前起、五ツ半出 殿、七ツ過退出掛

御旗本物主中島津仲殿・島津良馬殿・喜入多門殿・

相良治部殿打寄吟味トモイタシ、大鐘帰宅、五ツ過

臥候事、

十二日 雨、四ツ過ヨリ晴、

夜前九ツ前八ツ時ヨリ砂揚場調練場へ出候、未拙者

組彦人モ不出、七ツ過ヨリ追々相集、無程惣テ相揃

嬉シク存候御次第ハ六ツ時ニテ候、四ツ過

太守様御入有之、直ニ我々 御目見相濟、陣屋へ入

候得ハ一番貝二番貝

御名代御本陣ヨリ吹立、御先手ヨリ相初リ、御旗

本・

（久光）

三郎様御旗本・御城下守衛、八ツ過相濟、夫ヨリ

川尻相渡リ島津仲殿同列ニテ下遠見番所ヨリ水軍隊

調練致見物候、

上様ニモ弁天濤台場ヨリ

御覽、拙者ニハ七ツ過帰宅、今日之ツカレ中々絶兼

候程有之、大鐘前ヨリ臥候処、夫成翌朝迄、

御通達之写

一金老両

代錢八貫文

一四文錢壹文二付

代錢八文

四文錢

右御領國中ハ是迄六文ニテ通融、

一銅錢壹文二付

代錢四文

右ハ吟味之訳有之、今日ヨリ御蔵々入私者勿論、

御領國中一同致通融候様申付候、此旨支配中江申渡、

奥掛・表方へ相達、諸郷・私領へモ可申渡候、

三月十三日

式部

一今日調練

御視ニ付テハ

上様ニモ時々備中江 御乗出ニテ

御覽、御側廻三拾騎乗出候、終テ

御褒詞有之、夫ヨリ台場之様 御渡リニテ水軍隊

御覽、

今日一陣調練之次第

一御先手指揮御家老

一両御旗本指揮御名代

一御城下守衛指揮御家老

十三日 間々細雨、

朝六ツ起、今日者

四ツ過帰宅、無程臥候事、

十五日 快晴、

朝六ツ起、六ツ過花舞軒御墓參詣、伊藤六郎右衛門殿・重富屋敷へ一刻罷出、五ツ時帰宅、四ツ前ヨリ造士館へ相勤、九ツ過ヨリ出 殿、七ツ過帰宅候得者左近允新七殿入来、鐘稽古共イタシ夜五ツ時分被帰候、主税儀未入門ハイタサス候得共、透々ニ表ハ教置候含ニテ、今日初テ表三本稽古イタサセ候、四ツ半臥候事、お広どの兄弟被来候、

十六日 快晴、夕雨、

朝六ツ起、四ツ前出 殿、七ツ後退出掛平佐おつやさま江一刻、前内記録へ一刻罷出候テ大鐘前帰宅、夜九ツ時分臥候事、

一居屋敷茶昨日摘方イタシ、今日ほいろとりニテ候、

十七日 朝曇、後晴、

朝六ツ起、四ツ時ヨリ造士館へ相勤、八ツ後ヨリ出

殿、七ツ後直ニ帰宅、菊之芽トモサシ候、夕ヨリ伊藤彦助殿入来、四ツ時被帰候、

去ル十二日調練次第書

明後十二日於調練場調練被遊

御視筈候間、一同出軍之心得ヲ以雨晴無構可致出席事、

一当朝調練人数六ツ時揃ニテ、着到之儀諸役者者刻限前以出席、戦兵ハ伍長着到、伍長ハ什長着到、什長ヨリ物主へ届可申出事、

但、病氣之人ハ物主へ届可申出、戦兵ハ伍人連名ヲ以届可申出候事、

一銘々自筒要具致用意出席、組々定之場所ニ一組ツ、相控、他組へ不入交、鉄炮ハ自身堅固ニ致格護、什長・伍長専氣ヲ付聊モ不鍛練之儀無之様可致取締事、

但、火薬・雷帽子ハ於調練場可被相渡候間、一組毎ニ玉薬方ヨリ什長・伍長相請取戦兵へ可相渡、戦兵へ可相渡火繩之儀ハ自分可致用意事、

一服合立揚股引之間勝手次第、

但、陣笠・半首致用意者ハ勝手次第、

亥三月十日

一 談合役之儀、自馬不立置者ハ当朝於調練場御借馬可

被仰付事、

川上(久美)式部殿

右、此節

一 貝・太鼓ハ当朝於調練場可被相渡事、

忠久公御影殿・

一 忌中之人ハ前以名前可申出事、

齊彬公御社御造立ニ付掛被仰付候条、此旨向々へ可

一出席遅刻相成候歟、又ハ無届ニテ御暇等不束之儀於

致通達候、

有之ハ夫々屹卜御取扱可有之、若急病差起候歟、無

三月

(島津久徴)
大蔵

扱儀到来之節ハ仕長・伍長細々相糺、物主へ可申出、

吟味之上可致差図事、

十八日 晴、

一 一番貝ニテ銃調之事、

朝六ツ起、四ツ時出 殿、七ツ過退出、直ニ帰宅、

一 二番貝ニテ各陣前ニ折敷之事、

今日嘉美行帖佐ヨリ来候間、今晚緩々ト相咄、四ツ

一 追留之後銃發無用之事、

半臥候事、

一 調練相仕廻引取之節、陣前ニテ折敷談合役ヨリ姓名

呼合可繰入事、

十九日 晴、

一 銘々腰兵糧用意之事、

朝六ツ起、五ツ半出 殿、七ツ前ヨリ関山糺殿・島

一 惣人数御暇之儀ハ物主ヨリ諸役者へ可相達候間、無

混雜様可致御暇事、

津権五郎殿同道ニテ水軍隊見物トシテ弁天台場へ参

以上、

候、此節台場下町浜辺ヨリ地続相成、台場モ砲門ナ
シニ御築替有之由ニテ、数百人之土持誠ニ賑々敷事

二候、大鐘前帰宅、暮過ヨリ前お村さま御出候得共、
明朝砂揚調練ニ付乍御失礼五ツ過臥候事、

御通達之写

此節

三郎様御上京之上

御下向之節、日州細島ヨリ

御上陸、高岡筋被遊

御通行筈候間、

御休泊等之儀ハ追テ可申渡候ニ付、

御通路筋御手当相掛候儀ハ早々取シラヘ可申出候、

左候テ、諸郷・私領共進物等一切不致様、且御供人

数之儀モ他国同様都テ旅籠扱被仰付候、此旨向々ヘ

可致通達候、

但、御通路筋諸所請持郡奉行等其郷々ヘ差入候様

被仰付、尤、御比合之儀ハ追テ可申渡候、

三月

大藏

二十日 晴、

曉大鐘前起、月明ナル故立木打イタシ候得者主税ニ
モ起出候テ打候ニ付、取直シ共イタシ候、又鐘之出
シモイタシ教候、六ツヨリ御旗本六組調練ニテ参リ、
四ツ時相勤、九ツ時分帰宅、無程集成館ヘ参候テ雷
帽子大中小申請イタサセ、処々拝見共イタシ、七ツ
時分帰宅、大鐘過ヨリ町田内膳殿夫婦被来候、近々
之内為居地頭指宿ヘ被差越候ニ付、饑別之意ニテ候、
夜四ツ過比被帰候、九ツ前臥候事、

二十一日 晴、

朝六ツ起、五ツ過ヨリ千石馬場家ヘ庖瘡見廻ニ参候、
平八殿子共衆未種痘被致置候処、此節兄弟兩人イタ
サレ候由、夫ヨリ四ツ前ヨリ造士館ヘ相勤、四ツ過
ヨリ出 殿候得ハ、島津織之介殿月番之処病氣ニテ、
拙者当月ヨリ来月迄月番相勤候賦、直ニ今日ヨリ相
勤、七ツ後御下リ後退出、帰リ掛加藤家ヘ参、稽古
所ニモ一刻、権兵衛殿ヘ用事有之相達シ、又町田内
膳殿ヘモ参候、今日御内々為仕廻料御金百両頂戴被
仰付候段、式部殿ヨリ承知ニ付テ参候、夫ヨリ田原

直助殿へモ用事有之、一刻參候テ大鐘時分帰宅、夕

二十三日 雨、

ヨリ加藤権兵衛殿入来、九ツ時分被帰、九ツ半臥候

朝六ツ起、五ツ半出勤、七ツ過退出、直ニ帰宅、夜

事、町田家お筆ニモ来リ、夜入り帰リ候、

九ツ時分臥候事、

一中雷帽 三百

但、ドンロル込方無之モノ、

二十四日 朝雨ニテ霽、

一ロンドル粉巻奴、

朝六ツ起、五ツ半出 殿、七ツ過退出、直ニ帰宅、

但、組包ニシテ、

七ツ後宅ニテ逼塞・遠慮申渡者有之、進達掛迫水孫

右之處巻朱銀壹切差遣候得者

次郎・書役久留助四郎来、大鐘申渡相濟、暮ヨリ内

随分来候段、田原氏ヨリ承候テ書留置、

膳殿へ參候テ、四ツ過帰宅候得者名越誠之進殿か、

との被来居、無程被帰、九ツ時分臥候事、

二十二日 晴、

朝六ツ起、五ツ半出 殿、七ツ過御下り後退出、直

二十五日 曇、

ニ帰宅、地頭与頭相良治左衛門来候ニ付、取次美代

朝六ツ起、五ツ半出勤、七ツ後退出ヨリ直ニ帰宅、

藤兵衛殿被来候、

夜七ツ時迄書見イタシ臥候事、

(久光)
三郎様御立之御祝儀并

今日ヨリ茶取ノヤシキ、

御筆写相渡候、暮過平田玄裕殿相頼被来候、先日ヨ

リ拙者些不快ニ付テ也、

二十六日 晴、

(二八九頁文書に同じ、本文略)

朝六ツ起、五ツ半出勤、七ツ後退出ヨリ加藤権兵衛
所へ參、島津仲殿兩人ニテ仕合望候テ見候、当分出

席人数之内ニテ市来矢之介殿・中村勇吉殿・川上卯

八郎殿・伊東早太殿此四人（古親カ）稽能相見得候、暮帰宅候

得者今晚島津登殿御着之賦候由承、早々参候得者夜

八ツ時分御着有之、七ツ過キ帰宅、直ニ臥候事、

今日モ茶摘ニ遣、

一 今日仕合イタシ候人数

二階堂彦太郎 秩父十郎太

逆瀬川正之進 伊地知新太夫

若松吉次郎 大島孫右衛門

坂本弥之助 川上龍助

宮内莊之丞 加藤源八

町田幸之助 永井右八郎

田中庄五郎 三原彦十郎

菱刈七之丞 迫水孫次郎

吉富郷之丞 町田助五郎

別府彦兵衛 市来矢之助

川上卯八郎 川上半右衛門

伊東早太 市来勘助

中村勇吉 基太村彦助

加藤覚兵衛

一 番組

一 鉄炮所持家部式百三拾式

一同不持家部七拾壹

一 拾五歳ヨリ五拾八歳迄人体四百五拾壹人

一 鉄炮数四百三拾壹挺

二 番組

一 鉄炮所持家部式百三拾五

一同不持家部五百拾壹

一 拾五歳ヨリ五拾八歳迄人体八拾七人

一 鉄炮数三百九拾七挺

三 番組

一 鉄炮所持家部三百六拾五

一同不持家部式百九拾五

一 拾五歳ヨリ五拾八歳迄人体八百六拾人

一 鉄炮数五百八拾式挺

四 番組

一 鉄炮所持家部三百九拾七

一同不持合家部三百五十

式十八匁 一挺

一拾五歳ヨリ五拾八歳迄人体九百八拾式人

二十目 二挺

一鉄炮数六百三拾七丁

十五目 一挺

外二、式百目

一挺

合鉄砲所持家部千九百三

百目

一挺

合同不持合家部千八百九十七

式十目

式丁

合十五才ヨリ五拾八歳迄人体五千百式拾九人

五番組

合鉄炮数三千百三十三挺

一鉄砲所持家部三百五

一同不持合家部三百式拾三

二十七日 晴

一十五歳ヨリ五拾八才迄人体九百七拾八人

一鉄炮数五百四十三挺

六番組

一鉄砲所持家部三百六十八

一同不持合家部三百四十七

一拾五歳ヨリ五拾八歳迄人体八百七十一人

一鉄炮数五百四拾三挺

外二、百目

式挺

五十目

一挺

三十目

一挺

茶取加勢被来候事、

付任其意夜入五ツ葉丸猪之介殿同道ニテ帰、四ツ半
隊候事、今日モ茶摘ニ遣、先日ヨリ毎日指宿猪之介

行等之節モ貝差出届申出候様相達置候、与力之内貝
稽古イタシ候、鮫島金兵衛・本村仲太郎召呼為吹候、

等之節差掛リ病氣等モ候ハ貝差出届申出、且平日旅
拜借被仰付候ニ付吹方稽古イタシ候様申渡候、調練

朝六ツ起、五ツ過ヨリ登殿へ参、四ツ時出勤、七ツ
後退出ヨリ弓射へ同席中参、御手当惣貝役召集、貝

二十八日 晴、

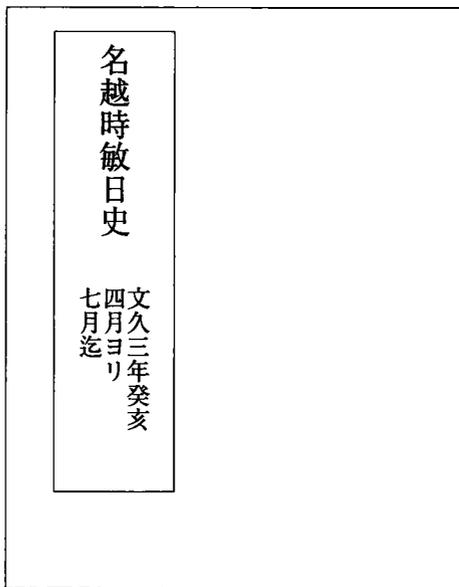
朝六ツ起、五ツ半出勤、七ツ後退出ヨリ直ニ帰宅、
おせつとの被来居り候、無程被帰、夜四ツ半臥候事、
今日モ茶摘ニ遣、指宿氏加勢同断、

二十九日 晴、

朝六ツ起、五ツ半出勤、七ツ後退出ヨリ権五郎殿江
参り候テ大鐘帰宅、四ツ時分臥候事、

晦日 曇、夜雨、

朝六ツ起、五ツ半出勤、七ツ後退出ヨリ明日口宣着、
（川上久運）
但馬殿ニモ御出有之候間、月番之御小姓与番参り候
様致承知、当月引合相月番島津頼母殿・来月引合樺
山要人殿同道ニテ参候、大鐘過キ帰宅、四ツ過臥候
事、



日史第二十二

〔貼紙〕
名越日史 糺合未済

文久三年癸亥四月ヨリ

七月マテ

名越時敏(花押)

文久三年癸亥四月中

朔日 甚雨、後晴、又夕ヨリ雨、

朝六ツ前起、六ツ過ヨリ福昌寺へ

口宣着ニ付席詰トシテ参リ、五ツ前着有之、五ツ過
比

太守茂久公御参詣ニテ

口宣 御拜之上御靈屋御参詣、英之進殿御拜

口宣、御家老・若年寄・大目付御拜、終テ

御靈屋参詣有之、拙者ニモ参詣、四ツ半一刻帰宅、

又出 殿、七ツ後退出ヨリ直ニ帰宅、夫ヨリ書見、

夜入九ツ時分臥候事、

御通達之写

三郎様御儀、此節

御上京、即日

近衛様江御参殿、

公武、御重職之

御方々様江

御逢御用談被為在、中三日

御滞在ニテ被遊

御下向候、勿論被遊 御建白

御旨趣モ被為 在候得共、既攘夷御決定、猶英夷三

ケ条申立之趣專御国へ相拘候儀ニテ、再三

御召留之

御内命被遊

御承知候得共、右様切迫之形勢故無御抛筋被

仰立不被為得止、早々被遊

御下向候段申来候、此旨向々へ可申渡候、

四月

（川上人美）
式部

元禄四年未正月与方日帳并引付留帳之書拔

一来ル廿六日廿七日天氣次第於谷山関狩被仰付候間、

諸役人之外不残与頭召列、同所之落シ之上ニ可被相

集候、惣奉行島津又七・伊集院将監被 仰付候条可

随下知、異様之不致支度様与中へカタク可被申渡者

也、

未正月十一日

口上覚

我々之中之若キ衆、去年四月吉野御馬追之節、異様
之支度并黒鬚書申候ニ付遠慮申付、其段遂披露候処

二達 貴聞、旧冬組頭ヨリ申出通ニ御免許被仰渡候、

然者右人数之内角入・前髮取之願申出候共御座候、

依之常式之案文通ニテ書物等申付指出可申候哉相同

申候、以上、

正月十七日

五番組
島津織部

一 近年諸事漸々花麗成立、諸道具・衣類等迄結構過候

間、成程致間略物每質素可相調候、且又元服・婚礼・

誕生之祝儀振舞等之無抛御モ身上不相応輕ク可仕候、

此外常体之参会之節取立候振廻仕間敷候、音信贈答

之儀モ最前仰出之趣可相守候事、

一 内証之花麗無之様可仕候、召仕之者男女ニヨラス衣

類等ニ至ル迄其身相応ニ着用イタサセヘシ、驕之体

無之様主人ヨリ堅可申付候事、

右仰出之趣謹テ奉承知、堅固可相守者也、

元禄四年未二月十日

覚

上鉄炮場五月廿三日之洪水ニ令破損候ニ付、修甫普

請之儀申渡候間、来ル十日十一日日和次第与中□此^(寄目)
節ハ先半分罷出、普請有之候様ニ可被仰渡候、以上、

閏八月七日

横目頭所

五番

六番

与頭

覚

一下知之士功之入申候者一与ヨリ五人ツ、被罷出候様

御見合可被仰渡候、

一与ヨリ罷出候夫三ヶ二ハ歛持参仕候、三ヶ一ハ鎌・

ナタ可致持参候、此外タワラ持遣候様ニ有之度候、

七月廿六日

一今日此方ニテ弓場普請御相談有之候、伊集院刑部殿

御出被成候、島津頼母殿御障入、阿多淡路殿御病氣

ニテ御兩人共ニ御出被成候、^(不脱カ)

一右ニ付御相談被罷出候衆、肥後与右衛門・本田弥介・

新村久右衛門・竹之内仁右衛門・肝付甚兵衛・中原

七之丞・税所舍人・浦川李之介・鎌田了右衛門・横
山勘介也、

一来ル廿九日堀之頭弓場普請有之候間、与中之若キ衆
不残可被罷出候、高百石ヨリ夫丸壺人ツ、百石以
下ハ可為人役候、尤、鎌・ナタ・歛・鋸等持、未明
ニ罷出候様ニ可被申付候、若未進之人數於有之ハ相
談之上科普請可申付候間、各与中江早々可被申渡候、
以上、

未七月廿六日

五番

与所印

十一与小頭へ申渡也、

二日 雨、

朝六ツ起、五ツ半出 殿、今日八ツ半時分御軍役奉

行新納次郎四郎与方へ被来、今日七ツ時

太守様并天台場江^(忠義)

御出ニテ御備付之大砲打方

御覽被為 在候段被 仰出候、早々手当有之候様被

相達候、一番組・二番組御先手之衆受持ニテ、一番

ハ北郷数馬殿、二番相良治部殿ニテ、治部殿福昌寺^(久徳)^(長亮)

^(香櫓) 順聖公 御位牌殿へ参詣之賦ニテ只今御暇故早々呼

返シ、平佐前ニテ追付候由ニテ無程出 殿、急キ諸
役者・戦兵へモ早々手当有之、七ツ時二者人数相揃
候、拙者ニ八月番故七ツ過御下リ後御暇ニテ直ニ帰
宅、又馬ニテ乗切台場之様参候処、未

上様御出無之、無程 御出ニテ大砲打方有之、未初
テ之人数、殊ニ急速之事ニ候得共、随分能相揃打方
首尾能相調候、相濟台場芝原ニテ上様ニハ 御将机
被為 召、打手人数中

御目見被 仰付候、水軍隊モ一艘乗出、仁礼舍人物^(仲道)
主ニテ打方被 仰付候、相濟帰宅、

今日御筆仰出於敷舞台拝聞、

三郎様

御筆 仰出之写

今般英夷軍艦横浜へ渡来、不容易重大之事件申立、
於

幕府御許容難相成趣之由、畢竟去秋生麦一条ト相聞
得候、就テハ

皇国之御大難当家ヨリ事起り候訳ニテ、別テ恐入次
第二候、尤、彼儀ハ曲直分明之事情処、蛮夷之情態
可惡之至候条、遂強暴申募リ兵端相開候節ハ天下国
家之為、拙他藩一統粉骨碎身夷賊誅伐有之候様頼存
候事、

亥三月

太守様

御筆仰出之写

今般英夷軍艦横浜へ渡来、重大之事件申立候一条ニ
付、於京都御別紙之通

^(入志) 三郎様御筆ヲ以被

仰出候趣、御尤之御義ニ存候、

皇国之御大難、当家ヨリ事起り候訳者幾重ニモ恐入
候得共、畢竟生麦一条ニ就テハ曲直分明、武門ニオ
ヒテ不可遁之先習ニ候間、万一前浜へ渡来候ハ、正
議ノ論ヲ以致応接、彼ヲシテ令屈伏候者必定ト存候
得共、自然我ニ兵端ヲ相開候訳モ候ハ、強暴之極
ト可申候得者

三郎様之御趣意奉汲受、天下国家之為粉骨碎身夷賊
誅伐有之候様頼存候、就テハ手当相掛候義共猶又
於役場手厚尽評議候様可有之、且又一同相心得候訳
卜存候得共、攻守之命令相加候迄ハ如何程之軍艦渡
来候共、少モ動揺イタサス候義專要存候事、

御家老來御添書

今般英夷軍艦横浜へ渡来、不容易重大之事件申立、
於

幕府御許容不相成候二付、遂強暴申募リ兵端ヲ相開
キ候節ハ粉骨碎身夷賊誅伐有之候様、

御別紙之通於京都

三郎様御筆ヲ以被

仰出、猶亦

太守様御添書ヲ以夷賊誅伐ハ勿論、手厚御手当向尽

評議候様、左候テ、攻守之

御命令被為

在候迄ハ如何程之軍艦渡来候共、不致動揺候様卜之
趣、

御別紙之通
御筆ヲ以被

仰出、重疊何共奉恐入、実ニ不容易次第二候条、一
統謹テ奉承知、自然臨右時機候節ハ勿論之事ニテ、
兼テ可抽忠勤儀此時二候条、屹卜

御趣意可相守候、

右之通、支配中・組中江可被申渡候、

四月

(島津久徳)
大藏
(川上久運)
但馬
(川上久美)
式部

三日 晴、

朝六ツ時ヨリ家来・下人惣人数ニテ拙者ニモ出張庭
ソダケ、今日ハ南泉院ヨリ御札上リ候二付、御上ル
迄之間御清ニテ候間、拙者未服不相明候二付、四ツ
過ヨリ出

殿、今日ハ昨日之

御筆仰出六番ハ拙者宅ニテ弘方イタシ候二付、八ツ
前御暇ニテ帰宅、島津(久兼)権五郎殿入来、進達掛ハ村橋

宗之丞・迫水孫次郎、書役八川上八十次ニテ候、弘
メ人ハ永井八二郎ニテ候、八ツ半相濟、直ニ権五郎
殿・八十次同道ニテ福昌寺ニテ

（寄物）順聖院様御靈屋へ罷出、諸士今日拜礼ニ付席詰トシ

テ参候、夕帰宅、明朝ヨリ内膳殿指宿へ被差越候ニ

付家内中参候テ九ツ時分帰候、

御通達之写

鉛五斤位ツ、

壹斤ニ付代銀五匁五分ツ、

右、御軍役用トシテ家督老人前依望ハ申請被仰付候、

部屋栖進モ御手当被仰付置候人ハ同様被仰付候、御

一門方并諸大身分ハ依望ハ吟味次第可被仰付候、諸

郷之儀モ依願者申請被仰付候、

四日 雨、

朝六ツ起、四ツ前出 殿、七ツ後退出、今日者四ツ

時ヨリ弁天台場打方有之、

（忠善）太守様ニモ御出被為 在候、終日在宿、暮ヨリ 前

おむら様・おみちさま御出、四ツ時分御帰候事、

此度神奈川港へ英国軍艦渡来、不容易事件申立候ニ
付、若談判不整申候テ戦争ニおよび到来迄ハ於当地
モ英国卜戦争相成儀ニテ、貴国商人共右戦争中ニ在
留罷在何様之儀相生シ可申事難計、左之通別段警固
之者付置候、手当行届一ト先当地ヲ引払候儀取計有
之度頼入候、謹言、

文久三年三月

（忠善）大久保豊後守

蘭 仏 亞 李 葡

英国卜戦争相成候節、其許立退方之儀ニ付被申立候
趣勘弁イタシ候得共、何分警固之見届無之、然ル上
者商人一同一ト先退崎被致候様頼入度事ニ候、乍去
在留之決心ニ候ハ、素ヨリ警固之手当届兼候得共、
稲佐辺寺院之内ナリトモ一纏居留被致、支配向等付
置候様ニモ可取計哉ト存候、尚勘弁有之度及相談候、
謹言、

文久三年三月

大久保豊後守

此度貴国軍艦神奈川湊江渡来、不容易事件申立候二付其談判不整申候間、戰爭ニ相成候ハ、右戰爭中当地ニヲヒテ双方之使者往来、印旗兼テ打合置不申候テハ龜忽之振舞有之哉モ難計候ニ付、此方ヨリ日ノ丸旗并白旗相用ヒ筈ニテ候間、其段被相心得軍艦船將へ廻達有之度、就テハ貴国使者印旗兼テ被申越候様イタシ度此段申進候、謹言、

文久三年三月

大久保豊後守

シヨエヌモリソン上下

御通達之写

^(久光)
三郎様来ル九日被遊

御光着候間、島津又六郎一列其外月次御礼罷出候面々

ハ先達テ申渡置候通夫々

御通筋へ被罷出、

御光着以後

御本丸へ罷上、於席々謁御家老御祝儀可被申上候、

右御光着、来ル十一日ニ相成候、

右通之筈候処、高岡去川御支ニテ来ル十一日ニ御着

相成候、以下略ス、

五日 大雨、

朝六ツ起、五ツ過町田藤八殿入来、五ツ半出動、七

ツ後御下リ後退出、直ニ帰宅、今日ハ四ツヨリ祇園

洲台場へ大砲打方ニ付

上様不時 御出、別テ之大雨ニテ

上様ニモ至テ御ヌレ遊候由也、台場受持ハ島津權五

郎ニテ候、藤兵衛ニモ被来、

六日 雨、

朝六ツ起、五ツ半出動、七ツ後御下リ後退出、今日

者大門口台場打ニテ候処、

太守様不時

御出ニテ

御覽アラセラレ候、台場請持ハ関山糺ニテ候、

七日 快晴、

朝六ツ起、五ツ半出 殿、七ツ後退出、無程地頭所

来、美代藤兵衛殿ニモ被来、

八日 快晴、

朝六ツ起、五ツ時ヨリ田原直助殿へ参候テ、五ツ半過帰宅、四ツ前ヨリ書籍方へ参、九ツ過ヨリ出勤、七ツ後ヨリ島津権五郎殿什長・伍長へ達事有之、拙者ニモ参候テ大鐘過帰宅、直ニ庭取集、暮過ヨリ母上様其外家内中打寄酒共給候、片手ニ日帳留ニテ候、四ツ半臥候事、

九日 晴、

朝六ツ起庭取集、五ツ半出勤、七ツ後御下リ後退出、直ニ帰宅、今日ハ什長・伍長其外諸役者へ達事有之、七ツ後一統相揃演達之上、暫車座ニ相成茶・煙草盆共差出何歟ト談合共イタシ候、大鐘比皆々被帰、今日ハ終日頭痛イタシ候ニ付近隣平田玄裕殿へ相頼薬用イタシ候、今日達シ事等相濟候上ハ直ニ臥候事、

十日 曇、

朝六ツ起、川上右膳殿江御用之儀ニ付参候、無程帰宅、五ツ前ヨリ 得宜院様・法成院様御法事ニ付

客人有之、人数島津権五郎殿・葉丸猪之介殿・名越彦太夫殿・伊藤整之介殿・基太村新十郎殿・二階堂弥九郎殿・美代藤兵衛殿・名越誠之進殿・児玉佐平次殿ニテ候、四ツヨリ花舜軒へ参候、法事八ツ前相濟、直ニ帰宅候得者お藤・お筆・おふミ来居候、七ツ前ヨリ島津兵十郎殿 御城下守衛物主ニテ什長・伍長等へ達事有之候、参候テ七ツ半時分帰宅候得者おむら様・おミち様御出居被成候、花舜軒和尚同断、各夜入五ツ時分被帰候、家来村田平蔵今早朝ヨリ終日来居、名越清左衛門ニモ一刻来候、夜四ツ時分臥候事、

十一日 晴、

朝六ツ起、五ツ半出 殿、
三郎様御事、九日因分
御泊、十日重富

御泊ニテ、今朝六ツ時重富 御立ニテ芝之元 御小

休、庄屋役所御休ニテ

御行掛リ

御光着之筈候処、今日九ツ過

御光着被為 在候、

二之丸御門東之方へ罷出、又々出

殿ニテ七ツ過退出、帰宅、冲瑞雲との・逆瀬川玄高

殿被来候、母上様先達テヨリ御病氣ニ付テ也、両

人共先達テヨリ被来候得共不書留候、喜悅ニモ毎日

来候、玄高同断、大鐘前ヨリ小松家玄喚迄着之祝儀

ニ参、貴島新左衛門殿へモ同断、夫ヨリ永吉へ参、

夜入五ツ前帰候、最早味噌吸物モ相済居候、帰宅、

無程队候事、

御通達之写

一御三役以下被定置候御役人、七ツ時御暇被仰付置候

得共、此節時刻被召替候ニ付、明日ヨリ以前之通四

ツ出勤、八ツ時御暇被仰付候、

一当分時刻之儀、一日七ツ時之割ヲ以於鐘堂撞来候得

共、明日ヨリ日一杯六時之割ニ被召替候、

右之通被仰付候旨被 仰出候条、可承向々へ早々可

申渡候、

四月十二日

小松帯刀(清應)

十二日 晴、

朝六ツ起、五ツ半出勤、七ツ半時分御下り後退出、

直ニ帰宅、逆瀬川玄高殿・基太村新次郎様御出、無

程御帰、又拙者前へ罷出候テ夕帰宅、

書籍方御蔵書目録

一砲術火具篇

二本

一同補遣

完一本

一各国旗印

完一本

一兵学小識

十四本

一船砲新編圖式六卷

十一本

一海上攻守略説

全一本

一各国兵制全書

乾坤二本

一オクタント説

完一本

一和蘭紀略

完一本

一 砲術備要	二本	一 坤輿図識 <small>図二卷 アリ</small>	三本
一 西洋甲冑図	一本	一 砲術備要	四本
一 蒙古陳情	一本	一 煩鉄全書	一本
一 一日百里伝通音録	一本	一 本軍操砲鑑 <small>(水カ)</small>	一本
一 遭厄日本紀事	六本	一 砲術掌冊	二本
一 逸魯乙多兒一世記抄訳	一本	一 度量比較表	一本
一 砲術掌冊	二本	一 金湯要録 <small>図廿一 枚付</small>	十本
一 船砲新書	二本	一 雷帽挿及銃姿制	一本
一 七種軍艦造法論	二本	一 兵学小識	七本
一 煩鉄全書	一本	一 砲家必読	十一本
一 水軍操砲艦	一本	一 百機山斯經驗書	七本
一 水陸戦法録	二本	一 則克録 <small>唐版本</small>	三本
一 煩砲用法	三本	一 西洋火薬精弁	五本
一 兵学小識 <small>戦闘術門</small>	四本	一 海上砲術全書	二十九本
一 火薬精弁	五本	一 鈴林必携表	一本
一 砲術備要	四本	一 砲台瑣言	一本
一 烙丸明弁	一本	一 大砲隊大略取調書	一本
一 幕府兵制記	一本	一 遠西砲術撰要	七本
一 煩砲学校	一本	一 嘉永癸丑浦賀雜録	一本

- 一 防戦試説
- 一 戎装図
- 一 煩砲学校
- 一 防海備覚
- 一 漂客談奇
- 一 西洋砲術便覧
- 一 増補煩砲射擲表
- 一 雷火術小解
- 一 砲術訓蒙後編
- 一 火技範
- 一 理学提要
- 一 海兵操範手銃篇
初篇
- 一 銃海金針
- 一 陸砲全書
- 一 海上砲術全書
- 一 実政録節鈔
- 一 海上砲術金書
- 一 築城典刑(型カ)
- 一 万国図筥入

- 二本
- 一帖
- 一本
- 四本
- 一本
- 二本
- 一帖
- 一本
- 二本
- 二本
- 四本
- 一本
- 一本
- 八本
- 七本
- 六本
- 全十五本
- 全(一册脱カ)
- 八枚

- 御軍役方
 - 一 雷金鋭
 - 一 烙丸全備
 - 一 用砲軌範
 - 一 大砲運転全書図付
 - 一 孫子十家註
 - 一 装薬諸具詳説
 - 一 大砲使用説
 - 一 洋外砲具全
 - 一 軍用火箭考
- 一同
 - 三册
 - 二册
 - 十六册
 - 四册
 - 一册
 - 二册
 - 全二册
 - 二帖

十三日

朝六ツ起、四ツ前出勤掛奥山藤左衛門殿へ参、出
殿、七ツ時御下りヨリ退出、今日ヨリ出勤モ四ツ八
ツニ相成候得共、御下り遅ク有之候、帰宅候得者退
瀬川玄高・松岡喜左衛門被来候、夜四ツ半臥候事、
十四日 雨、
朝六ツ起、四ツ前出勤、八ツ半御下り後退出、直二
帰宅、又々町田内膳殿・伊藤六郎右衛門殿江参候、

大鐘過帰宅、暮ヨリおむら様御出、四ツ半御帰、今朝西田矢兵衛殿御手当一件ニ付被来候、九ツ過臥候事、

(二八九頁文書に同じ、本文略)

十五日 小雨、

朝六ツ起、四ツ前出勤、七ツ後御下り有之、直二帰宅、四ツ

御目見ニモ罷出候、今朝出勤掛升形へモ一刻参候、

十六日 朝雨、昼霽、夕雨、

朝六ツ起、四ツ前出勤、八ツ過御下り後帰宅、無程

喜左衛門殿被来、暮ヨリ薬丸猪之介殿被来、九ツ時無程臥候事、

十七日 曇、

朝六ツ起、朝町田喜次郎殿入来候、四ツ前出 殿、

八ツ前御暇ニテ帰宅、今日者伊集院巨支配・拙者支

配中へ仰出拜見之筈ニテ、八ツ時ヨリ七ツ時迄之間各御用罷出候二付而也、書役西郷藤左衛門来候、七ツ過帰候、基太村助左衛門殿・児玉佐平次殿入来候、今日之仰出者末ニ書留置、書出シ
(久光) 三郎様於京都卜有之候、

貴久公 忠良公

御筆仰出

一 諸士衆中忠孝之道第一相守、五人与睦敷可交事、

一 領地多キ衆ハ七書ヲ習ヒ、人数掛引昇貝・太鼓ノ合

図作法、常々調練可有事、

一 若キ衆中ハ武芸・角力・水練・山坂歩行、平日手足

ヲナラスヘキ事、

但、所領持并無息衆中、其身相当之武道武芸、心掛

無之輩者所帯没収之上可為重科、

(旧記雜録)より補
一 田地壹反ニ付、武用立候家之子壹人ツ、家内ニ可

有養育事、△

一 陣中三拾日自飯糧引当無之并軍役出物等遲滞ニオヒ

テハ(所帯脱之)可没収事、

一諸士衆中、番持普請其外役務之間日ニハ不致唯居、
主人家之子女迄モ早朝ヨリ農業可出事、

但、地頭・領主不受免許テ其所ヲ迦シ出候ハ、可
為死罪、

一百姓并又内之者ニ而茂独身并困窮之者アラハ、横目
衆ニアラス候共我等父子ヘ可申出事、

一諸士衆中之子共無免許ニテ出家成可為停止事、

一地頭・領主并奉行・頭人下々之訴訟則不致披露、又
者邪成捌候ハ、不及取次、我等父子ヘ之間目通直ニ
可申出事、

一我等父子邪道聊止之儀見聞候ハ、誰人ニテモ不差置
可致諫言事、

右之条々若違犯之輩アラハ所領持之衆ハ必所領可没
収、無息衆中ハ可加嚴科者也、

天文八年己亥正月日

忠良御書判

貴久御書判

義久公 忠平公

御筆仰出

一式拾町以上之衆者又内之者種子島ヘ差渡、手火箭卷
挺ツ、引薬相添用意可有之候、五反以下相渡事、

但、手鉾・長刀老尺八尺八寸餘以上禁制之事、

一高百石以下之者具足可為竹鉢鉢力、兩具上下共ニ銘々可
持出事、

一兵具持者之十匁玉・廿匁玉相定候事、

一兵具持者之手鎗鎗力・弓之數者鉄炮ヨリ少為持候事、

右之条々今度肥後口ヨリ出陣候、此已後迄モ此軍賦
タルヘシ、諸士衆中第一二鉄炮手練無之輩ハ没収罪
科可行者也、

天正四年戊十四年力五月朔日 義久御判

忠平御判

三郎様於京都御届書

今般私儀奉蒙

御内命上京仕、輦下之形勢詳ニ觀察仕候処、

皇国之御危急旦夕ニ迫リ候趣顯然ト相見得候ニ付、

愚魯之身ヲ不顧、公武之御重職方ヘハ存慮十分献言

仕候得共、拙茂御採用相成候御模様ニ無之、慷慨歎

息之外無御座、就テハ無用之者長々滯京仕候テハ却テ公武之御為不相成、讒口紛々ト沸騰仕、終ニハ於御目前騷乱ヲ生シ候者案中ト奉存候、且攘夷御決義之上者国許之儀、三面之海島寸地モ醜虜掠奪不被致様防禦之用意嚴重不申上候テハ、御国威ヲ奉貶候場ニ相当リ別テ恐入奉存候間、不得止事明日発足仕、急速之儀御疑モ可有之候得共、右申上候外所存無御座候間、此等之趣不惡御聞取被成下度伏テ 奉願候、誠惶謹言、

三月十七日

島津三郎御名（久光）

此節攘夷拒絶之敵令承知仕候ニ付、夷船一艘ニテモ領内へ致碇泊候ハ、不及応接、速ニ加誅伐候心得ニ御座候、且依時宜候テハ夷賊為征討軍艦差遣候儀モ可有之候間、右之趣屹ト御聞取被下候様可申上旨被申付候、此段申上候、以上、

（島津忠義）
松平修理太夫

御名内

本田弥右衛門

右式通共即議奏衆へ御差上有之候事、

異船渡来之節之事ニ付仰渡

三郎様京都

御立之節、此度攘夷拒絶之

敵令被遊

御承知候ニ付、異船一艘ニテモ

御領内へ致碇泊候ハ不及応接、速ニ誅伐可被召加、

且依時機ハ夷賊為征討軍艦可被遊

御差向卜之趣

朝廷幕府へ被為及御届候間、一同其通可相心得、就

テハ何分

公武之御命令モ可有之儀、且ハ攻守之術ニヲヒテハ

遠大之

御趣意モ可被為在御事候間、自然異船渡来之節ハ決

テ不致動揺可奉待

御命令候旨

御直ニ承知仕、誠ニ奉恐入次第之事ニ候、右ニ付テ

ハ異船渡来之節之儀ニ付是迄追々

御筆等ヲ以テ細々被

仰出置候通、聊

松平三河守(廉倫)

松平阿波守(縁須齊裕)

細川越中守(廉順)

松平出羽守(定安)

松平長門守(毛利定佐)

佐竹右京大夫(義彦)

松平安芸守(淺野長訓)

中川修理太夫(久照)

毛利左京亮(元周)

池田信濃守(致睦)
(松平主殿頭殿方)

右二十一人參 内於小御所 御対面ニテ殿下へ

仰渡之写

一英夷渡来ニ付關東之事情切迫ニ付、防禦之為大樹(家茂)婦

府之儀尤之訊柄候得共、京都近海之守衛策略大樹

自指揮可有之、攘夷決戦之折柄、君臣一和ニ無之候

而者不相叶候処、大樹關東へ帰府、東西押隔候テハ

君臣之際情意不相通自然間隔之姿ニ相成、天下之形

勢不可存之場ニ可至卜、当節大樹婦府ニ付テハ於(救力)

叡慮不安候間、滞在守衛之計略厚被有之、奉安 宸

襟候様思召候、英夷応接之儀者浪花港へ相廻シ拒絕

談判可有之、若開兵端候節ハ大樹自出張万事指揮候

ハ、皇国之真氣挽回之機会可有之 思召候、關東

防禦ノ儀ハ可然人体相撰被申付候様

御沙汰候事、

亥三月十四日

一前書之趣大樹家御請仕候節者攘夷之御首途ニテ直ニ

八幡江行幸、於神前帶刀賜候 思召御座候、

右御書付於小御所関白殿一橋へ御渡、

一大樹婦府之儀、再応被相願候得共、婦府有之候テハ

如何様之変事到来モ難計、左候ハ、実以一大事之儀

深被(筋力)脳 宸襟候間、天下為且者徳川之為ヲモ深被

思召候儀故今暫滞京有之、攘夷基本相立 叡旨御貫

徹、人心安堵之場合ニ至候テ被奉安 宸襟候様周旋

可有之

御沙汰之事、

(徳川慶篤)
水戸中納言

水府江御達書之写

一為関東守衛下向被 仰付候ニ付防禦勤之儀、大樹目
代之心得ヲ以指揮可有之、先祖以來格別勤王之家柄、
先代之遺志致継述、藩一致尽力防禦可夷狄掃攘之成
功様 (奉祝力)

一大樹滯京之儀御請被成候付テハ為関東守衛下向被
仰付候間、早々出府防禦筋之手当心得、自然英夷
開兵端候節ハ尽力決戦有之候様 御沙汰候事、
一三月廿二日伝奏衆ヨリ水府へ御達書之写

御沙汰候事、

大樹俄ニ参内

三月廿四日

一三月十九日、今日俄ニ大樹公参内被

水戸家老

大場一真齋 (景淑)

一精忠節義之志厚有之候段、兼テ達

面ハ無之、内々於

御聴一段之事ニ候、今度 御所ヨリ被 仰出候趣モ
有之、江戸為 御守衛水戸殿被致帰府候付テハ随從
罷帰リ、御警衛向其外万端厚心得、国家之御為弥精
忠尽力可致旨被 仰出之、

御三間御対面御直ニ段々ト工儉被為
在、別紙之通被仰渡候様即座ニ御受書被為在候事、
大樹帰府之事、段々以 勅諭被 召止候事、
先日 御沙汰被為 在候通り、將軍職万事は迄之通
御委任ニ候、就テハ諸大名以下守衛万端指揮於被致
ハ御安心候事、事ニ寄候ハ、御親征モ被為遊度程

右之通御申付可被成候事、

三月

之

思召候事、

一二条御城ニテ水野（忌稱）和泉守殿大目付江攘夷之詔御裁拳

ニ付、早々拒絶之応接ニ及ヒ、外夷承服不致節ハ速

ニ打払候様被

仰出候間、一同厚相心得 御国辱不被為成候様可被

抽忠勤候、

右之通り万石以上以下之面々へ可被相達候事、

三月十八日

神重成

武朝窮

異国並

公家鈍

魔賊変

民衰貪

君身重

国下実

天命背

上無道

我誤輕

心帰財

君地儀

工農患

天失光

士皆億

臣生仁

商若悲

良逆集

古邪奥

忠臣少

直法発

賊多隠

新弘権

金臣銀

君不君

銀臣金

智恵袋くつとしめたる常陸帯

いまひときばりのる安産

かこうたる高井小判の近江なし

磨た故に切てすてたり

邑に出来国の為には徳用の

き、めを見する龍の志ら池本ノマ、

日の本の米のたすけの薩摩いも

腹くつろひて太平の御代

うまい気もすいきもいはん紀伊国の

ミかんの味ハやかてしるへし

味も能程よくまわる伊たミ酒

これて治る太平の御代

権一水戸薩州之一

井伊銀引テ城へ残

御通達之写

二十一日 晴

一七拾歳以上

朝六ツ起、今日者吉野御馬追ニテ外物見へ出候テ、

右無役之諸大身分并ニ着座門首・諸御役人無役之御

四ツ前通り相済ミ、四ツ前出

近習通、

殿、四ツ半時分 御殿島津求馬殿(久那)・島津良馬殿被来

一八拾歳以上

候、主税ニモ戸十郎ニモ吉野へ登リ九ツ半過帰候、

右無役之小番以下諸士・郷士・与力并出家社人、

島津権五郎殿同断ニテ帰リニ被来、各大鐘時分被帰

一九拾歳以上

候、お藤親子三人、おかのとの、伊藤家ヨリ子共来

右足輕以下一身者并町人・百姓・浦人家来未々迄、

兩人、今朝モ伊藤家ヨリハ今朝葉丸家子共衆被来候、

右者

お藤杯ニモ暮過帰リ、五ツ過臥候事、

三郎様御下向ニ付、

思召ヲ以御領国中老人御祝可被成下旨被仰出候、依

御通達之写

之右之通人別相糺、来月廿日限り名書取揃可差出旨、

御直元服并ニ御太刀進上ニテ初テ之

向々へ可申渡候、

御目見被仰付候者、其外兎烏帽子相用候節者都テ

四月

(川上久運)
但馬

御家折兎烏帽子相用候様被仰付候条可申渡候、

四月

(島津久敏)
大藏

二十日 曇

朝六ツ起、四ツ前出勤、八ツ御下り後御暇、直ニ退

二十二日 晴

出、大鐘おせつとの被来候、松岡氏モ一刻同断、夜

朝六ツ起、四ツ八ツ出勤之事、おむら様・基太村新

四ツ前臥候事、

次郎殿御出、

二十三日 曇、風アリ、

朝六ツ起、五ツ過ヨリ花舜軒御墓參イタシ、四ツ前出勤、八ツ退出、直ニ町田民部殿へ参候、夜前町田直五郎殿死去ニ付テ也、年内ヨリ内症之煩ニテ正月初ヨリ被臥居、終ニ死去ニテ候、夜入五ツ前帰宅候得者おむら様・おミち様御出ニテ、四ツ時分御帰候、無程臥候事、

二十四日 間々小雨、

朝六ツ起、四ツ八ツ出勤之事、

二十五日 雨、

朝六ツ起、奥山藤左衛門殿・町田家へ一刻ツ、参リ、四ツ前出勤、八ツ半退出、直ニ帰宅候得者前おむら様御出、辻元新兵衛ニモ来居、暮ヨリ松岡喜左衛門殿・児玉佐平次殿被来、各夜四ツ半時分被帰候、

二十六日 雨、

朝六ツ起、六ツ半ヨリ川上式部殿(久美)・二階堂源太夫殿(行三)・

鳥津登殿(久包)へ一刻ツ、参リ、四ツ前出殿、八ツ過御下

リ後退出、直ニ帰宅候得者おむら様御出無構書見共イタシ候、大鐘比新次郎様・前おこととの・戸柱おこととの御出、各夜入五ツ時御帰候、四ツ半過臥候事、

二十七日 快晴、

朝六ツ起、鐘表一廻一人ニテイタシ、主税・戸十郎ニモ教、夫ヨリ庭諸下地又書見共イタシ、四ツ出勤、相月番ハ今日ハ八ツ後御暇ニテ拙者老人相残り居候処、八ツ後貝吹之儀ニ付、貝役ハ勿論士分以上へ今日早速相達候様御軍役奉行新納次郎四郎ヨリ承、惣貝役并鹿兒島中触支配 御殿へ只今御用差出、追々罷出候テ惣テ達シ相濟、日入過御暇、帰ニ平佐へ一刻参リ、暮帰宅候得ハお村様昼ヨリ御出之由ニテ、夜四ツ過御帰候、無程臥候事、

二十八日 快晴、

朝六ツ起、稽古等昨朝同断、五ツ過ヨリ重富屋敷留

守居所伊藤六郎右衛門殿・沖瑞雲殿・河俣仲太夫殿・

伊藤彦助殿へ一刻ツ、参り候テ四ツ前出勤、八ツ半

御下り後帰宅、夕ヨリ河俣氏へ酒・吸物・取肴等取

合參候テ六ツ半時分帰候、仲太夫殿当年八十一歳、

極老ニテ歩行等不自由、淋シクイタシ居ラレ候間參

候、帰宅之上四ツ時分臥候事、

今日仰渡

陣笠

但、総角付、

右者以来御旗本備ニ相掛候奥向迄相用候様被 仰付

候条、向々へ不洩様可申渡候、

四月

(川上久運)
但馬

拙者組図師伝左衛門へ御褒美被成下候御書付之写、

未拙者組ニ不相成候内聞合等相成候ニ付、片書ニ島

津権五郎組ニテ出居候ニ付、此節モ権五郎組ト有之

候、

島津権五郎組
御小姓与

御金五両頂戴

図師伝左衛門

右者脱体困窮者、殊ニ幼年ヨリ病身ニテ兼並之御奉

公モ不相調、堅野焼物所細工人相勤又者致内職等取

続候処、母老年ニテ右余勢ヲ以始終氣ニ不相逆、兼

テ好物之品等相与深切致奉公、別テ奇特成心入之段

被

聞召上候、依之為御褒美右之通被下候条難有頂戴可

仕候、

右御格之通可申渡候、

四月

但馬

二十九日 曇、夜入雨、

朝六ツ起、鐘表一廻り一人ニテイタシ、四ツ前出勤、

八ツ後帰宅、仕長・諸役者江達事有之、伊集院巨殿(久運)

ニモ病氣ニテ拙者ヨリ相達候、且又今日ヨリ六組之

内壱人ツ、繰廻別勤ニテ屹ト致在宿居候様被仰付、

五人ハ今日

御殿ニテ申渡候得共、拙者組市来宗兵衛儀、今日御

用出シ置候ニ付宅ニテ申渡候、且又逼塞・遠慮等申

渡有之、式拾人計拙者ヨリ申渡、夕相濟候、進達掛
壹岐藤九郎・書役福島仲左衛門被来候、おむら様・
佐志のおてる様御出、夜五ツ時分御帰、九ツ過臥候
事、

公義仰出之写

覚

御滞京可為十日旨、御治定之旨最前相達置候処、猶

御所ヨリ被

仰出候趣モ有之二付、今暫

御逗留被遊候旨被 仰出候、御発駕日限之儀者追テ

相達ニテ可有之候、

右之趣向々へ可被達候、

三月

右之通、於京都被 仰出候、此段向々へ可被相達候

事、

三月十九日

大目付へ

(家改)
公方様当月廿一日二条御城

御発駕、東海道筋還御可被遊旨、去ル十七日於 京
地被 仰出候、此段向々へ可被達候、

三月

覚

当月廿一日京地 御発駕可被遊候、

御所ヨリ被 仰出候趣モ有之候ニ付、

御発駕御延引暫

御滞京可被遊旨被

仰出候、

右之通、去ル十九日於

京地被 仰出候間、向々へ可被達候事、

三月廿四日

写

大樹帰府之事、段々以

勅諭被 (止力) 召延候事、先日

御沙汰被為在候通り、將軍職万事是迄之通り

御委任ニ候、就テハ諸大名以下守衛万端指揮於被致者

御安心ニ候事、事ニ仍候而者

御親征茂被為遊度程ニ 思召候事、

三月 (長力) 召

御請奉申上候、

御諱

別紙四通之通從

公儀被 仰渡候条、此旨表方へ致通達、奥掛・御勝

手方へモ可相達候、

四月 (川上久運) 但馬

貝役

右ハ六組共御備組御手当被仰付置候内一組彦人ツ、

繰廻、別勤ニテ屹卜致在宿居候様被仰付候条可被申

渡候事、

頃日於諸所猥リニ貝吹候者共有之段相聞得、当時柄

相因之妨ニ相成、別テ不可事候、以来為稽古致吹方

候者ハ祇園洲訓練場所ニオヒテ訓練等之間日ニ吹方被仰付候条、右場所外ニオヒテ無用貝吹候儀一切不相成、此旨向々へ不洩様可申渡候、

四月 但馬

酒会沙汰之儀ニ付テハ天保之度被定置、面々承知之通ニテ心得違之儀ハ有之間敷、尤、端午ニ付饗応向之儀茂毎年申渡候通ニテ当分之時勢ニテハ猶更不相当之事候間、此以前ヨリ数度申渡置候通堅相守、聊取違有之間敷候、此旨支配頭并主人等ヨリ稠敷可被申聞旨向々江不洩様可申渡候、

四月 大目付

日史第二十三

名越時敏 (花押)

文久三年癸亥五月中

朔日 雨、

朝六ツ起、四ツ出勤、八ツ後退出、今朝指宿猪之介

殿・兎玉佐平次殿入来候、七ツ前 御殿ヨリ唯今御

用有之罷出候処、左之通被

仰出候、

可申渡旨被

仰出候、

御定場左之通、

不時

一両御旗本

御備立

右御樓門并

御覽、依時宜者

二之丸御門へ可參着候、

御出馬被遊儀モ可有之候条、

一御先手

兼テ其心得可罷在候、出陣相図等之儀以

右下馬辺へ可參着候、

別紙被 仰出候、此節之儀、攘夷ハ勿論夷土御征伐

一御城下守兵

彼等悉降伏不致候テハ

右一番ヨリ四番迄

神州之御武威難相振、旁

造士館ヨリ南泉院前迄、

御両殿様御配慮之

五番・六番ハ岩崎御門前可參着候、

御旨趣被為 在候

一一番早鐘

御事候条、猶亦一同精心ヲ凝シ

但、方限員之役吹次、
(順力)

御趣意貫通一致一和ヲ本トシ追々被 仰出候、姑息

右相図候者組々方限へ可相集候、

偏固之旧習ヲ失除シ、忍小成大之四字熟考肝要之事

一二番早鐘

二候、万一モ不可忍之非礼ヲ受候トモ

右相図ニテ御定場へ可參着候、

御軍律有之候ニ付、私之義論一切可為無用候、此由

以上、

不時

御備立

御覽等之儀ニ付、

御別紙式通之通被

仰出候条、

御深慮之程一統謹テ可奉承知旨向々へ不洩様早々可

致通達候、

五月

(島津久敏)
大藏

(小松清康)
帶刀

(川上久運)
但馬

(川上久美)
式部

右通被仰出、

御出馬モ被為 在候ニ付テハ何方へ出軍候テ訓練等

有之候モ難計、吉野又者福山原迄モ被差越候儀モ可

有之哉ト申事候、就テハ御手当被 仰付置候人数早

速承知不相成候テ不相濟事候ニ付、六組何レモ諸役

者・什長御用差出候得共、多人數之触方ニテ足輕致

不足、夕ヨリ谷山江足輕御用申渡ニテ早々来夫触方

相成候モ有之段承候ニ付、何レ間後レニ不相成候様

無之候テ不相濟事候間、拙者方ヨリ又々御用差出候

得共、今晚ハ夜通シニ老兩人ツ、御用之人々罷出夜

明シニテ候、権五郎組モ拙者宅ニテ申渡相成、権五

郎殿ニハ八ツ過被帰候、残り人数ハ拙者ヨリ相達候、

お村様・おミち様御出、新次郎殿同断、指宿猪之介

との・町田喜次郎殿同断、基太村助左衛門殿ニモ被

来候、

二日 晴、

朝六ツ起、五ツ半出 殿、四ツ時ヨリ造士館へ罷出

候、講釈席詰濟ヨリ今日者関山糺請持之大門口台場

打ニ参候処、

上様ニモ御出ニテ候、八ツ前帰宅、前おこととの・

戸柱おこととの・おむら様・基太村庄次郎との・宮

内彦次との、夜木尾彦左衛門殿被来候、九ツ時分隊

候事、

(二七三頁文書に同じ、本文略)

文久三亥四月取調

士分以上当分勤有之候八十歳以上名前

二番組方限

御記録所御蔵番人

御納戸支配

横山喜七郎

下地金貝師
一代御小姓与

八十

田中善兵衛

八十五

御勘定方小頭

三番定役

田上藤八

永田助七

八十三

八十二

小山田村

庄屋

田中恕兵衛

八十二

三番組方限

表御包丁人頭

八十二

五十幡小仲太

御船奉行格・物奉行勤明和七年生レ

九十四

月野木万右衛門

物奉行

八十六

橋口次兵衛

御記録所書役

八十二

左近允清兵衛

御鉄炮奉行・御船奉行勤

八十一

橋口李左衛門

四番組方限

物奉行・御勘定方小頭

八十八

川西嘉右衛門

御広敷番之頭

八十一

今井喜平太

屋久島奉行・御勘定方小頭

八十

鎌田越右衛門

地方検者定役助

八十

日置半兵衛

五番組方限

御使番・御記録奉行勤

八十二

伊地知小十郎

御鳥見頭

八十一 牧金左衛門

郡奉行見習

八十 有馬藤兵衛

藏方目付

八十 別府四郎兵衛

六番組方限

御広敷番之頭・御広敷横目

八十二 鎌田強兵衛

櫛方検者

八十 堀添覚藏

田畑見締勤

八十三 隈崎仁左衛門

御使番・奥医師

田代意運

御使番・助教勤

八十六 新納弥太右衛門

御広敷御用人

八十一 河俣仲太夫

士分以上勤無之男女八十歳以上

一番組

田中半藏 谷山次郎右衛門

八十四 母 八十九 母

二番組

本城源七郎 大河平弥兵衛

八十 母 八十四 母

床次正藏 宇指雅次郎

八十三 養祖母 八十二

凶師一作 田代太郎太

八十六 母 八十二 母

三番組

有馬武左衛門 左平太養祖父
相良右舟

九十一 母 八十三

石原市助 萩原清右衛門

八十五 母 八十四 養母

松元新左衛門 清左衛門養父隠居
竹崎仲太夫

八十五 養祖母

兒玉兵之丞 新四郎親隠居
吉田倫右衛門

八十三 母 八十一

小牟田次右衛門 浜田庄右衛門

八十五 祖母 八十 祖母

迫田喜兵衛 入田次右衛門

八十三 母 八十二 母

四番組

奧藏親隱居
奥酒仙

園田彦左衛門

八十二 八十五 母

村田愛次郎 野村源兵衛

八十五 祖母 八十六 母

帖佐矢一郎 伊集院藤右衛門

八十四 母 八十一 祖母

井上七郎 大橋喜右衛門

八十三 養母 八十六 祖母

中村幸右衛門 鳥居九左衛門

八十二 養祖母 八十二 母

平瀬弥兵衛

八十四 祖母

五番組

矢野半助亡祖父
矢野清藏

大迫新藏

八十二 妻 八十 養母

中山佐五右衛門 東郷藤十郎親隱居
東郷東海

八十八 母 九十一

有川治右衛門 園田郷右衛門

八十 祖母 八十六 母

加藤平八 小倉清右衛門

八十 祖母 八十三 母

樺山武左衛門 否笠猪之介

八十二 母 八十一 祖母

六番組

清一郎祖父
宮内玄清

新納休右衛門

九十 伊集院亘組 八十二 母

山名二郎 伊藤源五左衛門

八十三 八十一 母

田中宗俊 松岡喜左衛門

八十二 祖母 八十四 母

上原玄与 伊東孫之丞

八十四 母 八十四 母

吉見惣左衛門

八十四 母

八十才以上家来男女

大脇源五右衛門家来

八十一 田中次郎右衛門

三原伝左衛門家来

八十二 藤山金四郎

面高尚之丞家来

八十四 永吉伝兵衛母

調所藤内左衛門家来

八十三 福留善五郎

村田平右衛門家来

八十四 岡野長五郎妻

山田一介家来

八十五 広岡八十右衛門

伊地知才右衛門家来

八十四 中馬四郎兵衛

三原 右衛門家来

八十一 竹之内藤次郎母

石黒戸後左衛門家来

八十五 勝目次郎八母

若松平八郎家来

八十 岡元金次郎

川上万之助家来

八十五 舞田金袈裟

讚良休兵衛家来

八十九 今村小八母

上村叶家来

八十八 森彦右衛門

三日 快晴、

朝六ツ起、四ツ前出勤、八ツヨリ調練場へ出候、同

席中惣テ出会、什長并談合役・昇預、貝・太鼓役惣

呼出調練有之候、調練場ヨリ暮引取直ニ帰宅、今日

ハ御規則通之調練ニテ候、夜四ツ時分臥候事、朝木

尾彦左衛門殿入来、おむら様御出、新次郎殿ニモ同

断、

四日 大雨、

朝六ツ起、主税へ鐘教イタシ、四ツ時造士館へ相勤、講釈済ヨリ 御殿の方へ御用有之出 殿、八ツ半帰宅、四ツ時分隊候事、おむら様(以下文)

五日 快晴、

朝六ツ起、五ツ前ヨリ戸柱町田家・野村氏・重富屋敷御三方・今和泉屋敷御両方・宮之城・垂水へ御近習迄当日之御祝儀ニ罷出候、九ツ半時分御暇、梅田家升形・平佐おつやさま・島津内記様(入彦)へ一刻ツ、罷出候テ八ツ前帰宅、今日ヨリ御手当之本府旗ハ物主宅へ預り太鼓者太鼓役預り相成候テ、則足輕持来候、且談合役馬ハ高役之馬三十日宛当番相立、当人宅ヨリ実出張・調練共ニ乗出、中間モ馬主ヨリ差出候様被仰付候ニ付、馬主へ無間違様口合置候様相達置、依テ右門組・拙者組銘々拙者宅江御用差出相達置候諸役者へ付候ニ付、足輕モ銘々今日拙者方へ来候ニ付致面会候、今日ハ一寸相企三男吉次郎昇立納イタシ、おむら様御出、奥山藤左衛門殿ニモ一刻入来候、昼ハ段々客人有之、不書留候、

六日 快晴、

朝六ツ起、四ツ前出勤、九ツ前御備立御相図之早鐘鳴候ニ付、直ニ無供ニテ無休駈戻り、支度替供揃馬杯モ仕掛相待居候処、拙者組之衆七十四人、外ニ昇持之足輕老人無間駈付来候ニ付、二番早鐘相待居候処、先刻鳴候由ニテ島津右門組ハ唯今繰出相成候段承、尚又承候処、弥其通ニテ押太鼓ニテ足並ヲ揃(入彦)へ蛭子社前通、川上但馬殿前通、立馬場通、北郷哲五郎殿角ヨリ末川久馬殿前通、吉野橋へ行掛候処、右門殿馬ヲ乗付イマタ二番之早鐘ハ不鳴候間、此辺へ控居候テ可然歎ト被申候ニ付、拙者ニハ則家来ヲ平佐役人へ遣候テ内玄喚前辺差掛之事ナカラ暫之間拝借イタシ度申入候処、裏門ヨリ繰入候ハ、何ソ差支無之段承候テ、則談合役ヲ昇預へ遣太鼓ヲ打候ハ、平佐裏門ヨリ内玄喚前へ暫滞陣之段申遣、太鼓ヲ序調ニ為打候得者則昇押立如約參候、暫シテ二番早鐘鳴候ニ付、裏門ヨリ太鼓打立御定之御樓門下へ出陣、八ツ前(忠義)太守様御樓門ヨリ

御出馬被為

在、八ツ時

御旗本ヨリ繰出之御太鼓鳴候ニ付、御先手御旗本・

三郎様御旗本ト順々調練場之様被差向、行掛調練相

初り大鐘相濟、御軍役奉行・御小姓与番頭中

御前へ被 召出攘夷之

仰出拜聞、夫ヨリ諸隊御賄被下、夕方

御帰陣、御太鼓急之調ニ被為打候ニ付、帰路一統

走通シ程ニテ 御城下へ駈集、本之通諸隊備立付御

暇、拙者宅玄喚庭迄押太鼓行軍、暮帰陣、惣勢御暇、

夫ヨリ則浴湯酒迎共ニ逢候テ四ツ時分隊候事、

七日 雨、

朝六ツ起、五ツ半重富屋敷・河俣氏・伊藤氏へ参出

勤、四ツ半御暇、 母上様先達而ヨリ之御病氣未御

快方無之、今日ハ八木称平早目ニ来ル筈候ニ付帰候、

夕ヨリ河俣氏へ参、無程帰宅、夜四ツ半隊候事、

攘夷之儀五月十日可及拒絶段御達相成候間、銘々各

之心得ヲ以、自国海岸防禦筋弥以嚴重相備、襲来候
節ハ掃攘ヲイタシ候様可被致候、

右之趣、万石以上以下之面々へ不洩様可被触候事、

四月

蛮夷掃攘トシテ一橋中納言殿当地発途、関東下向被

致候、此段向々へ可被相触候、

四月

別紙之通幕府ヨリ被仰出候ニ付、是迄申渡置候通愈

征夷之為粉骨碎身可尽誠忠モノ也、

攘夷之儀ニ付、別紙式通之通從

公義被仰渡、猶亦

御別紙之通

御筆ヲ以被

仰出候条、一統謹テ可奉承知候、

五月

（島津久敏）大藏

（小松清康）帶刀

（川上入道）但馬

（川上入美）式部

八日 雨、

朝六ツ起、四ツ前出勤、今日者拙者ニテ支配下へ仰出拜見、外ニ違事等モ有之候間、八ツ前帰宅、進達掛伊東郷十郎被来、書役ハ当分兩人ニテ権五郎殿・右門殿へ参候テ、拙者ニハ寄役之事候故不来候テ宜段申置候、八ツ時ヨリ七ツ時迄下御用触出置候ニ付追々罷出候、七ツ時ヨリ新次郎殿・おむら様・おせつとのニモ御出、四ツ時分御帰之事、おむら様ニハ御泊、

九日 間々雨、

朝六ツ起、平佐お津屋さまへ一刻立寄、四ツ前出勤、今日者来ル十二日於訓練場一隊訓練之儀相達候、八ツ後帰宅、太鼓役川上直左衛門ニテ宅へ御用触出置候テ八ツ半被来相達候、お村様今朝ヨリ無御帰御泊ニテ候、

十日 雨、

朝六ツ起、四ツ前造士館詰ニテ出勤、八ツ後退出掛

登殿へ参候テ大鐘時分帰宅、お村様今朝ヨリ無御帰御泊之事、帰候後 母上様御隠居へ居通シ、九ツ過臥候事、今朝ハ諸役者・什長拙者宅ニテ鉛渡シイタクシ候、

十一日 雨、

朝六ツ起、今朝美代藤兵衛殿・伊藤庸之介殿・川上十郎太殿・町田藤八殿被来候、四ツ八ツ出勤、直ニ帰宅、基太村新次郎殿・おせつとの御出、おむら様ニハ夜前御泊ニテ御居続キ、喜悅来候、夜九ツ過臥候事、夜前八五更過ニ 母上様御手水ニ御出ニ付御付添申上、粥ヲ上ケ、暫御案麻共サシ上候、御病氣漸々能キ方ニハ御向キ不被為 在込入事ニ候、

十二日 朝大雨、後晴、

朝六ツ前起、六ツヨリ訓練場江出候、拙者組之訓練五番組島津仲殿（入彦）ニモ同断イタサレ候、四ツ過相濟直ニ帰宅、指宿猪之介殿・基太村新次郎殿・美代藤兵衛殿・おみちさま御出、夜九ツ時分臥候事、おむら

様昨日同断、

十三日 間々雨、

朝六ツ起、四ツ前出勤、今日者八木称平被来候筈ニ
テ御暇イタシ候、基太村新次郎殿・指宿猪之介妻之
つね来候、菓丸猪之介殿ニモ被来候、麦飯食ヒドモ
イタシ候、おむらさま昨日同断、今朝奥山藤左衛門
殿・田原直助殿被来、夜モ兩人同断、

十四日 快晴、

朝六ツ起、六ツ半過河俣仲太夫殿・美代藤兵衛殿へ
一刻ツ、参候、五ツ時ヨリ祇園之洲台場へ参候、権
五郎殿請持之台場打有之、拙者組諸役者・什長之衆
自分請持ニ相成候節之心得之為ニ拝見イタサセ候、
四ツ過相濟直二帰宅、新次郎殿御出、前おミちさま・
佐志おてるさま御出、おてるさまニハ御泊、おむら
様昨日同断、おミねとの被来候、四ツ時分被帰、美
代藤兵衛殿ニモ被来候、塩田吉次郎・同武右衛門ニ
モ来候、

十五日 快晴、

朝六ツ起、五ツ半出勤、母上様先達テヨリ之御病
氣少シ御念入、又医師彼是之儀等モ有之、四ツ前御
暇、四ツ半時分八木称平殿被来候、九ツ過比 母上
様少々御不塩梅被為 在候二付、前へ右之段申進候
得者於ミち様・平次郎殿・庄次郎殿少々御入来候、
新次郎殿ニハ今朝御出居ナサレ候、おむら様・おて
る様夜前ヨリ御泊、八ツ後ヨリおせつとの・美代藤
兵衛殿・伊藤六郎右衛門殿・井上弥兵衛殿・宮里喜
次郎殿・大山新兵衛殿・指宿猪之介殿・児玉佐平次
殿被来、各夜九ツ過被帰、おむら様・おてるさま・
平次郎殿・庄次郎殿・新次郎殿夜明シ、前おことと
のモ昼被来、お筆九ツ過ヨリ来、戸柱おこととの大
鐘比ヨリ来、各夜明シ、称平殿粉菓被差上、一日ニ
朝昼夕ト三度ツ、御用ヒ有之候様被差上被召上候処、
余程能是丈ハ御ノント無御滞御通り、且ヤマモ、ヲ
切ニツ、ミシボリ差上候様被申候二付、則其通リイ
タシ差上候処、是モ能ク御吞込ナサレ候、

十六日 快晴、

夜前ハ 母上様御病氣ニ付テ夜起、段々夜起之衆有之、委クハ不記候、今朝ヨリ余程御衰弱、九ツ時分ヨリ又御模様不宜、医師称平・冲瑞雲・平田玄裕申遣、八ツ時分終ニ御養生無御叶御死去アソハシ候、誠ニ以御残多次第、玄裕殿被来、外両医師ハ間ニ不逢候、夫ヨリ追々段々来候衆有之、委クハ記ニ無暇候、今晚六ツ半時 御入館(禰乃)、明日御葬式之賦候、夜九ツ過臥候事、

十七日 快晴、

朝六ツ過起、終日在宿、朝ヨリ見廻且ハ加勢之衆余多故銘々ハ不記候、

十八日 十九日 二十日

二十一日 廿二日 廿三日

廿四日 廿五日今日迄 廿六日表向ハ今日迄

廿七日今日迄

右之間忌中ニテ在宿、毎日一度ツ、花舞軒 御位牌參・御墓參イタシ、客人等ハ多々有之候得共略ス、

御通達之写

(患義) 太守様当春

御參勤之儀、

(入光) 三郎様御上京被

仰出候ニ付、右御用濟被遊

御參府候様被

仰出置、

三郎様被遊

御下国候得共、方今不容易世態、御手当向旁

御直ニ御下知不被遊候テハ不被為済折柄ニ付、此涯

不被遊

御參府旨御届書於大坂御老中水野和泉守様江被差出

候処、御落手相成候、此旨向々ハ可致通達候、

五月

(小松清庵) 帶刀

諸郷御備組手当向ニ付、御軍役方御役々并物主等之間、不時被差越人数揃之上調練見分可被仰付儀モ可有之候条、人数円メ方相図等之次第ハ夫々兼テ治定モ可有之儀ニテ、至其節混雜ハ無之筈候得共、尚又

可申談置候、此段早々可被申渡旨、地頭并地頭用達
へ申渡、可承向へモ可申渡候、

五月

(島津久敏)
大藏

(齊彬養女)
貞姫様御事、当秋被遊

御上京筈候条向々へ可申渡候、

五月

帯刀

二十八日 晴、

朝六ツ前起、六ツ半ヨリ上方礼廻、花舜軒御墓参詣、
四ツ前出勤、八ツ帰掛モ同断ニテ大鐘帰宅、暮ヨリ
(島津久住)
内記様へ罷出、四ツ前帰、夜四ツ時分臥候事、

二十九日 晴、

朝六ツ半ヨリ荒田方千石馬場平辺礼廻ニテ、四ツ前
出 殿、四ツ時ヨリ造士館へ相詰、八ツ後帰宅、
御墓参共イタシ暮ヨリ伊藤家おとくとの被来逢出精
落候、四ツ前被帰、四ツ過臥候事、八ツ後市来次十
郎殿被来候、

晦日 晴、夕霧雨少々、

朝六ツ起、朝御墓参、其外礼廻等少々イタシ、四ツ
前出勤、八ツ後退出、今日者

母上様二七日御日柄ニテ、新八郎殿・新次郎殿・お
むら様・戸柱おこととの御入来、お筆ニモ来候、木
尾彦左衛門殿今朝被来候ニ付庭取集相頼、夜入四ツ
時分被帰候、困窮之人故金米ナト少々進メ候、四ツ
過臥候事、

日史第二十四

名越時敏(花押)

文久三年癸亥六月中

朔日 晴、

朝六ツ起、五ツ過出勤掛花舜軒并御墓へ参詣、五ツ
半ヨリ出 殿、八ツ後退出、伊地知才右衛門殿・美
代藤兵衛殿・町田藤八殿被来、七ツ後ヨリ野屋敷へ
参、夕帰宅、夜四ツ時分臥候事、

二日 間々雨、

朝六ツ起、奥向訓練ニ付二之丸へ五ツ半ヨリ罷出物
主イタシ候、忝人ハ島津求馬殿（久邦）ニテ候、九ツ半時分
帰掛登殿へ一刻參、直ニ帰宅、森喜右衛門殿入来、
夜四ツ時分臥候事、

三日 間々細雨、

朝六ツ前起、六ツ半ヨリ訓練場へ參候、高橋要人殿
組一隊訓練ニ付見ニ參候、四ツ前相濟、夫ヨリ直ニ
野羽織立揚之儘ニテ造士館へ相勤、八ツ後退出、八
ツ後書役川上八十次殿被来、夕平田玄裕殿一刻參リ
候、四ツ時分臥候事、

四日 晴、所々二雨雲立、

御墓參、四ツ八ツ出 殿、今日ヨリ与方三階広メニ
付御修甫御取付有之、杉之間へ御成就迄之間御座立、
一今日島津求馬（久邦）御側役勤被仰付候、

御通達之写

江戸上御屋敷

思召之訳被為

在候ニ付、御家作廻御取毀ニテ渋谷御屋敷へ上御屋
敷被召建候旨被

仰出、其段申越置候处、御用番井上河内守（正徳）様へ御届

相濟、其通手当相成候段申来候、此旨向々へ可致通
達候、

六月

（小松清庵）
帯刀

大番頭・御小姓与番頭詰席取広方ニ付成就相成迄之
間、明三日ヨリ杉之間縁類ニ相掛御座立可被仰付候、
左候テ、朔望等ニ付無役大身分出仕之節ハ菊之間へ
控席被仰付候条、可承向へ可申渡候、

六月二日

（川上久美）
式部

五日 晴、所雨雲間々立、

今日者造士館詰武術見分共イタシ九ツ前帰、今朝沖
氏へ參、九ツ過沖瑞雲殿被来、徳熊頼、先日ヨリ平
田氏へ頼見候得共今日断候、

今朝伊藤・河俣氏・奥山氏へモ参り候、

御座問合之写

小番・新番・御小姓与居所目印ニ木札相記、門柱ニ
頭シ置候様申出置候処、可為申出之通候旨式部殿ヨ
リ被相下候ニ付、明日一番組ヨリ三番組迄触支配聞
前 御用申渡可相達候間、此段御問合申達候、以上、
但、四番組ヨリ六番組迄ハ明後日可相達候、

六月六日

大番頭・御小姓与番頭詰席取広方付高奉行所之儀、
今六日ヨリ成就迄之間護摩所・客殿

御着座席相除、御座立被仰付候条申渡、可承向へモ
可申渡候、

六月六日

(川上入美)
式部

六日 快晴、

朝六ツ前起、六ツ半時分ヨリ今日者於調練場吉利群
吉殿大砲隊十五発玉打、市田^(兼賢)隼人殿五発玉打、十発

空砲打、村橋昇殿小銃隊調練有之候ニ付見ニ参候、
四ツ時帰宅、終日在宿ニテ書見共イタシ候、夜入四
ツ時分臥候事、

一先月廿六日朝於京師姉小路少将殿^(公知)刺客之嫌疑ヲ受、
仁礼源之丞・島津織部家来田中新兵衛儀、^(雄平)伝奏坊城
宰相中納言様ヨリ御達之旨ヲ以、所司代家中同伴ニ
テ右坊城様御宅へ被召出、其儘東町奉行所へ御預ケ
相成候段申来候ニ就テハ、不容易重大之事柄ニテ
御名目ニモ相係、被為対

天朝

御両殿様深

御恐懼之御事候得共、昨年来尊王之

御忠誠御尽力之 御偉業ハ一同奉承知通ニ候間、此
末之処一時之浮説流言如何様致沸騰候共、尚永年朝
廷尊奉之

御至誠

御卓立之

思召ニ候間、諸士末々迄疑惑ヲ不生、愈

御趣意奉汲受忠勤相勵候様可申達旨

御沙汰被為

在、誠以難有次第之御事候条、此旨一統奉承知候様

向々へ早々可致通達候、

六月

（小松清廉）
帯刀

一 御数寄屋掛

一 御菓園掛

一 御厩掛

右掛川上龍衛（久慈）へ被仰付置候得共、大目付寄被仰付候

二付、掛被仰付迄之間、島津出雲被承答候、此旨可

承向々へ可申渡候、

六月

（川上久美）
式部

金壹両

代錢九貫文

右者是迄八貫文替ニテ致通融候様申付置候得共、大

坂表金相場高料二付御定直成右之通被相替候条、今

日ヨリ御蔵々入払者勿論、御領國中一同致通融候様

申付候、此旨支配中江申渡、奥掛・表方へ相達、諸
郷・私領へモ可申渡候、

六月九日

式部

七日 晴、

朝六ツ起、五ツ半出 殿、四ツ前ヨリ講堂へ相勤候、
八ツ後帰宅、七ツ時分ヨリ花舜軒御墓参詣、直二帰
宅之事、

八日 晴、昼相応雨降、

朝六ツ前起、六ツ過ヨリ城ヶ谷辺へ見舞、山ヲ越相
良治部殿（長巻）へ見廻、夫ヨリ永吉川田家・原良新納源左
衛門殿・倉山民五郎殿・関山糺殿（金生）・町田民部殿（久慈）へ参、
四ツ前出 殿、八ツ後退出、直二帰宅之事、夜町田
六郎左衛門殿・辻元新兵衛来、塩田吉次郎来、馬せ
ん作、

九日 晴、

朝六ツ起、五ツ半登殿へ一刻参、造士館へ相勤、八

ツ後帰宅、塩田昨日同断来、夜入四ツ時分帰候事、

モ一刻、四ツ八ツ出 殿、直ニ帰宅之事、

十日 晴、

十五日 快晴、

朝六ツ起、花舜軒御墓・浄光明寺参詣、帰宅、四ツ
八ツ出勤之事、

朝六ツ起、五ツ半出 殿、今日ハ町田内膳(久憲)祖母へ年
齡ニ付御祝被下、拙者名代承候、於敷舞台申渡之御
格ヲ以川上正十郎ヨリ口達ヲ以承知、

十一日 雨、

町田内膳

今日ハ造士館へ相勤候事、

祖母

十二日 大雨、

右者七拾歳ニテ達者罷在、一段之事ニ
(久光)三郎様被 思召上候、依之御祝被下候段承知、御礼

今日ハ御殿へ相勤候事、

廻モ有之候得共、今日者多人数同断ニテ手分ニテ相

十三日 間々霧雨、

頼候、八ツ前御暇、重富屋敷へ静洞殿同断ニ付 御
両方へ御祝儀ニ参候、夫ヨリ戸柱町田家へ祝儀ニ参
候テ無程帰候、昨夕ヨリお筆参居、今夕帰候、今日

今日ハ造士館へ相勤、七ツ時ヨリ処々乗廻シ、此節

美代藤兵衛殿・松岡喜左衛門殿被来候、夜九ツ時臥

一希賢堂へ一刻、戸柱町田家へ一刻立寄候事、

候事、

十四日 間々小雨、

十六日 快晴、

朝六ツ起、五ツ半出勤掛花舜軒御墓参詣、加藤家へ

朝六ツ起、五ツ過日高与一左衛門殿入来、四ツ八ツ

出勤、八ツ後町田民部殿入来、夜九ツ時分隊候事、

御近習

米良龜之介様

米良織衛

一 文学

小河小藤次

一 習書

那須民三

右、造士館へ御出席ニテ指南人御頼入有之候様被仰付候、

右前条同様被仰付候、

一 御軍賦

右、御軍賦役之内へ御尋問有之候様被仰付候、

右者此節龜之介様御儀、学問武芸為御修行御当地へ被差越候二付、右之通夫々御入門ニテ稽古方被成度御願之趣被応其意候二付、教導方行届候様被仰付候、

一 劍術

右、鈴木弥藤次方へ御入門、演武館へ御出席御修行有之候様被仰付候、

此旨教授并御軍賦役・師家之面々へ可申渡候、

六月

（川上久美式部）

十七日 快晴、

一 馬術

右、高橋甚五兵衛方へ御入門、同人へ被渡置候、於

朝六ツ起、四ツ前出勤、四ツ過御暇、今日者 寿昌

馬乘馬場御修行有之候様被仰付候、

一 炮術

右、未川久馬（久長）・野村彦兵衛へ同断、訓練場等ニオヒテ御修行有之候様被仰付候、

法名書方拙者イタシ候、八ツ時分帰、又々夕刻花舞軒御墓参詣、おむら様・基太村新次郎殿・河野八郎

左衛門殿入来候、四ツ過被帰、九ツ時分隊候事、東藤殿ニモ被来候、

龜之介様

十八日 快晴、

朝六ツ起、四ツ前島津権五郎殿(久徳)へ一刻参候テ、夫ヨリ造士館へ相勤、八ツ後退出、近藤七郎左衛門殿・

美代藤兵衛被来候、夜四ツ過臥候事、

一中村御茶屋島津(久徳)図書殿へ一往御預被仰付候通達来候、

十九日 二十日 二十一日

右四ツ八ツ出勤、

二十二日 快晴、

今日者 母上様御法事ニ付御座相頼、朝段々客人有之、四ツ時ヨリ花舜軒へ参候、主税同断参候、今日者痢病症ニテ頭痛等イタシ中々難儀相臥候事、

二十三日 二十四日 二十五日 二十六日

右未快気ヲ得ス打臥居候、

二十七日 曇、

此日矢張病氣不致快気打臥居候処、昼七ツ時分異国

船渡来、御相図鳴候ニ付直ニ御定之潮音院辺見締ニ参、沖江段々異船相見得谷山辺へ相繋ル、潮音院へ今晚一宿夜明シニテ候、戦兵御相図ニテ各在宿之賦候処、拙者所ヲ在宿ト心得相集リ候段承候、

二十八日 晴、

今日昼時分谷山之方ヨリ沖小島ト砂揚場調練場之間ヲ通り前之浜へ異船七艘乗入候、夕方御殿ヨリ御用有之罷出候処、式部殿ヨリ御相図之早鐘ナシニ明六ツ時迄之間戦兵相集、御城下御定之場所へ罷出候様致承知、則立帰リ拙宅相集居候ニ付別テ仕合、則右之段相達、用事有之人々ハ暫者被帰候テ宜、今晚八ツ時ニ護摩所へ宿陣イタスヘク候間、九ツ時迄之間ニ各拙宅へ集リ呉ラレ候様相達候、刻限通り無相違被相集、八ツ時操出シ、今晚ヨリ護摩所へ宿陣候事、拙者ニハ横ニハ臥シ不申候、

第二十五

御通達之写

御一門方并島津又六郎一列、大番頭以下月次御札罷出候面々、奥・表・御勝手方諸御役人并於敷舞台被仰渡御用之儀有之候間、明十日四ツ時御本丸へ罷出候様向々へ可致通達事、

（久光）三郎様壹本御道具ニテ明十日草牟田御屋敷へ被為入、被遊

御逗留筈候、此旨向々へ可致通達候、

七月九日

（川上久通）
但馬

草牟田御茶屋

右ハ稻留八郎左衛門所、此節

御用地相成候ニ付、以来右之通相唱候様被仰付候条、

此旨向々へ可致通達候、

七月

（小松清康）
帯刀

此節夷船ヨリ打放候砲玉等屋敷掛又ハ心付之所へ落散居候者、早々御作事方へ可差出候、尤、無人等之モノハ形行書付ヲ以御作事奉行へ届可申出候、此旨

向々へ不洩様可申渡事、

国分

右ハ以来国府之文字ニ被召替候旨被仰出候条、此旨表方へ致通達、奥掛・御勝手方へ相達、諸郷・私領へモ不洩様可申渡候、

七月十一日

（川上久美）
式部

国府江（一成力）可応

御住居之儀被

仰出置候得共、誠ニ不容易重大之事柄ニテ尊慮難被

決、此上ハ被任

神慮候

御趣意ニテ、

（實久）大中公へ御圖御頂相成候処、国府御住居之処ニ

御託宣有之候ニ付、弥被

仰出置候通

御決定被為

在候、尤、諸士一統モ被召移、征夷之御手当向嚴重

被相備度

思召ニ候段被

仰出候条、此旨表方へ致通達、奥掛・御勝手方へモ

相達、諸郷・私領へモ可申渡候、

七月

式部

九日 晴、

朝六ツ時ヨリタシタトフ野屋敷へ参り候、四ツ前婦、

四ツ前南泉院へ出勤、八ツ後帰宅、触支配へ達シ事

有之、御用之人数未相揃ハザル内ニ又々南泉院ヨリ

只今御用有之罷出候処、異船渡来之節駈付場相替り

候御達ニテ候間、明四ツ時御用差出置候、其内渡来

モ候ハ、是迄之御定場所ヨリ引列候賦夫ヨリ駈付場

列越候考ニ候、又今夜八ツ過只今御用南泉院与方御

座ヨリ申来候処、是迄ハ英国船見掛次第直ニ打払、

其外之国々之船々ハ御命令之打払候様先達テ相達置

候得共、英船逆モ 御命令無之内ハ不打払候様（可上久巻）式部

殿ヨリ吉利群吉承知、是モ明日相達賦候、

諸座書役夫々御手当被仰付置候面々、臨時之節繰合

罷出事候得共、此節体急変之節不相勤候テ不叶向、

以来何人勤場へ罷出御用差支無之段、明後日限以書

付届申出候様向々へ可申渡事、

無益之人馬不召仕候様ニト之趣者追々申渡置候通ニ

候、然処此節柄人馬疲勞之儀、別而

御苦慮被

思召上、毎々

御沙汰モ被為

在候ニ付、多々臨時之仕方可有之者案中ニ候間、向々

ニオヒテ厚心ヲ用ヒ、決テ無用之仕方無之様可心掛

候、右ニ付テハ第一郡奉行専務之事候付、

御趣意致貫通御用品ニ応シ見当ヲ付可致差引候、此

旨早々可致通達候、

七月

（小松謙應）
帯刀

十日

朝六ツヨリ野屋敷へ参候テ五ツ半帰宅、今日敷舞台

ニ而仰渡御用之儀有之、四ツ時出 殿、 御筆拝聞、

今日七ツ後宅ニテ六番中家督前老人ツ、召出拝聞、

弘人ハ曾山甚七殿ニテ候、同役島津右門殿入来、進

達掛村橋宗之丞・書役川上八十次被来候、七ツ半時

分相濟又野屋敷へ参候テ暮過帰宅之事、

十一日 晴、

朝野屋敷、四ツ八ツ南泉院出勤、八ツ後帰宅、仕長・

談合役御用ニテ申渡事有之、

十二日 間々雨、

四ツ前出勤、八ツ退出掛同席御用談ニテ種子島家玄

喚へ一刻参候、夫ヨリ帰宅、島津登殿へモ一刻立寄、

是ハ今日権五郎殿先日祇園之洲台場異船打払之節、

尽粉骨被相働、為軍賞今日 御鉄炮一挺・御陣羽織

一ツ拝領之祝儀ニ参候、家内中ニテ盃トモイタシ度

候ニ付罷居候様承候得共、宅へ仕長御用出置、種子

島家ニテモ同席談合之事有之候間、後程可参卜申断

帰候テ、仕長・談合役等談合候事有之、相濟大鐘比

ヨリ升形へ参候而、四ツ時分帰宅之事、

十三日 雨、

朝六ツ起、四ツ前升形へ一刻、内記録へモ一刻参候

テ、四ツ前出勤、九ツ時ヨリ園牟田御屋敷へ台場築

立御伺之事ニ付罷出、願通り則御免有之、夫ヨリ上

方海岸見廻り候テ祇園之洲迄参、七ツ過帰宅之事、

御通達之写

一 御陣羽織 一 宛

新波戸台場物主 川上右膳(久寛)

弁天波戸台場物主(長発) 相良治部(久徳)

北郷数馬(金生) 大門口右同 関山礼(久直)

砂揚場右同 島津織之介(仲信)

水軍隊物主 仁礼舍人

右者今度英夷侵入之砌、為物主諸所台場相堅、
尽粉骨致指揮候段被

聞召上、

御満足之至

思召候、為軍賞

右之通拝領被

仰付候条、愈可抽

忠勤旨被

仰出候、

一御鉄砲 老挺

一御陣羽織 一

島津權五郎(久壽)

右者今度英夷侵入之砌、為

御先手物主祇園洲台場相堅、英艦數艘引受、砲台相

壞候迄致苦戰、終二一艘打居候段

御満足之至

思召候、為

御褒美右之通

拝領被

仰付候条、愈可抽忠勤候様被

仰出候、

右之通被仰付候条、向々へ可申渡候、

七月(川上入美)
式部

鑄物主

右今度御用地相成候島津主殿居屋敷以来、右之通相(久壽)

唱候様被

仰付候条、向々江可致通達候、

七月(小松清庵)
帶刀

国府江

御住居ニテ追々諸士一統モ被召移、防禦之御手当向

嚴重御手可被付段被

仰出置候得共、何分急速之運相付兼候二付、尚又

御熟慮之上神瀬并桜島燃崎へ神速御台場御造築、守

備十全之術ヲ被尽

思召二候、就テハ国府

御住居之儀

御延引ニテ被遊

御帰城、諸事

御指揮可被遊段被

仰出候、此旨表方へ致通達、奥掛・御勝手方へ相達、

向々へモ早々可申渡候、

七月十六日

帶刀

海岸防禦之御手当向、精々御手相付タル事候得共、

臨現時未十分之御備トモ難申候ニ付、別段之

思召ヲ以上瀬(神瀬カ)并桜島燃崎へ台場御造立被

仰付候付テハ、大砲地金致不足候ニ付諸寺院ハ勿論、

大身之面々ヨリ諸士末々郷士浦々ニ至迄、所持之銅

器類品々差出候様被仰付候、当時節御両殿様深被遊

御配慮、不容易御用途相備候

儀ニ候間、

御趣意克々奉汲受、日用之品タリトモ差出候様被

仰出候、此旨表方へ致通達、奥掛・御勝手方へモ相

達、諸郷・私領へモ不洩様早々可申渡候、

七月

帶刀

十四日 大風雨、

朝六ツ起、四ツ時ヨリ種子島家玄喚迄參候、五番・

六番物主ハ勿論、談合役・什長惣テ出会候、上方津

畑見分之筈候処、此大雨ニテハ中々出来兼候ニ付引

取ニテ候、終日在宿ニテ盆祭、暮ヨリ御墓參、前并

戸柱町田家・伊藤家へ參候、四ツ時分掃宅、九ツ時

分臥候事、

十五日 雨、

朝六ツ起、五ツ時分ヨリ野屋敷へ參り候テ四ツ過掃

宅、終日盆祭ニテ暮ヨリ御墓參イタシ、九ツ時御先

祖様方御立、夫ヨリ例之通家内中ニテ諸子祝、八ツ

時臥候事、

十六日 間々雨、

水軍兵士

物主(時也)
北条織衛

右者水軍兵士百式拾人之儀、一往陸兵ニテ上新築地

辺警衛被仰付候ニ付、右之通被仰付候条可申渡候、

但、郡山一組物主之儀被成御免候、

七月

(川上久美)
式部

北条織衛

右者水軍兵士物主被仰付候付テハ、御手当向等之儀、
何篇御小姓与番頭申談致取扱候様被仰付候条可申渡
候、

七月

式部

海岸防禦御手当向二付、大砲御鑄造地金不足二付、
所持品之銅器類早々差出候様卜之儀者先達テ申渡置
候通二候、依之右品致所持候向ハ築地本鑄製方跡出
張、見聞役方へ差出候様可致候、此旨早々表方へ致
通達、奥掛・御勝手方へモ相達、諸郷・私領へモ不
洩様可申渡候、

七月

式部

諸御役座一往南泉院へ被召立置候得共、此節被遊

御帰城候旨被

仰渡候二付、明後廿日ヨリ本々之通

御本丸へ相勤候様被

仰付候条、此旨表方へ致通達、奥掛・御勝手方へモ

可相達候、

七月十八日

(川上久連
但馬)

当八朔御規式不被遊

御請、進上物相納御祝儀相濟候筋被仰付置候得共、

別段之以

思召当日御一門方

御目見被仰付候二付、八朔付テハ御祝儀ハ進上物相

納、謁ニテ相濟候筋被仰付候条、向々へ可申渡候、

七月

出雲

来月朔日御一門方初諸士・諸組・与力迄

御目見被仰付候段者別紙ヲ以申渡通候条、一統四ツ

時早目登

城有之候様、向々へ不洩様可申渡候、

七月

(喜入久高
摂津)

当八朔御規式ハ不被遊

御請候得共、今般英夷侵入之刻一統尽職掌出精相勤

候段、

御満足被

思召上、且被遊

御帰城候二付、当日御座之間へ

御出座、御一門方・島津（久治）図書殿・大目付以上

御目見畢テ

御対面所へ

御出座、島津又六郎一列・月次御礼罷出候面々・諸

士・与力迄モ

御目見被

仰付候、

但、奥向御近習通人数

御通掛

御目見之儀モ兼テ表

御出座之節之通被仰付候、

一 御目見後居残テ御礼於席々謁被申上、諸士ハ御帳ニ
相付退出可致候、

右之通被仰付候条、向々へ不洩様可致通達候、

七月

撰津